秋田県文化財調査報告書第253集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅨ

—古野遺跡—

1995・3

秋田県教育委員会

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＩＸ

—古野（この）遺跡—

１９９５・３

秋田県教育委員会

序

本県ではこれまでに約4,000箇所の遺跡が発見されており、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、歴史や伝統文化を理解し、未来を展望した香り高い地域文化を創造するうえで、欠くことのできないものであります。

一方、高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、精神的な豊かさに満ちた快適な生活環境の整備を推進するために、埋蔵文化財の保護と地域開発の調和に鋭意取り組んでまいりました。東北横断自動車道秋田線建設にあたっても、埋蔵文化財保護の一方法として、工事に先立つ発掘調査を実施して遺跡の記録保存に努めてまいりました。

本年度は秋田市で2遺跡の発掘調査を実施し、そのうち古野遺跡では、旧石器時代から近代までの遺構、遺物が発見され、平安時代と鎌倉時代には小さな集落が営まれていたことが分かりました。

本報告書は古野遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。本書がふるさと秋田の歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査並びに本報告書の刊行に当たり、ご援助、ご協力をいただきました日本道路公団仙台建設局、秋田市、秋田市教育委員会をはじめ、関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

秋田県教育委員会

教育長　橋　本　顕　信

例　言

1．本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の19冊目の報告書である。

2．本書は、1994（平成6）年度に発掘調査した秋田市にある古野遺跡の調査成果をおさめたものである。

3．本書の執筆は、谷地薫が行い、太田淳子の協力を得た。

4．陶磁器の鑑定は、東北陶磁文化館学芸員本田泰貴氏、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター文化財専門調査員羽柴直人氏にお願いした。

5．第5章の各種自然科学的分析は、㈱古環境研究所に委託した。

6．発掘調査および遺物整理にあたって、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、五十音順）

五十嵐芳郎　石郷岡誠一　和泉昭一　伊藤武士　小山内透　小林恵美子　菅原俊行
納谷信広　藤岡光男　村上　拓　安田忠市

凡　例

1．遺構実測図における方位は真北（座標北）である。磁北は西偏約7度40分である。

2．本書で使用している遺構の略記号は以下のとおりである。

SB（建物跡）　SD（溝跡）　SI（竪穴住居跡）　SK（土坑）　SKI（竪穴遺構）
SN（カマド状遺構）　SX（N）焼土群　SX（P）ピット群

3．遺構番号は種別を問わず検出順に連番としたが、精査過程で欠番となったものもある。

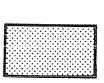
4．挿図中の遺物実測図・拓本・遺物写真は通し番号である。

5．掲載した実測図及び遺物写真図版の縮尺は、各図ごとにスケールを付けて表示した。

6．土層註記中の色調は、農林水産省農林水産技術会議監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

7．本書に使用した地形図は、国土地理院発行55,000分の1「秋田東部」、「羽後和田」、50,000分の1「秋田」、「羽後和田」、及び秋田市発行2,500分の1地形図である。

8．挿図中のスクリーン・トーンは以下のように使い分けた。これ以外のスクリーン・トーン、シンボルマークは各図中に凡例を示した。


攪乱

焼土

目　次

序
例言・凡例
目次・表目次・挿図目次・図版目次
第１章　はじめに…… 1
　第１節　発掘調査に至るまで…… 1
　第２節　調査の組織と構成…… 3
第２章　遺跡の立地と環境…… 4
　第１節　遺跡の位置と周辺の地形・地質…… 4
　第２節　歴史的環境…… 5
第３章　発掘調査の概要……10
　第１節　遺跡の概観……10
　第２節　調査の方法……11
　第３節　調査経過……13
第４章　調査の記録……15
　第１節　基本層序……15
　第２節　検出遺構と遺物……16
　　1　縄文時代……16
　　2　平安時代……19
　　3　鎌倉時代……27
　　4　近世～現代……37
　　5　時期不明……39
　第３節　遺構外出土遺物……46
　　1　旧石器時代……46
　　2　縄文時代……47
　　3　平安時代……47
　　4　近世～現代……49
第５章　自然科学的分析……50
　第１節　テフラ屈折率測定……50
　第２節　放射性炭素年代測定……52
　第３節　炭化材の樹種同定……52
　第４節　植物珪酸体分析……54
第６章　まとめ……56
図版 1～13

表目次

第１表　調査経過表……13
第２表　ＳＫ01土坑出土陶磁器一覧表……39
第３表　遺構外出土陶磁器一覧表……49
第４表　古野遺跡５ＫＮ－ＳＫ23の屈折率測定結果……50
第５表　秋田県とその周辺地域の縄文時代以降の示標テフラ……51
第６表　放射性炭素年代測定結果……52
第７表　炭化材樹種同定結果……53
第８表　古野遺跡の植物珪酸体分析結果……55
第９表　精製土器による各段階の住居跡数……60

挿図目次

第１図　計画路線と遺跡の位置……2
第２図　遺跡周辺の地形区分……3
第３図　遺跡周辺の地形……5
第４図　古野遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡……7
第５図　工事計画と発掘調査範囲……10
第６図　発掘調査区のグリッド設定図……12
第７図　遺構配置図……14
第８図　基本層序……15
第９図　ＳＩ21竪穴住居跡、ＳＫ14土坑……17
第10図　遺構内出土遺物（１）ＳＩ21竪穴住居跡炉埋設土器と文様復元図……18
第11図　ＳＩ10竪穴住居跡……20
第12図　ＳＩ10竪穴住居跡のピット……21
第13図　ＳＩ12竪穴住居跡、ＳＫ23土坑、ＳＸ(Ｐ)11ピット群、ＳＸ(Ｎ)13焼土群……24
第14図　遺構内出土遺物（２）ＳＩ10・12竪穴住居跡、ＳＫＩ15竪穴遺構……26
第15図　ＳＢ22建物跡……29
第16図　ＳＢ22建物跡のピットと溝……30
第17図　遺構内出土遺物（３）ＳＢ22建物跡溝内……31
第18図　遺構内出土遺物（４）ＳＢ22建物跡……32

第19図　ＳＫＩ15竪穴遺構……34
第20図　ＳＮ19カマド状遺構……36
第21図　ＳＫ01土坑……37
第22図　遺構内出土遺物（５）ＳＫ01土坑……38
第23図　ＳＫＩ02・04竪穴遺構……40
第24図　ＳＤ05溝跡、ＳＫ09土坑……42
第25図　ＳＤ18溝跡……43
第26図　ＳＸ(Ｐ)11ピット群のピット……44
第27図　遺構外出土遺物（１）旧石器……46
第28図　遺構外出土遺物（２）縄文土器……47
第29図　遺構外出土遺物（３）縄文時代の石器……48
第30図　遺構外出土遺物（４）土師器……48
第31図　遺構外出土遺物（５）磁器……49
第32図　御所野台地周辺の縄文中期後葉前半の土器……59
第33図　御所野台地とその周辺の縄文中期後葉前半の集落分布図……60

図版目次

図版１－１　検出した遺構群（北東から）
２　遺跡遠景（北から）
３　調査区全景（北から）
４　調査前の状況（南西から）
５　調査後の状況（南西から）
図版２－１　ＳＩ21竪穴住居跡の複式炉（北東から）
２　ＳＫ14土坑（北東から）
３　ＳＩ12竪穴住居跡、ＳＫ23土坑（北東から）
４　ＳＫ23土坑の炭化材（北東から）
５　ＳＫ23土坑の炭化材Ａ（北東から）
図版３－１　ＳＩ10竪穴住居跡（北東から）
２　ＳＫＩ15竪穴遺構（北東から）
図版４－１　ＳＢ22建物跡（北東から）
２　ＳＢ22建物跡（北西から）

3　ＳＢ22建物跡の北側の土層（北西から）
4　ＳＮ19カマド状遺構（北東から）
5　ＳＮ19カマド状遺構（北西から）
図版５－１　ＳＸ(Ｐ)11ピット群（北から）
2　ＳＸ(Ｐ)11ピット群、ＳＩ12竪穴住居跡（北東から）
図版６－１　ＳＫ01土坑断面土層（西から）
2　ＳＫＩ02竪穴遺構（北東から）
3　ＳＫＩ04竪穴遺構（北東から）
4　ＳＤ05溝跡（北東から）
5　ＳＤ18溝跡（北東から）
6　ナイフ形石器出土状況（南から）
7　調査区の北西にある石碑（北から）
8　石碑の裏面（南から）
図版７　遺構内出土遺物（１）縄文土器、土師器、珠洲陶器
図版８　遺構内出土遺物（２）土師器、珠洲陶器
図版９　遺構内出土遺物（３）陶磁器（ＳＫ01土坑）
図版10　遺構内出土遺物（４）陶磁器（ＳＫ01土坑）
図版11　遺構内出土遺物（５）陶磁器（ＳＫ01土坑）
図版12　遺構外出土遺物（１）石器、縄文土器、土師器、陶磁器
図版13　遺構外出土遺物（２）陶磁器、ＳＫ23土坑出土炭化材の顕微鏡写真

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、東北自動車道から岩手県北上市で分岐し、横手市、大曲市を経て秋田市に至る本県における高速交通体系の基幹をなす道路である。

秋田―横手間57.4㎞については、1978（昭和53）年11月の第８次施行命令によって建設が具体化し、1991（平成３）年７月に供用が開始されている。これに先立ち、この区間の工事路線内に存在する合計27遺跡の発掘調査が秋田県教育委員会によって1985（昭和60）年から1989（平成元）年まで実施された。この27遺跡の調査報告書11冊は既に刊行されている。

横手―湯田間19.7㎞については1986（昭和61）年３月に第９次施行命令が下され、現在建設工事が行われている。この区間のうち秋田県側の工事計画路線内に存在する10遺跡の発掘調査は1990（平成２）年から1993（平成５）年まで実施され、７遺跡の調査報告書が既に刊行されている。

秋田南インターチェンジ―秋田北インターチェンジ間16.0㎞については1990（平成２）年４月に第11次施行命令が下された。これに先立ち1989（平成元）年に日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内にある埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。秋田県教育委員会では1989（平成元）年から1990（平成２）年まで遺跡分布調査を行い、計画路線内に４遺跡（古野遺跡、石神遺跡、戸平川遺跡、蟹子沢遺跡）が存在することが明らかになった。これらの遺跡の取り扱いについて協議の結果、路線変更が不可能で工事によって消滅してしまう遺跡は緊急発掘調査を行い最終的には記録保存の措置をとる旨の1985（昭和60）年の日本道路公団と秋田県教育委員会の合意を踏襲することとした。その後、石神遺跡については工事計画路線が遺跡範囲外を通過することが判明し、発掘調査が必要な遺跡は古野遺跡、蟹子沢遺跡、戸平川遺跡の３遺跡であることが確定した（第１図）。1994（平成６）年４月、秋田県知事と日本道路公団仙台建設局長は、秋田市所在の２遺跡（古野遺跡、蟹子沢遺跡）について発掘調査委託契約書を交わし、発掘調査の実施に至ったのである。

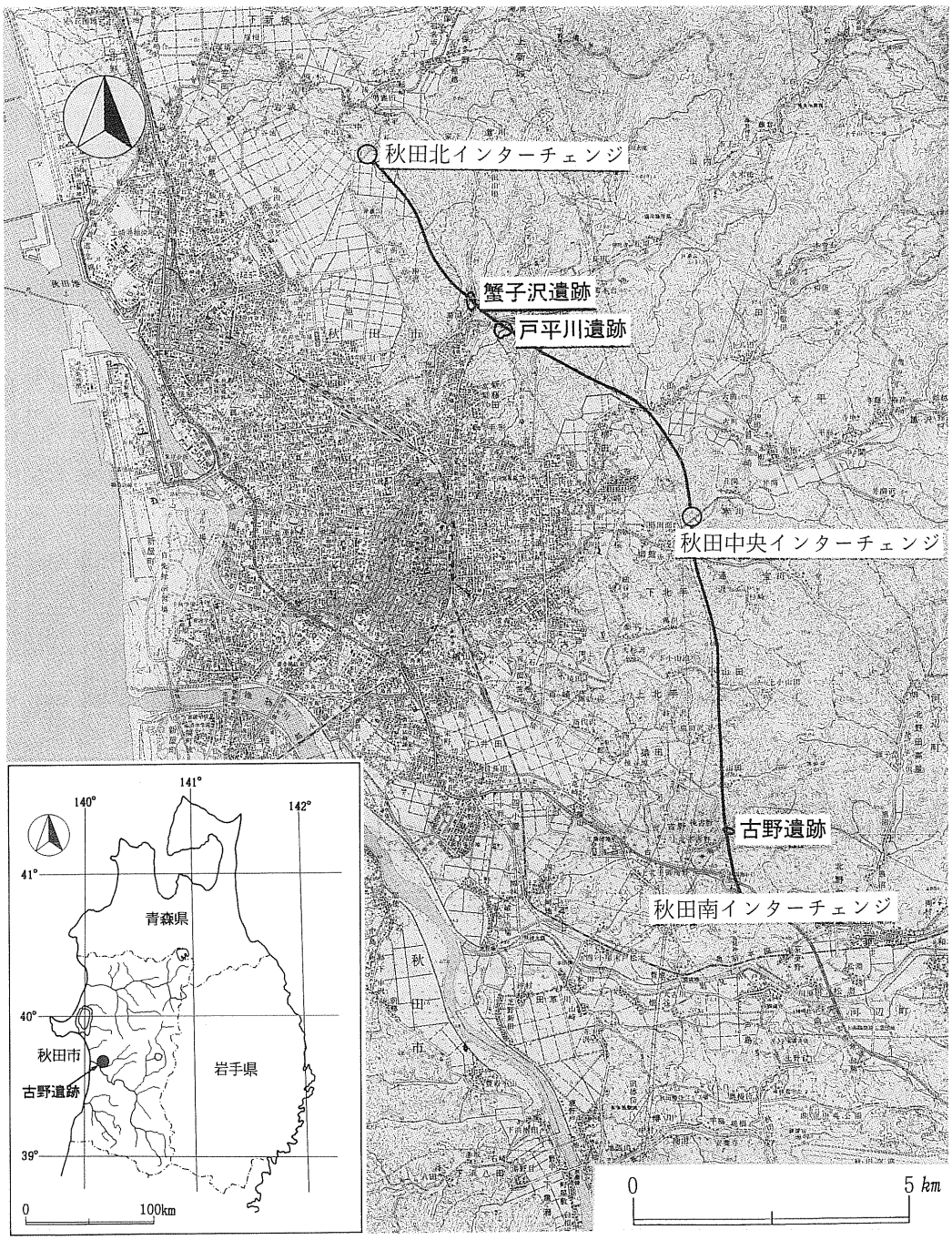
古野遺跡は1989（平成元）年と1990（平成２）年の分布調査に次いで1992（平成４）年と1993（平成５）年に遺跡範囲確認調査を行い(註)、遺跡範囲の大部分が工事計画路線内にかかり、工事によって遺跡が消滅してしまうこととなった。そのため、記録保存を目的とした発掘調査が1994（平成６）年度に実施されたのである。

（註）秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集　1990（平成２）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集　1991（平成３）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第239集　1993（平成５）年

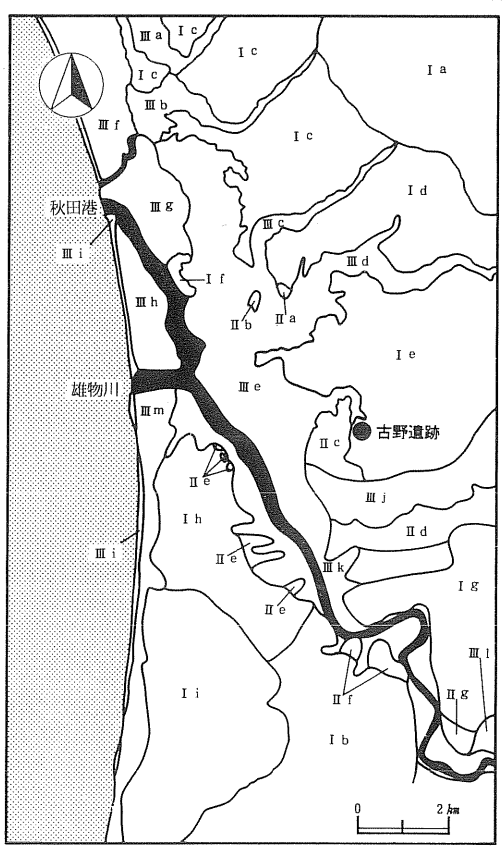
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第251集　1994（平成６）年



第１図　計画路線と遺跡の位置

第２節　調査の組織と構成

所　在　地	秋田県秋田市上北手古野字向老方16外
調 査 期 間	1994（平成６）年５月11日～６月17日
調 査 面 積	830㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	藤澤　　昌（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第１科学芸主事）
	谷地　　薫（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第１科学芸主事）
総 務 担 当	藤肥　良清（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
	佐藤　広文（秋田県埋蔵文化財センター総務課主任）
	須田　輝樹（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関	日本道路公団仙台建設局秋田工事事務所
	秋田市教育委員会



Ⅰ　山地・丘陵地

- Ⅰa　仁別山地
- Ⅰb　高尾山・観音森山地
- Ⅰc　上新城丘陵
- Ⅰd　羽黒山丘陵
- Ⅰe　和田丘陵
- Ⅰf　高清水丘陵
- Ⅰg　大平山丘陵
- Ⅰh　国見山丘陵
- Ⅰi　岩城丘陵

Ⅱ　台地・段丘地

- Ⅱa　手形山台地
- Ⅱb　千秋公園台地
- Ⅱc　御所野台地
- Ⅱd　戸島段丘地
- Ⅱe　豊岩段丘地
- Ⅱf　相川野段丘地
- Ⅱg　向野原段丘地

Ⅲ　低　地

- Ⅲa　馬踏川低地
- Ⅲb　新城川低地
- Ⅲc　旭川低地
- Ⅲd　太平山低地
- Ⅲe　秋田低地
- Ⅲf　天王砂丘地
- Ⅲg　土崎砂丘地
- Ⅲh　勝平山砂丘地
- Ⅲi　海岸低地
- Ⅲj　岩見川低地
- Ⅲk　雄物川低地
- Ⅲl　淀川低地
- Ⅲm　下浜道川砂丘地

第２図　遺跡周辺の地形区分

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と周辺の地形・地質

古野遺跡は秋田市の南部、ＪＲ奥羽本線四ツ小屋駅の東北東約 3.8 ㎞にある。北緯39度40分２秒、東経 140 度11分30秒の地点である。

遺跡は、旧雄物川の支流である猿田川の右岸の低丘陵地に立地する。この丘陵地は南縁と東縁を岩見川、西縁を猿田川、北縁を太平川に囲まれた東西約15㎞、南北約10㎞の和田丘陵で、猿田川を挟んだ西側には平坦な御所野台地が隣接し、和田丘陵と御所野台地の南には岩見川低地、西には秋田低地の沖積地が広がる。遺跡の位置は和田丘陵の西縁にあたる（第２図）。

猿田川の上流部は蛇行して北流し、右岸には和田丘陵の西縁を開析する多くの枝谷が発達している。遺跡の立地する低丘陵地も、南北をこのような枝谷で区切られた、東から西に細長く伸びる馬の背状の丘陵である（第３図）。丘陵の先端部から60ｍほど東側では、南東から北西に小さい沢が入る。遺跡はこの小さい沢に面した北東向きの斜面に形成されている。

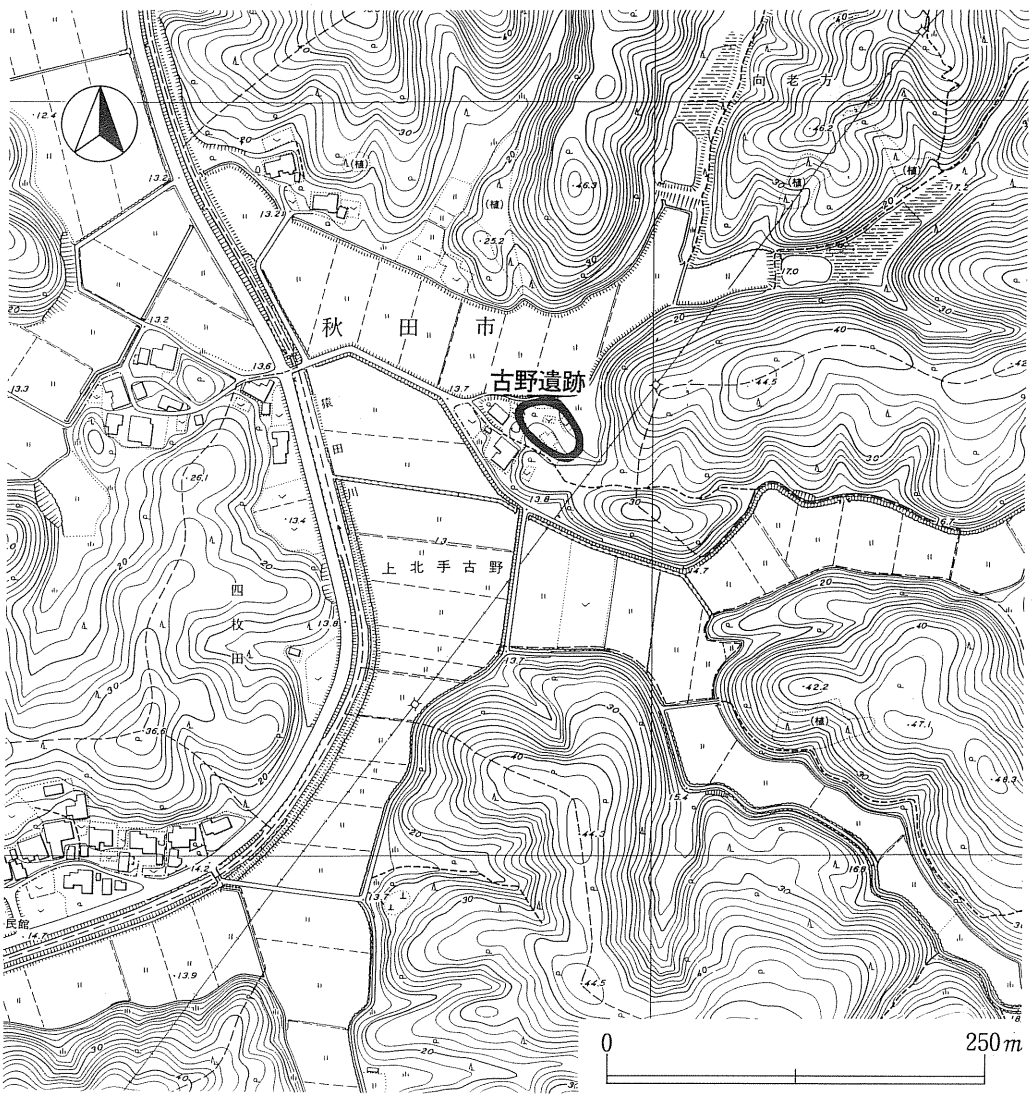
丘陵頂部の標高は20～21ｍ、沢地の標高は14～15ｍ、比高差は６～７ｍを測る。斜面の平均斜度は約13度である。

和田丘陵の表層地質は大部分が新第三紀鮮新世笹岡層の泥岩層、御所野台地の大部分は第四紀更新世潟西層の砂礫層（含泥炭層）であるが、和田丘陵の西側周縁部と御所野台地の東側周縁部には帯状に新第三紀中新世天徳寺層のシルト岩層が分布しており、古野遺跡はこの部分に立地している。石器の原材料として多用される硬質頁岩は、新第三紀中新世女川層に含まれ、古野遺跡の北北西約11.5 ㎞以北の上新城丘陵及び北北東約10㎞以北の仁別山地で、幅約 500ｍから１㎞の帯状に分布する。

参考文献

経済企画庁　『土地分類基本調査　地形・表層地質・土じょう　秋田　５万分の１　国土調査』 1966（昭和41年）

秋田県　『秋田湾大規模工業開発地域　土地分類基本調査　羽後和田　５万分の１　国土調査』 1975（昭和50年）



第３図　遺跡周辺の地形

第２節　歴史的環境

古野遺跡の発掘調査では旧石器時代、縄文時代中期後葉、平安時代、鎌倉時代、近世以降の遺構、遺物を検出した。ここでは各時期における周辺遺跡の状況を概観する。

旧石器時代

古野遺跡に近い御所野台地では下堤Ａ遺跡、下堤Ｄ遺跡、下堤Ｇ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡、狸崎Ｂ遺跡、地蔵田Ａ遺跡、地蔵田Ｂ遺跡、秋大農場南遺跡の８遺跡、岩見川の対岸に広がる七曲台の

風無台Ⅰ遺跡、風無台Ⅱ遺跡、松木台Ⅱ遺跡、松木台Ⅲ遺跡も含めると合計12遺跡がこれまでに発掘調査されている。このうち10遺跡は石器製作跡で、多数の剥片や石器が集中するブロックを検出している。本遺跡のように石器製作跡を伴わない例には、御所野台地の下堤Ａ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡がある。下堤Ｇ遺跡からは本遺跡から出土したナイフ形石器と類似した形態のナイフ形石器を含むブロックが検出されている。

縄文時代中期後葉

この時期の集落跡は、平坦な御所野台地一帯に多数存在する。台地の中にある遺跡のほぼ全域が発掘調査され、21遺跡から合計 238 棟の住居跡が検出されている。これに対し岩見川対岸の七曲台では、ほぼ全域が発掘調査されたものの６遺跡で合計15棟が検出されたにすぎない。本遺跡のように狭隘な低丘陵地にも集落が立地する例も含め、この集落密度の違いが何に由来するのかは興味深い問題である。本遺跡周辺は、これまでに蓄積された豊富な資料から、かなり詳しく生活の様子が復元できる可能性のある地域である。

平安時代（第４図）

文献史料からは 804（延暦23）年に秋田郡の建郡が推定され、平安時代においては古野遺跡のある一帯は秋田郡成相郷に属し、878（元慶２年）の「元慶の乱」では、俘囚、蝦夷側に対抗する律令国家側の領域であったとされる。

御所野台地では、これまでの発掘調査によって下堤Ａ遺跡、下堤Ｂ遺跡、下堤Ｃ遺跡、下堤Ｄ遺跡、坂ノ上Ｅ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡、地蔵田Ａ遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、野形遺跡、深田沢遺跡、秋大農場南遺跡、大杉沢遺跡の11遺跡から合計60棟の竪穴住居跡が検出されている。そのうちの31棟が下堤Ｃ遺跡である。他の10遺跡はそれぞれ１～６棟である。重複する竪穴住居跡を考慮すると、下堤Ｃ遺跡以外は、５棟以下の竪穴住居がひとつのまとまりとして営まれるのが基本的な居住形態であったことが推測される。

また、この地域では古代の葬制に関わる良好な資料も発見されている。古くは、奈良時代とされる終末期古墳の小阿地古墳群から蕨手刀や八花鏡等が出土している。県内の平安時代の葬制を知る資料はまだ少ない中で、御所野台地の湯ノ沢Ｆ遺跡では、鉄刀や鉄鏃、鉄製の馬具などを副葬した９世紀後葉から10世紀頃の土壙墓が21基検出され、秋田城や「元慶の乱」に関係する兵士の墓地の可能性もあるとして注目されている。

このほか、坂ノ上Ｅ遺跡では平安時代の製鉄炉と炭焼窯も検出され、生産活動についても解明の手掛かりが得られている。

鎌倉時代

県内では中世前期の大規模な発掘調査例が少ない中にあって、秋田市下タ野遺跡が発掘調査され、建物跡41棟、井戸跡51基、竪穴遺構３基等が検出されたことが特筆される。下タ野遺跡では

文献６・20の遺跡番号	遺跡名	文献番号
1—268	前田	
1—269	諏訪ノ沢	
1—271	館ノ下館	2
1—272	弥生館	2
1—273	猿田沢	
1—274	大平沢	
1—282	下堤B	16
1—283	下堤A	16

文献６・20の遺跡番号	遺跡名	文献番号
1—284	下堤C	15
1—285	大杉沢	5
1—286	下堤D	9
1—293	坂ノ上E	11
1—294	坂ノ上F	12
1—301	深田沢	12
1—302	野形	11
1—304	小阿地古墳	1

文献６・20の遺跡番号	遺跡名	文献番号
1—306	坂ノ下Ⅱ	7
1—310	地蔵田A	18・19
1—314	湯ノ沢B	10
1—318	湯ノ沢F	11
1—350	宝竜崎	
A	秋大農場南	17
B	古野	

第４図　古野遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡

母屋と倉庫、井戸を主とする鎌倉時代の集落の様相が明らかにされた。このほか、後城遺跡や、御所野台地にある大杉沢遺跡では古野遺跡出土品に近い時期の珠洲陶器の壺が出土している。能登珠洲窯と生産技術を共有しつつ在地で生産された珠洲系陶器の窯は、県内では二ツ井町エヒバチ長根窯、南外村大畑窯、大畑・桧山腰窯が発掘調査され、吉岡康暢氏によってエヒバチ長根窯がⅠ$_2$期、大畑・桧山腰窯がⅡ$_1$期、大畑窯がⅡ$_2$期に編年され、西暦1,200年を中心とした13世紀前半までの年代とされている。

近世以降

古野遺跡では近世以降現代に至る陶磁器類が出土した。関連する遺跡には、秋田市寺内で発掘調査された寺内焼窯跡がある。この窯跡の発掘調査によって、寺内焼は1787（天明７）年に陶器生産が開始され、1882（明治15）年頃には廃絶したこと、1834（天保５）年から1837（天保８）年の間には磁器の生産も始められ、1870（明治３）年前後に磁器生産が終了したこと等が明らかにされている。

参考文献

1　秋田県　『秋田県史　考古編』　1960（昭和35年）

2　秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56年）

3　秋田県教育委員会　『七曲台遺跡群』　秋田県文化財調査報告書第125集　1985（昭和60年）

4　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ―石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅵ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡・石坂台Ⅷ遺跡・石坂台Ⅸ遺跡・松木台Ⅲ遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第150集　1986（昭和61年）

5　秋田県教育委員会　『大杉沢遺跡発掘調査報告書－一般国道13号御所野拡幅事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第151集　1987（昭和62年）

6　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（中央版）』　1990（平成２年）

7　秋田考古学協会　『秋田市東南台地に於ける（小阿地・末戸・御所野・地方）遺跡分布調査報告』　1969（昭和44年）

8　秋田市教育委員会　『小阿地　下堤遺跡　坂ノ上遺跡　発掘調査報告書』　1976（昭和41年）

9　秋田市教育委員会　『秋田市下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書』　1982（昭和57年）

10　秋田市教育委員会　『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（下堤Ｇ遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡）　1983（昭和58年）

11　秋田市教育委員会　『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（坂ノ上Ｅ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、湯ノ沢Ｃ遺跡、湯ノ沢Ｅ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｈ遺跡、野形遺跡）　1984（昭和59年）

12　秋田市教育委員会　『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（下堤Ｅ遺跡、下堤Ｆ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡、狸崎Ａ遺跡、湯ノ沢Ｄ遺跡、深田沢遺跡）　1985（昭和60年）

13　秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（地蔵田Ｂ遺跡、台Ａ遺跡、湯ノ沢Ｉ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡）　1986（昭和61年）

14　秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（地方遺跡、台Ｂ遺跡）　1987（昭和62年）

15　秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（下堤Ｃ遺跡）　1987（昭和62年）

16　秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（下堤Ａ遺跡、下堤Ｂ遺跡）　1988（昭和63年）

17　秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（狸崎Ｂ遺跡、秋大農場南遺跡）　1992（平成４年）

18　秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（狸崎Ｂ遺跡、地蔵田Ａ遺跡）　1993（平成５年）

19　秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（地蔵田Ａ遺跡）　1994（平成６年）

20　秋田市教育委員会　『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』　1988（平成元年）

21　秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所　『寺内焼窯跡―寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査―』　1991（平成３年）

22　秋田市都市開発部・秋田市教育委員会　『下タ野遺跡発掘調査報告書』　1979（昭和54年）

23　秋田地所(有)・秋田市教育委員会　『後城遺跡発掘調査報告書』　1979（昭和54年）

24　二ツ井町教育委員会　『エヒバチ長根窯・大川口館跡・烏野遺跡』　1990（平成２年）

25　南外村教育委員会　『仙北郡南外村大畑窯跡発掘調査報告書』　1981（昭和56年）

26　南外村教育委員会　『仙北郡南外村大畑・桧山腰窯跡発掘調査報告書』　1992（平成４年）

27　安田忠市　「秋田市御所野丘陵部遺跡群について―縄文時代前期・中期の住居跡―」『よねしろ考古』第７号　よねしろ考古学研究会　1991（平成３年）

28　谷地薫　「七曲台における縄文時代の居住形態について―居住形態の変遷に関する一試論―」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第５号　秋田県埋蔵文化財センター　1990（平成２年）

29　谷地薫　「御所野台地遺跡群の縄文中期後葉土器ノート(1)」『秋田考古学』第44号　秋田考古学協会　1994（平成６年）

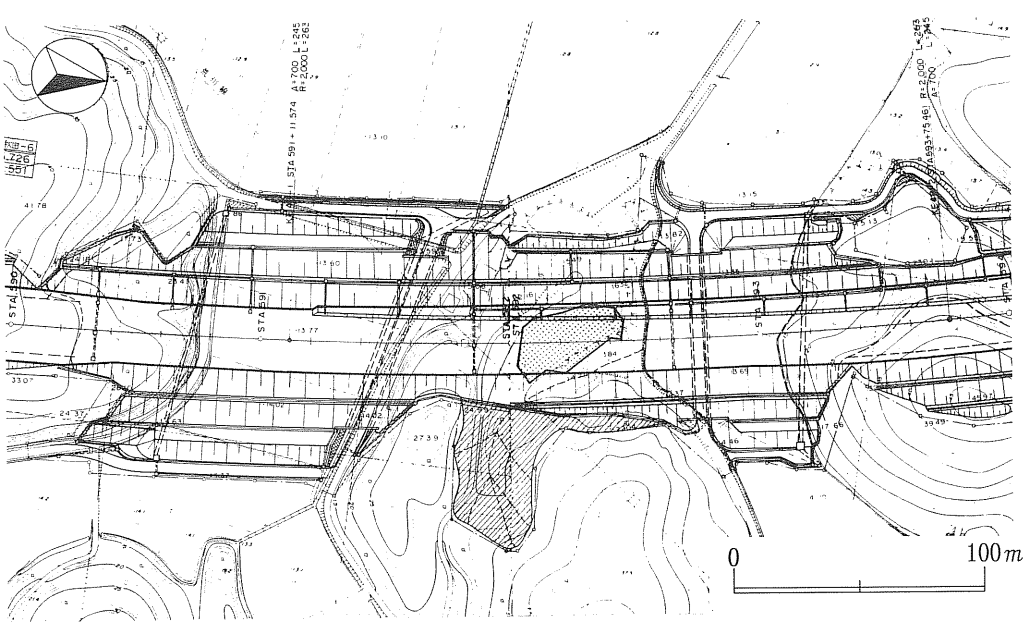
30　吉岡康暢　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館　1994（平成６年）

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

国道13号を河辺町から秋田市方面に向かい、河辺郡河辺町と秋田市の境界である和田トンネルを抜けると、ほどなく道路は片側２車線に広がり、右手に分岐する秋田自動車道の秋田南インターチェンジ入口がある。秋田南インターチェンジからの流入部を過ぎた直後の古野入口交差点を右折して県道古野・牛島線に入り、400ｍ程北進すると古野部落の家並がある。この辺りから道路の右側に沿って猿田川が北流する。道路と猿田川の両側には山地に挟まれた狭い平地があって水田や宅地となっている。古野部落を過ぎる辺りで道路は大きく左にカーブし、右手に後古野の小部落とバスの停留所が見える。ここで右折し、猿田川にかかる小さな橋を渡って右手の山地に入る小道を進むと、低い丘陵の先端に民家が１軒ある。その陰の丘陵北側が古野遺跡である（第３図）。

遺跡の面する沢地はかつては水田であったが、調査前は葦の繁茂する湿地であった。丘陵の斜面は畑地と杉林に利用されていたが近年は放置されて原野化していた。丘陵の先端部は大きく削り取られて宅地となり、それに続く北側の斜面も削平されて畑地となっていた（図版１―４）。



第５図　工事計画と発掘調査範囲

本来の遺跡範囲は、丘陵先端部、北側の斜面、沢地に面した北東斜面の北西―南東約70ｍ、北東―南西約30ｍの範囲と推定される。範囲確認調査の結果から、破壊を免れている遺跡の範囲は、北西―南東約40ｍ、北東―南西約20ｍの範囲と考えられた。この全域が工事計画区域に含まれる（第５図）。

発掘調査範囲外であるが、調査区の西側、丘陵の先端部近くの見晴らしのよい高台に大山祇神等の神名と建立者名の彫られた昭和２年６月建立の石碑がある。また、遺跡南西の丘陵中腹と遺跡が面する沢の対岸の丘陵中腹には墓地がある。地元の古老（80歳代）の話では、昔ここには大きな屋敷があったが、その後、家屋敷をたたんで北海道の方に移って行った、という伝承がある、とのことであった。

当初の発掘調査予定面積は700㎡であったが、遺構、遺物の分布する範囲の限界を確認するために、北側と南東側で若干の拡張を行い、最終の発掘調査面積は830㎡となった。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法で行った（第６図）。対象範囲全域にグリッドを設定するため、まず日本道路公団が打設した路線中心杭ＳＴＡ592＋20（Ｘ：－36724.312、Ｙ：－55056.025）を原点とし、国家座標第Ｘ系の南北方向に南北基準線Ｙ軸を設定した。この基準線と直交して原点の基準杭を通る線を東西基準線Ｘ軸とし、これらＸ・Ｙ両軸に４ｍ×４ｍの方形メッシュを割り付けた。原点をＭＡ50とし、東西方向には、Ｘ軸上を西に４ｍ進む毎にＭＢ・ＭＣ・ＭＤ・・・と正順に、東に４ｍ進む毎にＬＴ・ＬＳ・ＬＲ・・・と逆順に各々Ａ～Ｔまでの２文字のアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、Ｙ軸を北に４ｍ進む毎に51・52・53・・・と増加し、南に向かう毎に49・48・47・・・と減少する２桁のアラビア数字を付した。各グリッドの呼称は、南東隅を通るＸ軸とＹ軸の組み合わせで、ＭＡ50・ＭＢ51・ＭＣ52・・・のように呼ぶこととした。

遺構は種類を略号で付し、検出順に連番で遺構番号を付けた。原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、２または４分割法による精査を行った。

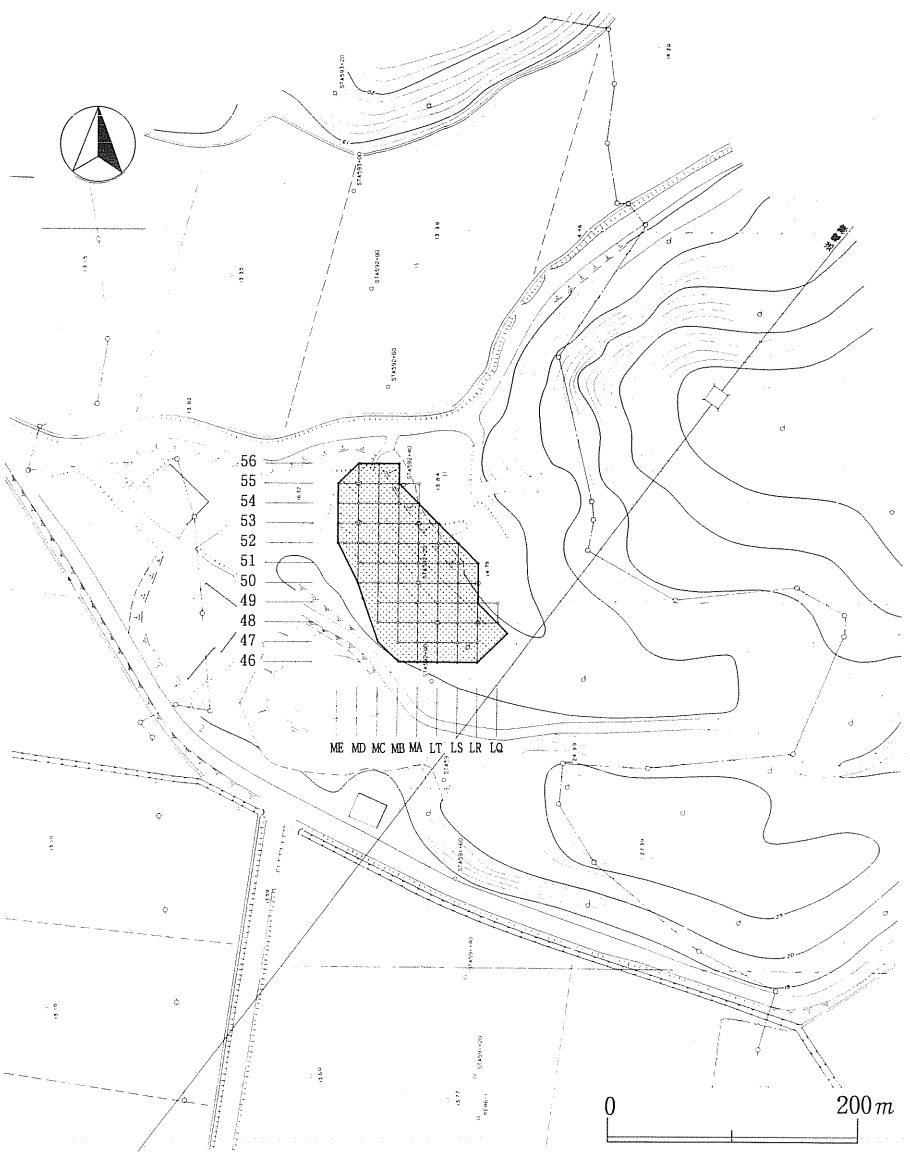
遺物は遺構単位及びグリッド単位に取り上げ、遺物番号、グリッド名または遺構名、出土した層位、年月日を記入した耐水性荷札を添付した。なお、遺構によっては埋土で一括して取り上げたものもある。火山灰や炭化物等が確認された場合は、自然科学的分析を行うためにサンプリングを実施した。

平面図及び断面図は、原則として１/20、細部状況を表すために適宜１/10の縮尺で作成し、それぞれにレベルを記入した。作図にあたっては、グリッド杭を利用した簡易遣り方測量によった。断面図には土色・堅さ・しまり・土性・混入物を注記した。必要に応じてエレベーション図も作

成した。

発掘調査における写真撮影は、35㎜判カメラに、モノクロ、カラーリバーサル（スライド用）のフィルムを装着し、必要に応じてネガカラーも用いた。図面記録は、現場で実測した図をもとに、平面図と断面図等を組み合わせた第２原図を作成した。

遺物は、洗浄・注記・接合・復元の後、選別して原寸で実測図を作成し、報告書に掲載するにあたって適宜縮尺した。実測図にはスケールを入れて示した。写真は、35㎜判カメラにマイクロレンズ（55㎜、135㎜）を装着し、撮影した。



第６図　発掘調査区のグリッド設定図

第３節　調査経過

発掘調査は1994(平成６)年５月11日（月）から６月17日（金）まで行った。初日、２日目に機材搬入・調査区内の片付け等を行い、３日目から粗掘を開始した。以下、調査の経過は第１表に示した。期間中、５月19日、隣接して行われていた工事の影響で、コンテナハウス周辺の地面に亀裂が入り崩壊するおそれがでてきたため、５月24日コンテナハウス等の移転を行った。６月９日、アマチュア写真家の吉川信子氏が来跡し、発掘作業のスナップ写真を熱心に撮影して行った。６月13日、平安時代の竪穴住居跡を切る土坑から火山灰を検出し、サンプリングした。

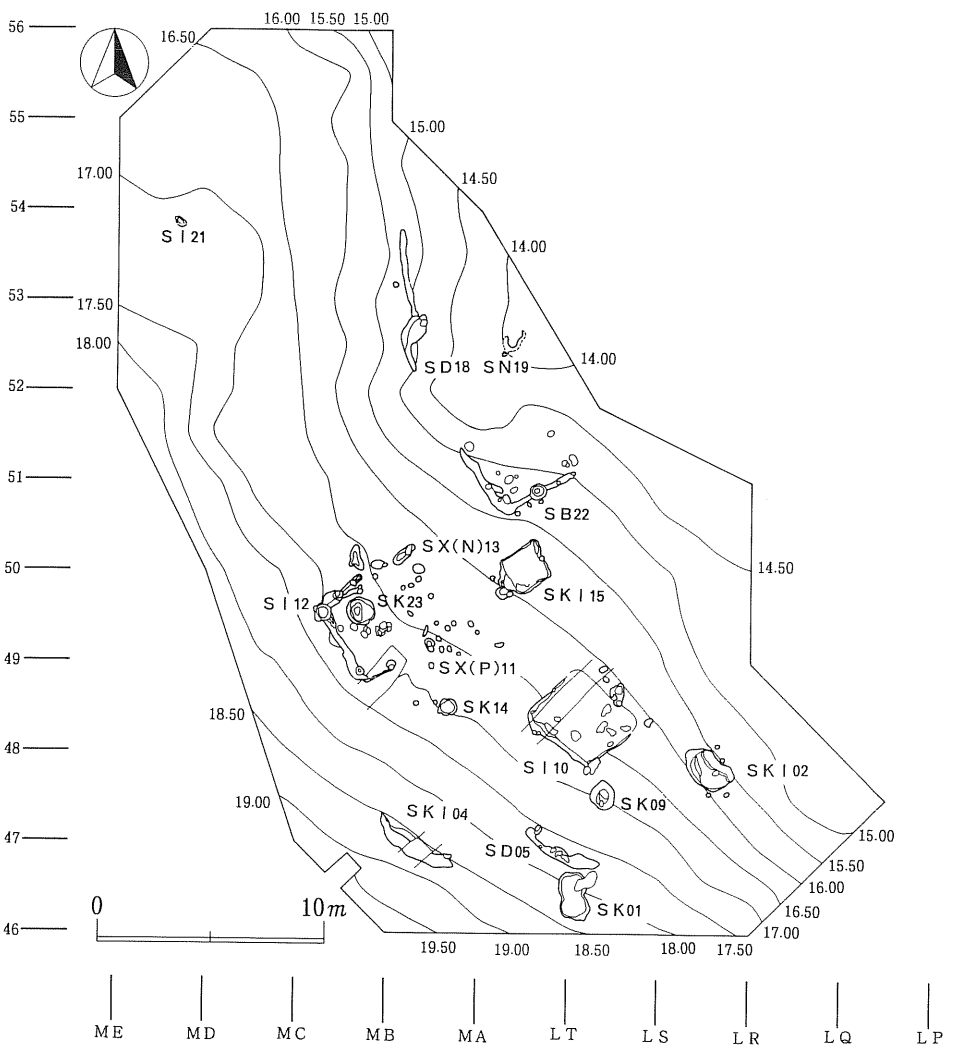
６月17日で発掘調査を終了した後、秋田県埋蔵文化財センターで写真、図面類、遺物の整理作業を行い、報告書を作成した。

第１表　調査経過表

月日	5月															6月											
作業	11	12	13	16	17	18	19	20	23	24	25	26	27	30	31	1	2	3	6	7	8	9	10	13	14	15	16	17
準備																												
撤収																												
粗掘																												
遺構検出																												
精査																												
実測																												

検出遺構一覧

ＳＫ01土坑	ＳＸ(N)13焼土群
ＳＫＩ02竪穴遺構	ＳＫ14土坑
ＳＫＩ04竪穴遺構	ＳＫＩ15竪穴遺構
ＳＤ05溝跡	ＳＤ18溝跡
ＳＫ09土坑	ＳＮ19カマド状遺構
ＳＩ10竪穴住居跡	ＳＩ21竪穴住居跡
ＳＸ(P)11ピット群	ＳＢ22建物跡
ＳＩ12竪穴住居跡	ＳＫ23土坑



第７図　遺構配置図

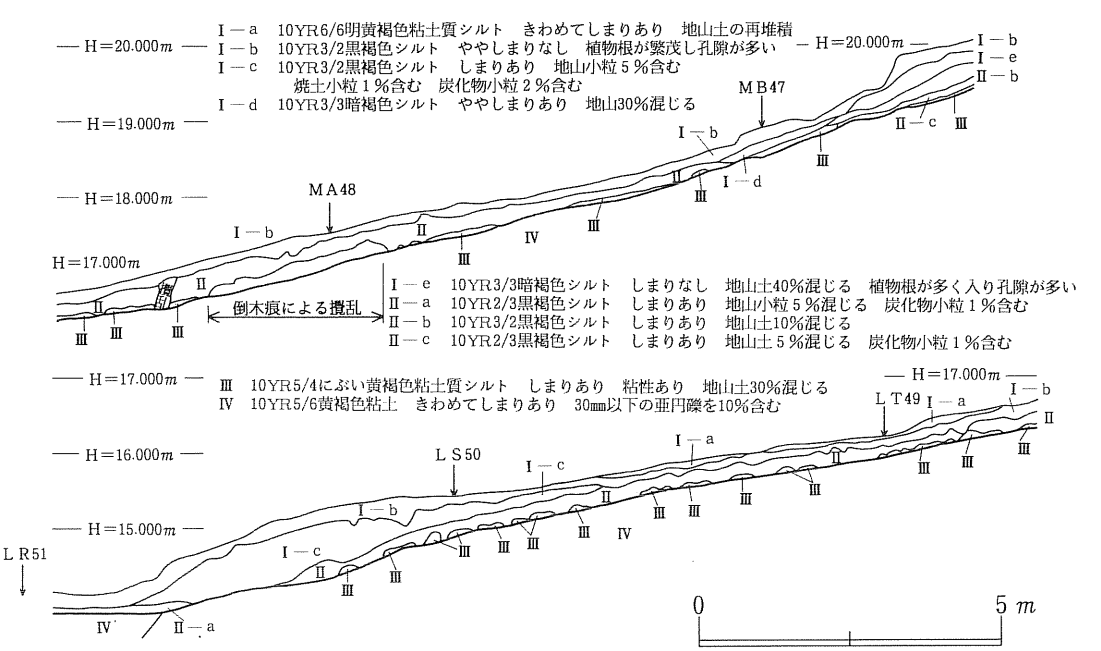
第４章　調査の記録

第１節　基本層序

発掘調査範囲は南西から北東に下る斜面である。斜面上部と中部では、基本的にⅠ層：表土（耕作土）、Ⅱ層：黒褐色土、Ⅲ層：にぶい黄褐色土（地山漸移層）、Ⅳ層：黄褐色土（地山）である（第８図）。層厚は、Ⅰ層が５～15㎝、Ⅱ層が５～20㎝、Ⅲ層は部分的にしか存在せず厚い部分でも５㎝程度である。一部では畑地造成のため高いところを削って低いところに盛土しているので、Ⅰ層の下に厚さ５～10㎝の盛土（暗褐色土）が入る。斜面下部から調査区北東側の沢際にかけてはしだいに盛土が厚くなり、沢際では約40㎝と最も厚い。その下にはⅡ層の黒褐色土が薄く堆積し、地山土を覆っている。

盛土が厚く堆積した斜面下部以外は、地表面から地山上面までが15～25㎝と比較的薄く、植物根がⅡ層中まで入り込み孔隙が多い。Ⅱ層には、整地や耕作の影響を受けているためか、土師器の細片が近現代の陶磁器やガラス片、ビニール等とともに含まれている。遺構は、Ⅲ層上面で黒色土のプランとして確認したが、斜面中部のⅢ層がない部分ではⅣ層（地山）上面で確認した。

調査区の中央付近には、調査区北東側の沢に開口する南西－北東方向の小さな沢が埋没してい



第８図　基　本　層　序

た。この沢の埋土は黒褐色粘土質シルト層で（第15図の９層）、沢頭から沢尻に向かってしだいに厚くなり、沢尻付近で厚さ約70㎝に達する。沢頭に近い部分の埋土下層に縄文時代中期の土器を包含する。沢尻付近の一部では、ＳＢ22建物跡を覆っている地山土ブロックや焼土粒、炭化物粒の多量に入った土が埋土の黒褐色粘土質シルト層の上に堆積し、さらにその上面からＳＮ19カマド状遺構が構築されていた。第Ⅱ層はこの上を覆っている。

埋没沢から北側では削平が著しく、Ⅳ層（地山）に及んでおり、10～20㎝のＩ層を剝除するとすぐに地山が露出する状態であった。かろうじてＳＩ21竪穴住居跡の炉跡の一部が残存していた。

第２節　検出遺構と遺物

１　縄文時代

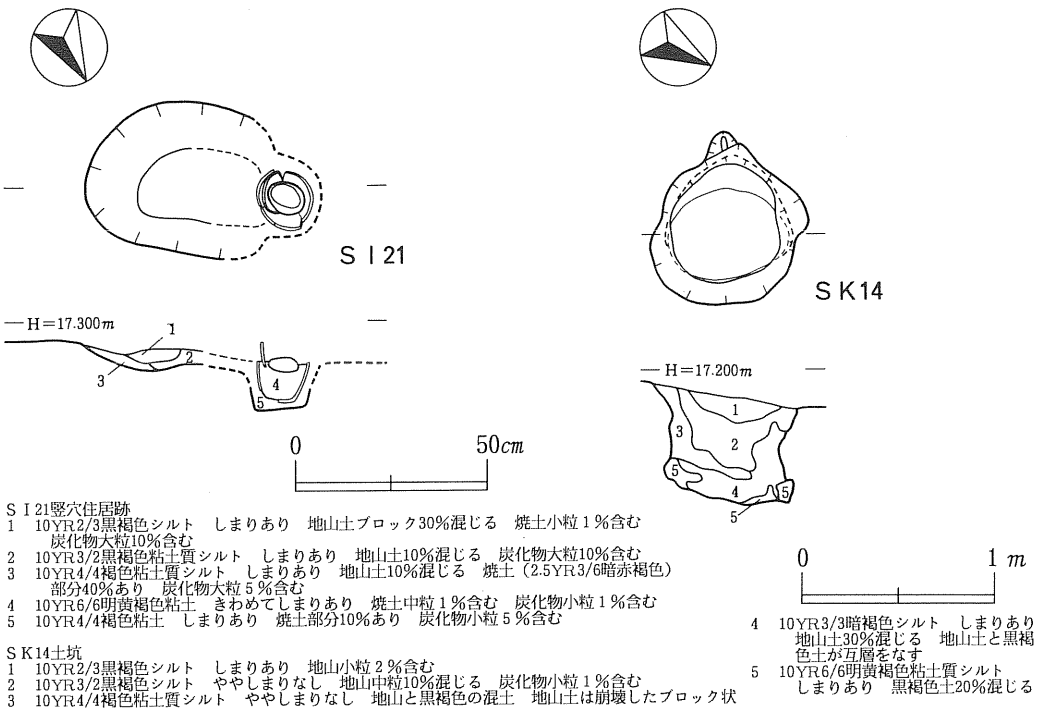
縄文時代の遺構は竪穴住居跡１棟、土坑１基である。調査区中央部には、埋土下層に縄文時代中期の土器を包含する南西－北東方向の小さな沢跡が埋没していた。竪穴住居跡はこの沢の北西側、土坑は南側にある。

(1)　竪穴住居跡

ＳＩ21竪穴住居跡（第９・10図、図版２－１、７）

調査区北東部のＭＤ53グリッドで炉跡を検出した。調査区北東部は畑地造成のため削平が著しくⅣ層（地山）にまで及んでおり、遺構は20㎝程度の耕作土を除去した地山面で検出した。炉跡以外の施設は削平のためか検出されなかった。

炉跡は楕円形の浅い土坑と土器埋設部とからなる複式炉である。土坑の平面形は長軸45㎝、短軸40㎝の楕円形である。壁は緩やかに傾斜し最も深い中央部の深さは約６㎝である。土器埋設部との接続部分は削平により不明瞭であった。埋土中には焼土と炭化物を含む。土器埋設部の対面では全体に焼土が多量に含まれ、中央部から土器埋設部近くでは炭化物が多い。底面と側面は火熱により若干赤変している。土器埋設部の掘形は、直径約20㎝、深さ18㎝の円筒形である。この中に深鉢形土器を正立させている。土器は二次火熱により内外面とも若干赤変している。土器周囲の掘形埋土も焼土化している。土器内部の埋土にはわずかに焼土粒と炭化物粒を含む。土器の埋土上部には蓋をするように長さ約９㎝、幅約７㎝、厚さ約４㎝の亜円礫が置かれていた。炉内炭化物の^{14}Ｃ年代測定値は3,440±90（Ｂ.Ｃ.1,490）であった（第５章参照）。埋設土器は胴部下半のみが残存する。底径7.3㎝、残存高14.5㎝である。胴部は底部からやや開き気味に直線的に立ち上がる。胴部中央から上半部には、太い沈線によって横位に展開する曲線的な区画文を描く。底辺部から区画文が描かれる胴下部までは縦回転のＲＬ単節斜縄文を施文する。器面の大部分で二



第９図　ＳＩ21竪穴住居跡、ＳＫ14土坑

次火熱による剝落が著しく、文様モチーフは正確に復元できないが、沈線の痕跡などから第10図に示したようなモチーフと考えられる。すなわち、胴下半部に横位に１条の沈線を巡らし、その一部が大きく上方に展開して大波頭文となる。この大波頭文の先端部が渦巻状に入り組む部分の下部には、同じ沈線を屈曲させて２個の小波頭文を描く。これら３個の波頭文は連続する１本の沈線によって描かれ、この沈線は胴部を１巡する。縄文は底辺部から沈線で区画された波頭文内部に充塡施文される。また、胴中央部の大波頭文以外の部分は欠失するが、おそらくこの区画沈線からは独立した円形あるいはｅ字形、Ｃ字形、Ｕ字形、逆ｅ字形、逆Ｃ字形、逆Ｕ字形等の区画文が２単位描かれ、内部に縄文が充塡されていたと思われる。

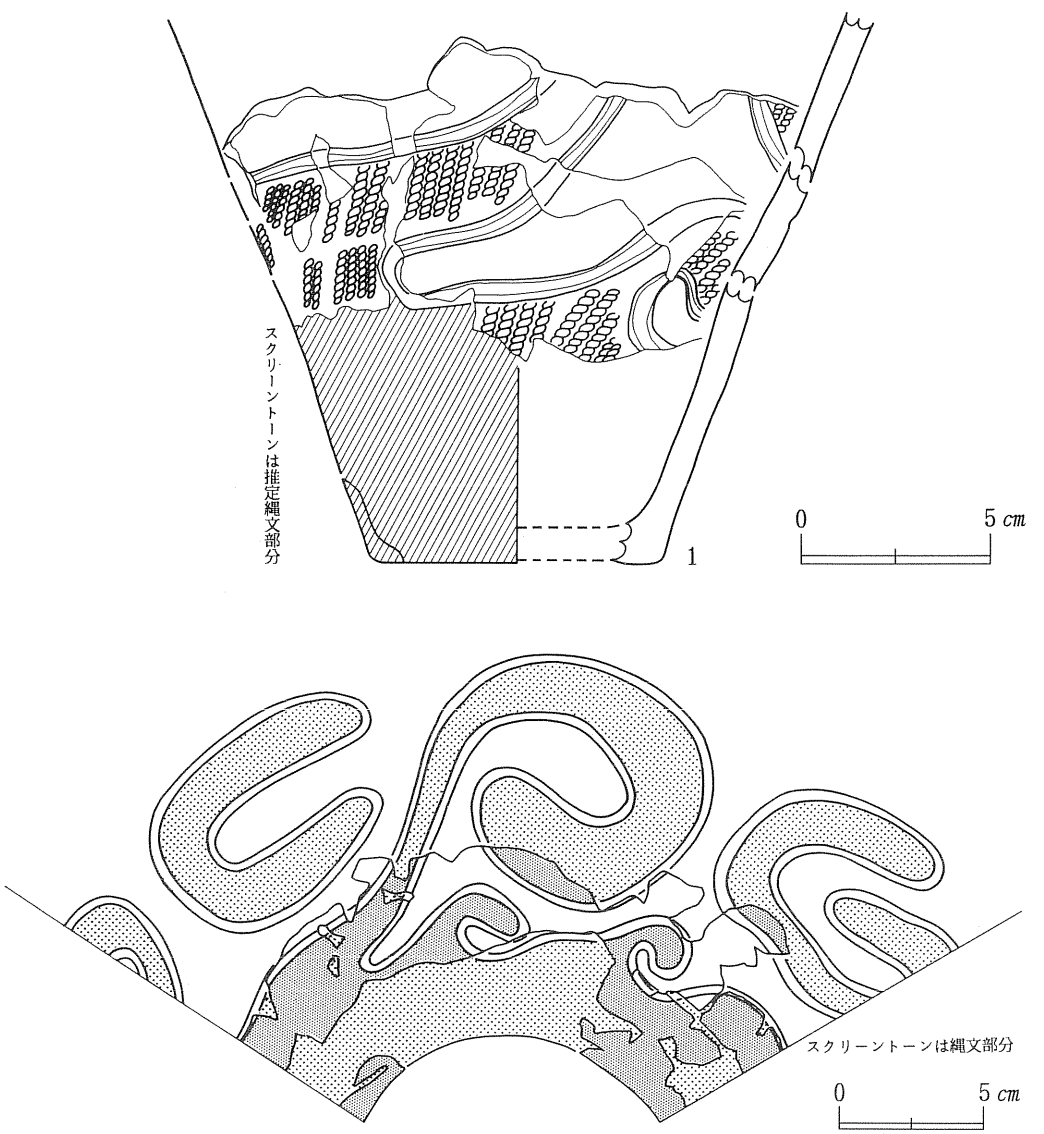
(2)　土坑

ＳＩ14土坑（第９図、図版２－２）

調査区南部の斜面中腹で検出した。ＭＡ48グリッドのほぼ中央部である。検出面はⅣ層（地山）上面で、南から北に緩く傾斜している。上端、下端とも平面形はほぼ円形で、上端の直径が約80㎝（最大径82㎝、最小径75㎝）、下端の直径が約60㎝（最大径64㎝、最小径59㎝）である。底面は南側が高く、北側に低く傾斜し、若干凹凸がある。深さは南側、北側とも約50㎝である。北側、南側とも底面から約30㎝上位で最も径が狭くなり、そこから上端に向かって開くフラスコ状の形

態の土坑である。

埋土は、オーバーハングする壁の一部が崩落した地山ブロック（５層）が底面の壁際に堆積し、その上に地山土の混じる暗褐色土（４層）と黒褐色土（３層）が流入している。その後、埋没せずに残った凹部に黒褐色土（１層、２層）が流入したものである。開口したまま廃棄され、その後自然に埋没したと考えられる。土坑内から遺物は出土しなかった。形態、廃棄の状態から縄文時代の貯蔵穴と推定される。



第10図　遺構内出土遺物(1) ＳＩ21竪穴住居跡炉埋設土器と文様復元図

2　平安時代

平安時代の遺構は竪穴住居跡２棟、土坑１基の計３遺構である。竪穴住居跡は、重複のない状態で検出した。調査区の中央部から南側にかけての斜面に、２棟の竪穴住居跡が直線距離で約５ｍ離れて、南北約10ｍ、東西約15ｍの範囲に分布する。２棟とも最も残りのよい斜面上部側の壁は、等高線に平行となる方向（北西－南東方向）で構築されていた。

土坑はＳＩ12竪穴住居跡が廃棄された後、竪穴に５㎝程暗褐色土が堆積した後で掘り込まれたもので、ＳＩ12竪穴住居跡の西側に完全に重複する位置で検出した。

ＳＩ12竪穴住居跡床面及び周辺では、柱穴様の小ピットや楕円形の小土坑が47基あった。これらの小ピット等のうち、竪穴住居跡の壁際や壁溝内にある小ピット９基はＳＩ12竪穴住居跡に付属するものと考えられる。それ以外の小ピット等38基はＳＸ（Ｐ）11ピット群として一括する。小ピット内出土遺物がないことから時期不明遺構の項に記載するが、これらのピットの中には後述するようにＳＩ12竪穴住居跡の柱穴の可能性があるものも含まれている。

また、ＳＩ12竪穴住居跡床面及び周辺には、地床炉とおぼしき地山面の焼土が11箇所検出された。ＳＩ12竪穴住居跡中央付近に並ぶ地山面の焼土７箇所は、その上を竪穴住居跡の埋土が覆うことから、ＳＩ12竪穴住居跡に付属するものと考えられる。これら以外の４箇所の焼土は、覆土が表土から撹乱を受けた状態であったため、焼土が形成された地山面がＳＩ12竪穴住居跡の埋土下になるのかどうか判然としなかった。そこで、これらはＳＩ12竪穴住居跡に付属することが確実でないという意味でＳＸ（Ｎ）13焼土群として一括し、時期不明遺構の項に記載するが、後述するようにＳＩ12竪穴住居跡のカマド燃焼部の痕跡である可能性のあるものも含まれている。

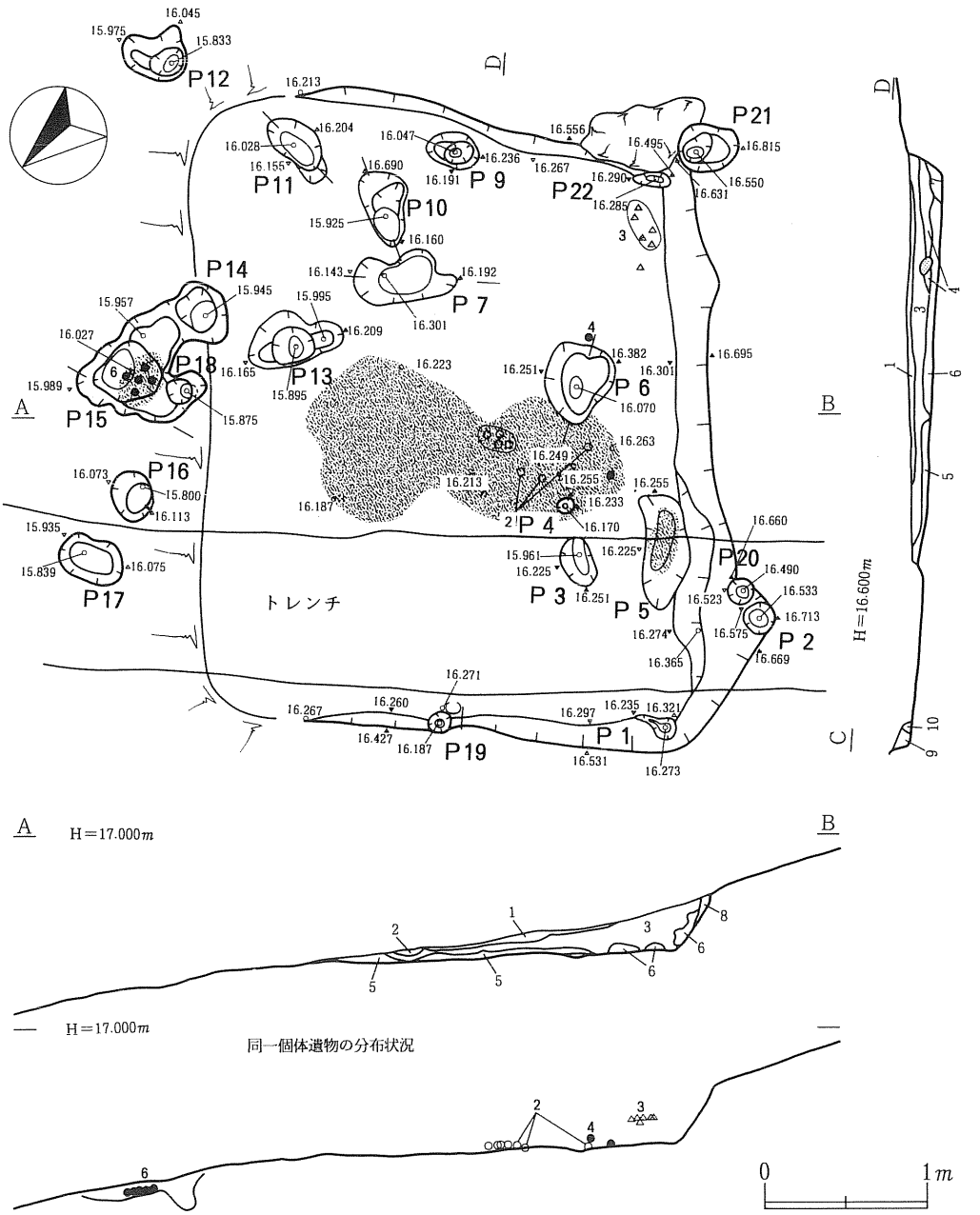
(1)　竪穴住居跡

ＳＩ10竪穴住居跡（第11・12・14図、図版３－１、７）

調査区南部、南西から北東に下る斜面中腹のＬＳ47・48、ＬＴ47・48グリッドで検出した。Ⅰ層（表土）とⅡ層（黒褐色土）を除去した段階で、Ⅲ層（地山漸移層）上面でⅡ層の落ち込みによる方形の黒褐色土のプランとして検出した。

斜面上部側で最も残りのよい南西壁の長さは３ｍ60㎝である。等高線に直交する北西壁と南東壁は、地山を掘り込んだ部分のみが残存し、斜面上部側から下部側に向かってしだいに低くなる。北西壁の残存長は２ｍ32㎝、南東壁の残存長は２ｍ46㎝である。斜面の下部側になる北東壁は地山漸移層より上位の旧表土中に構築されていたものと考えられ、竪穴住居跡の廃棄後、流失・削平等により失われている。竪穴の深さは、南西壁では約40㎝である。

地山土を掘り下げて作出した平坦な床面の範囲は、北西壁側で２ｍ96㎝、南東壁側で２ｍ90㎝である。斜面下部側の平坦な床面範囲の境界からやや下側にかけて底面が焼けたピットがあり土師器の破片が出土している。このピットの辺りまでは竪穴住居跡内に含まれると考えられるの



1　10YR2/2 黒褐色シルト　ややしまりあり　焼土小粒 1%含む　炭化物極小粒 1%含む
2　10YR2/2 黒褐色シルト　しまりあり　炭化物小粒 1%含む
3　10YR3/2 黒褐色シルト　しまりあり　地山中粒 5%混じる　焼土極小粒 1%含む　炭化物極小粒 1%含む
4　10YR2/3 黒褐色シルト　しまりあり　地山極小粒 1%混じる　炭化物極小粒 1%含む
5　10YR2/2 黒褐色シルト　しまりあり　焼土中粒 5%含む　炭化物小粒 2%含む
6　10YR2/2 黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒10%混じる
7　10YR3/3 暗褐色シルト　しまりあり　地山土30%混じる　焼土小粒 1%含む　炭化物極小粒 2%含む
8　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト　しまりあり　粘性あり　地山土30%混じる
9　10YR3/3 暗褐色シルト　しまりあり　地山小粒 5%混じる
10　10YR3/4 暗褐色シルト　しまりあり　地山土30%混じる

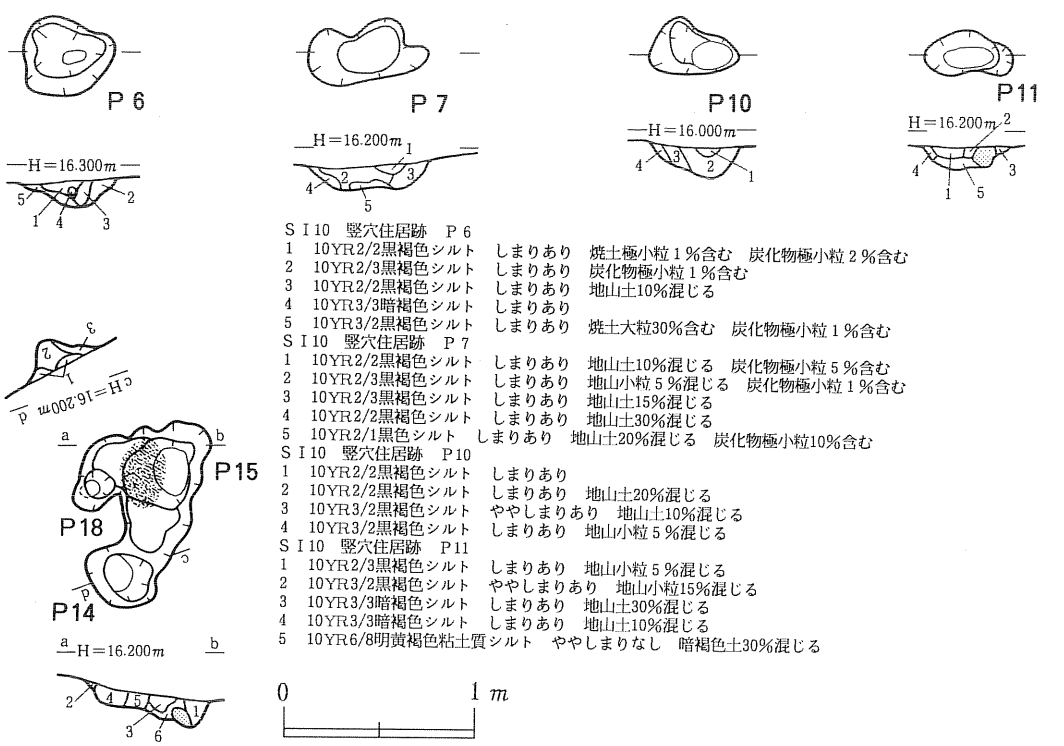
第 11 図　ＳＩ10竪穴住居跡

で、床面の範囲は、各壁の中央付近では南西－北東が約３ｍ80㎝、南東－北西が約３ｍ70㎝、竪穴掘形の上端における規模は、南西－北東が約４ｍ20㎝、南東－北西が約３ｍ90㎝と推定される。

西隅及び南隅において壁の下端ラインどうしがつくる角はいずれも直角ではなく、西隅は約86度、南隅は約106度である。したがって竪穴住居跡の平面形はややいびつな長方形となる。

南西壁の方位はＮ－51°－Ｗである。北西壁の方位はＮ－43°－Ｅ、南東壁の方位はＮ－55°－Ｅである。壁溝はない。

埋土の主体は黒褐色シルト（1・3・4層）で、炭化物の極小粒をわずかに含む。床面を直接覆う最下層は、地山土が混じる黒褐色シルト（6層）と焼土粒を含む黒褐色シルト（5層）であるが、焼土粒を含むのは床面に形成された炉の上部及び周辺のみであることから、この焼土粒の供給源は炉跡と考えられ、埋土最下層も基本的には埋土上層と同種の土壌である。竪穴の廃棄後、壁際



ＳＩ10　竪穴住居跡　Ｐ６
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　焼土極小粒１％含む　炭化物極小粒２％含む
2　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　炭化物極小粒１％含む
3　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土10％混じる
4　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり
5　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　焼土大粒30％含む　炭化物極小粒１％含む
ＳＩ10　竪穴住居跡　Ｐ７
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土10％混じる　炭化物極小粒５％含む
2　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒５％混じる　炭化物極小粒１％含む
3　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山土15％混じる
4　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土30％混じる
5　10YR2/1黒色シルト　しまりあり　地山土20％混じる　炭化物極小粒10％含む
ＳＩ10　竪穴住居跡　Ｐ10
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり
2　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土20％混じる
3　10YR3/2黒褐色シルト　ややしまりあり　地山土10％混じる
4　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒５％混じる
ＳＩ10　竪穴住居跡　Ｐ11
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒５％混じる
2　10YR3/2黒褐色シルト　ややしまりあり　地山小粒15％混じる
3　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山土30％混じる
4　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山土10％混じる
5　10YR6/8明黄褐色粘土質シルト　ややしまりなし　暗褐色土30％混じる

ＳＩ10竪穴住居跡　Ｐ14
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒２％混じる
2　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土30％混じる
3　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　黒褐色土10％混じる
ＳＩ10竪穴住居跡　Ｐ15
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山極小粒５％混じる　撹乱
2　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山土40％混じる
3　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒１％混じる
4　10YR3/3暗褐色シルト　きわめてしまりあり　地山中粒５％混じる　焼土小粒１％含む
5　10YR4/4褐色シルト　しまりあり　地山土30％混じる
6　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり　地山土20％混じる　焼土小粒１％含む　炭化物小粒２％含む

第12図　ＳＩ10竪穴住居跡のピット

に周囲から７・９・10層が流入し、全体に５・６層の母材である黒褐色シルトが薄く堆積した後、同種の土壌である３層が斜面上部から流入したものであろう。したがってこの竪穴住居跡は廃棄後自然に埋没したものと考えられる。

床面は平坦で、斜面下部側の北東方向にわずかに傾斜する。南西壁は外側に開き気味に傾斜して立ち上がる。北西壁、南東壁もやや外側に開き気味である。これは竪穴住居跡廃棄後の壁が崩落した後の状態であり、構築当初は垂直に近い立ち上がりであったと推測される。

柱穴様ピットは竪穴住居跡範囲の内側、周囲で計22基を検出したが、Ｐ４、Ｐ６は床面に形成された地床炉を切っており、竪穴住居廃棄後のものである。Ｐ７、Ｐ10、Ｐ11はいずれも不整形で埋土中に地山土が多く混じることから、竪穴住居廃絶後の撹乱の可能性が高い。主柱穴とおぼしき柱穴はない。あえて規格性を探せば、西隅と南隅がわずかに窪んでいる（Ｐ１、Ｐ22）のと、北西壁の中央やや西よりと南東壁の中央やや東よりの位置に小規模なピットが認められる（Ｐ19、Ｐ９）のが竪穴住居跡の長軸に対称な配置といえようか。

カマド跡は検出されなかった。南西壁際のＰ５、北東壁際のＰ15は浅い小ピットの底面が焼けており、カマドの燃焼部の可能性も考えられたが、いずれもカマドの袖、煙道を構築した痕跡が認められず、Ｐ15では周囲が不定形に掘り窪められて低くなって小ピット（Ｐ14、Ｐ18）が隣接しており、カマドとは異なる地床炉のような施設と判断した。

Ｐ５、Ｐ15の他、床面の中央やや南西よりには、南西－北東方向を長軸とする長軸２ｍ、短軸１ｍ４㎝～58㎝の地床炉がある。平坦な床面が強い火熱を受けて赤変、硬化している。

遺物は、埋土中と床面及びＰ15の中から出土した。土師器坏４個体、土師器甕４個体分の破片である。床面の地床炉から第14図２の土師器坏、Ｐ15内から６の表面に斜格子目タタキ痕のある土師器甕が出土した。４、５の土師器坏は埋土下層から、３の土師器坏は埋土上層から出土した。須恵器は出土しなかった。

ＳＩ12竪穴住居跡（第13・14図、図版２－３、７）

調査区南西部、南西から北東に下る斜面中腹のＭＡ48・49、ＭＢ48・49・50グリッドで検出した。

遺構は、Ⅰ層（表土）とⅡ層（黒褐色土）を除去した段階で、Ⅲ層（地山漸移層）上面でⅡ層の落ち込みによる方形の黒褐色土のプランとして検出した。

この竪穴住居跡は、廃棄後の床面上に約５㎝の暗褐色土が堆積した状態で完全に埋まり切る前にＳＫ23土坑が掘り込まれており、ＳＫ23土坑より古い。また、竪穴住居跡の北東部は壁が失われ、地山が緩やかに傾斜する面が広がっていて竪穴住居跡の北東側の境界を確定することができなかった。

斜面上部側で最も残りのよい南西壁の長さは４ｍ４㎝である。等高線に直交する北西壁と南東

壁は、地山を掘り込んだ部分のみが残存し、斜面上部側から下部側に向かってしだいに低くなる。北西壁の残存長は２ｍ48㎝、南東壁の残存長は１ｍ36㎝である。斜面の下部側になる北東壁は地山漸移層より上位の旧表土中に構築されていたものと考えられ、竪穴住居跡の廃棄後失われている。竪穴の深さは、南西壁側では約52㎝である。

地山土を掘り下げて作出した平坦な床面の範囲は北西壁側で約４ｍ、南東壁側で約４ｍ50㎝が認められ、その北東側は２ｍほど緩やかに傾斜し、さらに北東側で原地形のややきつい傾斜となる。

竪穴住居跡の西隅及び南隅において壁の下端ラインどうしがつくる角はいずれも直角ではなく、西隅は約98度、南隅は約97度である。したがって竪穴住居跡の平面形は台形と推測される。南西壁の方位はＮ－35°－Ｗである。北西壁の方位はＮ－48°－Ｅ、南東壁の方位はＮ－63°－Ｅである。

埋土の主体は黒褐色シルト（1・2・3層）で、炭化物と焼土の小粒をわずかに含む。床面を直接覆う最下層は、地山土が混じる暗褐色シルト（4層）である。南西壁際付近では竪穴住居跡廃棄後に木根が入り込み壁が崩落した部分がある。竪穴の廃棄後、南西壁の崩落が始まり、南西側（斜面上部）の壁際には地山土が多く混じる暗褐色シルト（6・7層）や黒褐色シルト（5層）が断面三角形に堆積し、壁際は比較的早く埋没する。この時点で竪穴中央部の床面には、母材が6・7層と基本的に同種の暗褐色シルト（4層）が5㎝前後の厚さで堆積している。竪穴住居跡がここまで埋まり、浅い窪地となった時点でＳＫ23土坑が掘り込まれている。その後、ＳＫ23土坑の埋土最上層には火山灰を含む黒褐色シルトが堆積し、さらにその上を黒褐色土（1・2・3層）が覆う。1・2・3層は上部からの自然流入である。したがってこの竪穴住居跡は廃棄後自然に埋没した後、ＳＫ23土坑が掘り込まれ埋め戻される過程を経て、その後も自然に埋没したものと考えられる。

床面は平坦で、斜面下部側の北東方向にわずかに傾斜する。南西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、壁面の凹凸が著しくオーバーハングする部分もある。北西壁、南東壁はやや外側に開き気味である。これは竪穴住居跡廃棄後に壁が崩落した後の検出状態であり、構築当初はどの壁も垂直に近い立ち上がりであったと推測される。幅12～26㎝、深さ４～７㎝の壁溝が南西壁の直下と北東壁の一部に巡る。北西壁側は西から50㎝までは壁の直下、それより東１ｍ４㎝は壁から離れ、竪穴の内側に入り込む。壁溝の底面はやや凹凸がある。

壁際や壁溝内では柱穴様ピット等を９基検出した。西隅には上端部の長径76㎝、短径62㎝、底面の直径約48㎝の小土坑（Ｐ12－5）があり、南西壁と北西壁の壁溝はこの小土坑に接続する。埋土は暗褐色シルト主体で地山土が多く混じり炭化物小粒を含む。竪穴住居跡の埋土６層に似る。東隅には床面からの深さが33㎝の柱穴（Ｐ12－３）がある。南西壁側では壁溝内（Ｐ12－４）、北東壁側では壁溝内（Ｐ12－6・7・8）と壁際（Ｐ12－9）、南東壁側では壁際（Ｐ12－1・2）に柱穴様

ＳＫ23土坑
A　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　細粒の火山灰（10YR4/6～5/8褐～黄褐）を20%含む　部分的にブロック状に多量にかたまって含まれる　地山極小粒２%混じる　炭化物小粒５%含む
B　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり　地山土20%混じる　炭化物大粒５%含む　火山灰２%含む
C　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　やや粘性あり　地山小粒５%混じる　焼土極小粒１%含む　炭化物大粒２%含む　火山灰１%含む
D　10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまりあり　粘性あり　地山土 40%混じる
E　10YR3/3 暗褐色シルト　しまりあり　焼土小粒 2%含む　炭化物大～中粒 10%含む　火山灰 5%含む
F　10YR3/4 暗褐色シルト　しまりあり　地山中粒 10%混じる　火山灰 1%含む
G　10YR3/4 暗褐色シルト　しまりあり　地山大粒 10%混じる　火山灰 15%含む
H　10YR3/3 暗褐色シルト　しまりあり　地山土 40%混じる　火山灰 1%含む
I　10YR3/4 暗褐色シルト　しまりあり　地山土 20%混じる　火山灰 1%含む

第13図　ＳＩ12竪穴住居跡、ＳＫ23土坑、ＳＸ（Ｐ）11ピット群、ＳＸ（Ｎ）13焼土群

のピットがある。この範囲では柱穴配置の規則性は明確ではない。

試みに、深さが32㎝のＰ12－１と42㎝のＰ12－６を結ぶ線を想定すると、ほぼ南西壁と平行となる。これを手掛かりに、ＳＸ（Ｐ）11ピット群のピットも含めＳＩ12竪穴住居跡周辺のピットで深さが30㎝以上あって竪穴住居跡の壁際の柱穴となりそうなものを探すと、ＳＸ（Ｐ）11ピット群のＰ11・14・37・32がある。これらによって４隅と長軸方向の壁際に対面する２組の柱穴配置をとることを想定してみると、竪穴住居跡の長軸は隅柱間の芯々距離で約４ｍ70～80㎝、短軸方向は約３ｍ70～80㎝と推定でき、竪穴住居の平面形態は長方形となる。また、Ｐ14・32までは広がらず、Ｐ12－３・５・１・６とＳＸ（Ｐ）11ピット群のＰ11・37が主柱穴と考えた場合には、４隅と短軸方向の壁際に対面する１組の柱穴配置となる。この場合は、竪穴住居跡の長軸は隅柱の芯々距離で約３ｍ70㎝～４ｍ30㎝、短軸方向は約３ｍ20～30㎝と推定でき、竪穴住居跡の平面形態は台形となる。

明瞭なカマド跡は検出されなかったが、竪穴住居跡の範囲を上述のようにＰ14とＰ32を結ぶ線までと想定した場合、ＳＸ（Ｎ）13焼土群の焼土Ａがカマド燃焼部の痕跡である可能性がある。また、Ｐ11とＰ37を結ぶ線までと想定した場合には、ＳＸ（Ｎ）13焼土群の焼土Ｂがカマド燃焼部の痕跡である可能性がある。いずれにしても、焼土の覆土が撹乱を受けた状態であったので、カマドの袖、煙道を構築した痕跡は検出できず、本来カマドを付設していたかどうかを判断するには至らなかった。しかし、後述するようにＳＫＩ15竪穴遺構の埋土中に含まれていた土師器支脚の破片が、本来は本遺構のものであったとすれば、カマドが付設されていた可能性が高いとみることもできる。

南西壁直下の壁溝から約10㎝離れた地点から北東側では、平坦な床面が強い火熱を受けて赤変、硬化した地床炉が長さ約２ｍ60㎝、幅約80㎝の範囲で検出された。火焼面は６箇所に分かれるが、焼土粒や炭化物はこの範囲一体に散乱しており、本来は一体の施設として認識されていたと思われる。この範囲よりもやや南東側にも同様の地床炉がある。

遺物は、埋土上層（1・2・3層）から土師器甕６個体分の破片、床面から土師器坏２個体が出土した。第14図７の土師器坏は床面出土である。口径が比較的小さく、口縁部が大きく外反する。

ＳＩ12竪穴住居跡
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒5%混じる　焼土小粒2%含む　炭化物小粒2%含む
2　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒2%混じる　焼土極小粒1%含む　炭化物極小粒1%含む
3　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土5%混じる　焼土小粒2%含む　炭化物中粒2%含む
4　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　やや粘性あり　地山土40%混じる　焼土極小粒2%含む　炭化物極小粒2%含む
5　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒5%混じる　炭化物極小粒2%含む
6　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり　地山土20%混じる
7　10YR3/3暗褐色粘土質シルト　しまりあり　地山土40%混じる
8　10YR6/6明黄褐色粘土質シルト　しまりあり　黒褐色土20%混じる
9　10YR2/3黒褐色粘土質シルト　ややしまりあり　やや粘性あり　地山中粒20%混じる
11　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　しまりあり　地山土30%混じる
12　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土10%混じる　炭化物極小粒2%含む
13　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり　地山中～小粒10%混じる　炭化物小粒2%含む
14　10YR4/4褐色シルト　しまりあり　地山土40%混じる

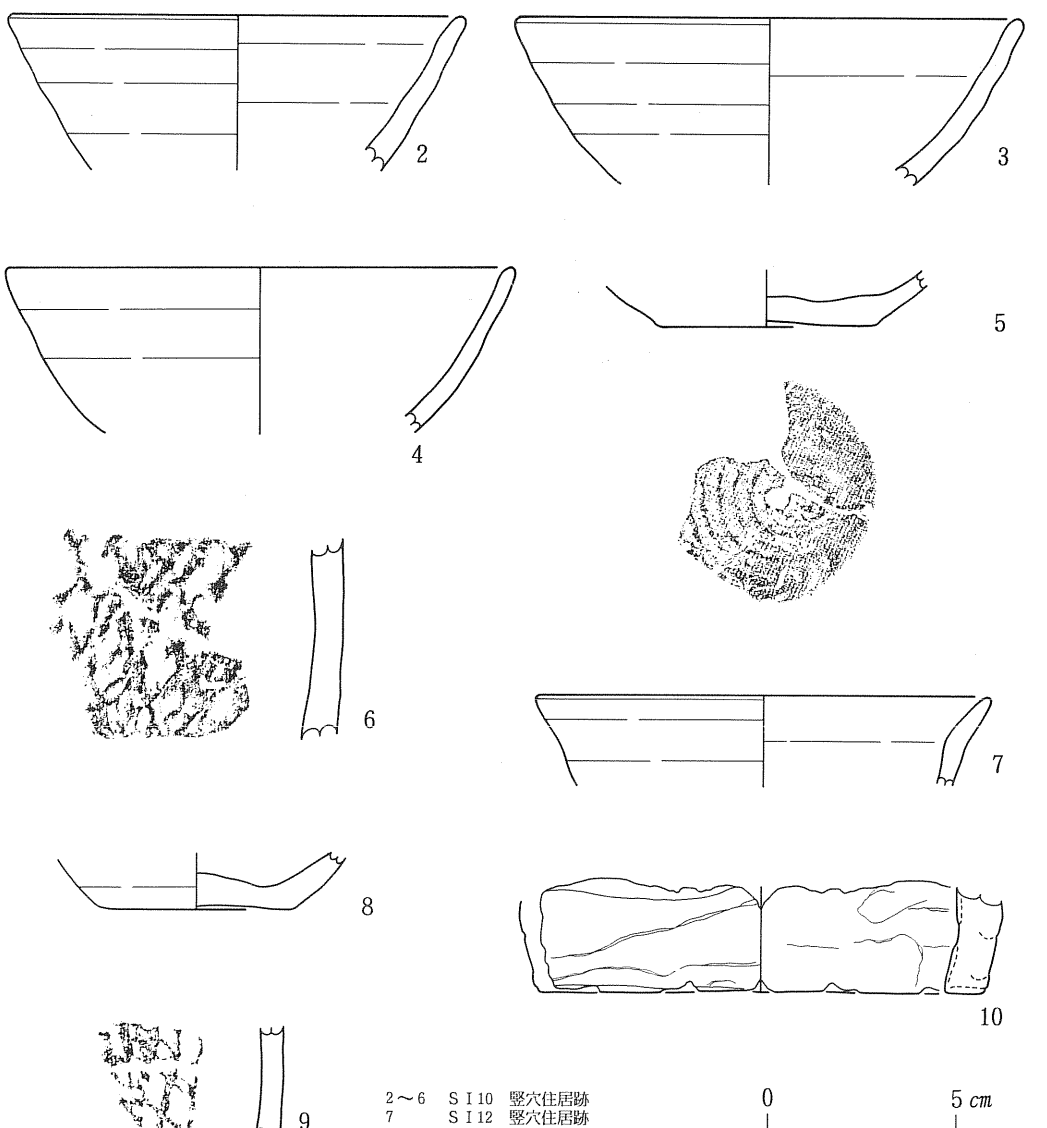
この他、床面からは回転糸切り痕のある土師器坏の底部が出土した。須恵器は出土しなかった。

(2)　土坑

ＳＫ23土坑（第13図、図版２－３・４・５）

調査区南西部の斜面中腹、ＭＢ49グリッドで検出した。ＳＩ12竪穴住居跡と重複し、本土坑が新しい。ＳＩ12竪穴住居跡の廃棄後、竪穴に５㎝程暗褐色シルト（埋土４層）が堆積した後で掘り込まれたもので、ＳＩ12竪穴住居跡の埋土４層上面が検出面である。

上端の平面形は、直径が約１ｍ30㎝（最大径１ｍ38㎝、最小径１ｍ24㎝）の円形である。下端



第14図　遺構内出土遺物(2)　ＳＩ10・12竪穴住居跡、ＳＫＩ15竪穴遺構

は、長径１ｍ４㎝、短径86㎝の楕円形である。底面西側には、長径82㎝、短径48㎝の楕円形に５㎝ほど窪んだ部分がある。底面は平坦であるが、北側に傾斜し、南側と北側では10㎝程の高低差がある。検出面からの深さは南側で14㎝、北側で28㎝である。

埋土は黒褐色シルトと暗褐色シルトからなる。地山土が多量に混じり壁の崩落土と考えられるＤ層以外の各層には火山灰が含まれること、最も火山灰を含むＡ層は埋土上部から底面にまで達していること、火山灰はＳＩ12竪穴住居跡の埋土３層、４層には含まれずＳＫ23土坑の埋土にのみ混じることから、火山灰降下後に、火山灰を含む土を用いて土坑を人為的に埋め戻したものと推測される。したがってこの土坑から検出した火山灰は、降灰で堆積したものではなく人為的搬入による二次的な堆積であると考えられる。土坑の構築時期は火山灰降下後、そう遅くない時期と推定される。火山灰は屈折率測定の結果、十和田ａ火山灰の可能性が高い。

底面西側の窪みでは２箇所で炭化した板材を検出した。炭化板材は、Ａ：長さ約24㎝、幅約９㎝、厚さ１～２㎝の杉材、Ｂ：長さ約17㎝、幅約８㎝、厚さ１～２㎝の栗材である。この部分を覆う埋土Ｅ層、Ｂ層にも炭化物の大粒が多く含まれていた。炭化材以外の遺物は出土しなかった。炭化板材Ａの^{14}Ｃ年代測定値は1,420±80（Ａ.Ｄ.530）であった（第５章参照）。

３　鎌倉時代

鎌倉時代の遺構は、建物跡１棟、竪穴遺構(註)１棟、カマド状遺構１基である。いずれも調査区中央部の斜面下部で検出した。ＳＢ22建物跡の溝底面から出土した珠洲陶器の壺が、吉岡康暢氏の珠洲陶器編年の第Ⅱ$_1$期（13世紀第１四半期）頃製作と考えられること、ＳＢ22建物跡の廃棄後にその上を覆う土層は、焼土粒、炭化物粒を含み地山土がブロック状に多量に混じる暗褐色土層であるが、この土層は人為的埋め戻しであるＳＫＩ15竪穴遺構の埋土と同じもので、これら２棟は同時期存在と考えられることから、これら２遺構の廃絶年代の上限をおよそ西暦1,200年前後と推定し、帰属時期を鎌倉時代とした。また、ＳＮ19カマド状遺構は、ＳＢ22建物跡の人為的埋め戻しによる覆土の広がりの上面から構築されており、ＳＢ22建物跡とＳＫＩ15竪穴遺構の廃絶直後の造営と考えられることから、鎌倉時代に帰属すると判断した。

（註）

これに類する遺構について、工藤清泰氏は浪岡城跡での検出例の分析から、性格不明竪穴遺構と「中世竪穴建物跡」とを区別し、竪穴建物跡の基礎概念を４点にまとめている。［昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書「浪岡城跡Ⅶ」浪岡町教育委員会　1985（昭和60年）］これとは別に、遺構の呼称については渡辺修一氏の問題提起があり、従来の竪穴住居跡を竪穴建物跡と呼称することを提案している。［「竪穴住居」か「竪穴建物」か　『研究連絡誌』第34号　財団法人千葉県文化財センター　1992（平成４年）］渡辺氏の主張に沿えば、工藤氏の竪穴建物跡は是正されるべき用語（竪穴住居跡）の存在を前提にしてお

り、用語体系全体を再検討しようとする場合にはそのまま容認することができない用語規定となろう。渡辺氏は従来の用語を整理するに当たって掘立柱建物跡については見解を保留しており、今後さらに主張を展開して行く途中と考えられる。渡辺氏の主張は大変重要な問題提起であるとの認識に立ちながらも、現時点では従来の用語体系に代わる用語体系が不完全な状態であるので、本書では従来の用語を踏襲しておく。

竪穴建物跡の用語も工藤氏の基礎概念に当てはめて考えれば、本遺跡の竪穴遺構は、方形であること、中世の遺構であること、炉・カマドがなく張り出しがあることの３点で工藤氏の竪穴建物跡の要件を満たすが、規格制が明瞭に認められる柱穴が存在しないため、上部構造を推定せしめる柱穴等の存在という要件を確実に満たすものではない。したがって竪穴建物跡とは呼称せず竪穴遺構とする。

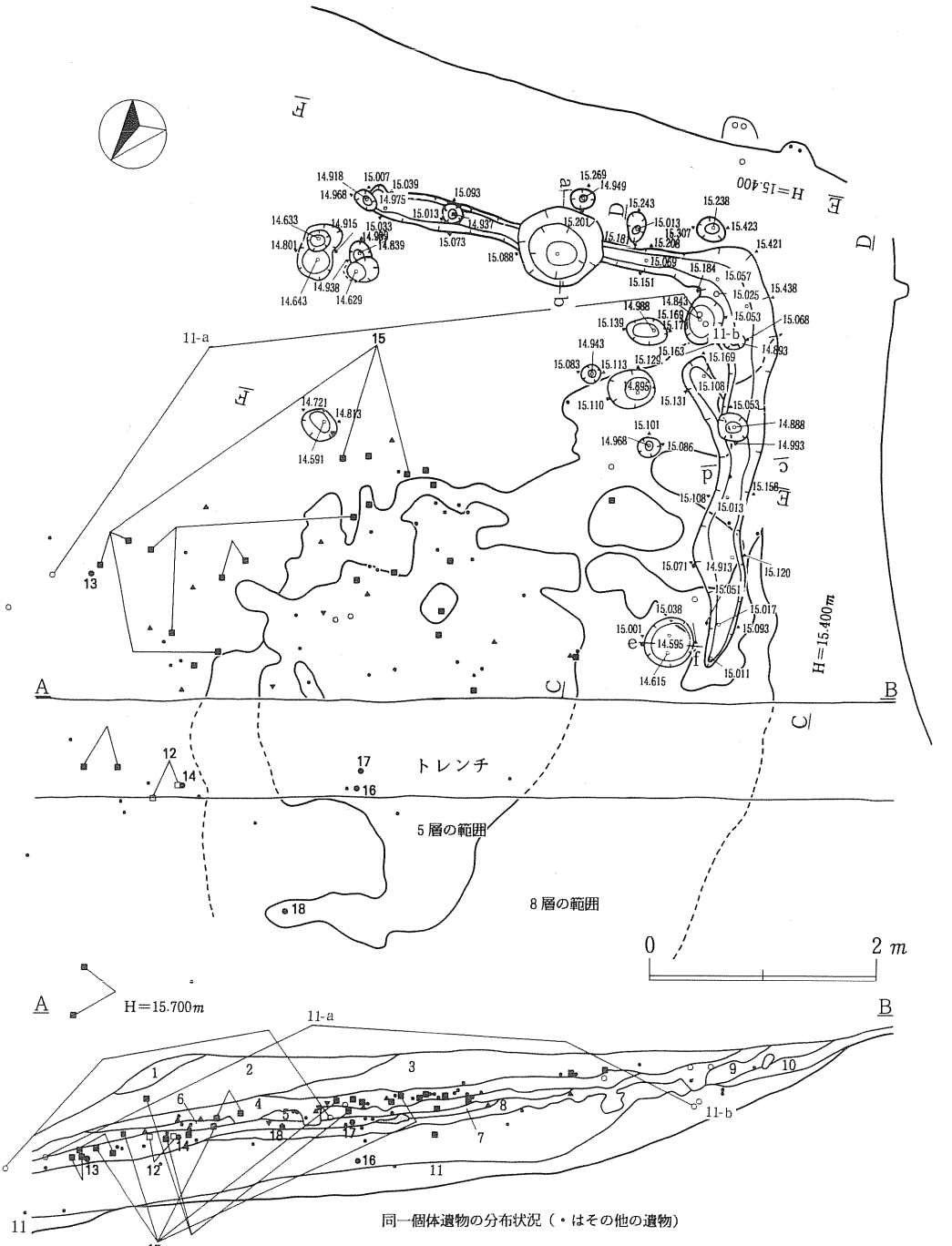
また、遺構を数える際の「軒」と「棟」については、「「軒」は「家」の、「棟」は「建物」の助数詞であり、竪穴住居一つが一つの家を示すとは言えない事例の存在が既に明らかになっている」という渡辺氏の主張が妥当と考えられるので、明らかに「家」を意味する場合以外は「棟」を用いた。

(1)　建物跡

ＳＢ22建物跡（第15・16・17・18図、図版４－１・２・３、７・８）

調査区中央部の南西から北東に下る斜面下部、ＬＳ51、ＬＴ50・51、ＭＡ50・51グリッドで検出した。Ⅰ層（表土）と盛土、Ⅱ層（黒褐色土）を除去した段階で、ＬＴ50・51、ＭＡ51グリッドで、焼土粒、炭化物粒、土師器小破片とともにブロック状の地山土が多量に混じる暗褐色土層（第15図の５・６・８層）の広がりを検出した。特に地山土が多く含まれる５層と８層の範囲を図示したが、６層はこの範囲の北東側に斜面に沿って広がる。ＳＢ22建物跡の北西側半分は、この暗褐色土に覆われ、南東側半分はⅢ層（地山漸移層）上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＢ22建物跡の北西側の断面土層を観察すると、地山土が多量に混じる層は黒褐色土の間層（７層）を挟んで上下２層（５層と８層）に分離される。５層と同じ堆積面では斜面の下方に５層より地山土の混じる割合が少ない６層が広がる。５・６層を覆う４層にも焼土粒、炭化物粒が多く含まれる。これらの土層には土師器の小破片が多く含まれ、それに混じって珠洲陶器の壺の破片もあった。調査区北東部には埋土下層に縄文時代中期後葉の土器を包含する埋没沢があるが、平安時代には９層上面近くまで埋没が進み、4～8層が堆積する直前には、10ｍ四方ほどが周囲よりやや低い窪地となっていたと推測される。４～８層の分布範囲はこの窪地を中心に、埋没沢の南東

4　10YR3/2 黒褐色シルト　しまりあり　地山中～小粒 2%混じる　焼土小粒 5%含む　炭化物小～中粒 7%含む
5　10YR3/3 暗褐色シルト　しまりあり　地山大ブロック 40%混じる　焼土小～中粒 3%含む　炭化物小粒 5%含む　地山・焼土・炭化物の混じった再堆積土
6　10YR3/3 暗褐色シルト　しまりあり　地山土 10%混じる　焼土極小粒 1%含む　炭化物極小粒～小粒 2%含む
7　10YR3/2 黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒 2%混じる　焼土小粒 5%含む　炭化物小粒 5%含む
8　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまりあり　地山土 5%混じる　焼土小～中粒 7%含む　炭化物極小～小粒 3%含む
9　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト　しまりあり　やや粘性あり　暗褐色土 30%混じる　地山小粒 5%混じる　焼土小粒 1%含む　炭化物小粒 2%含む
10　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり　やや粘性あり　地山土中の礫 (30mm 以下) 20%含む
11　10YR4/4 褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり　やや粘性あり　暗褐色土 30%混じる　地山土中の礫（10mm 以下）10%含む



1　10YR6/6 明黄褐色礫混シルト　しまりあり　地山の再堆積　（盛土）
2　10YR2/3 黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒 5%混じる　焼土小粒 1%含む　炭化物小粒 5%含む　（盛土）　陶磁器含む
3　10YR3/2 黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒 2%混じる　焼土極小粒 1%以下含む　炭化物極小粒 1%含む

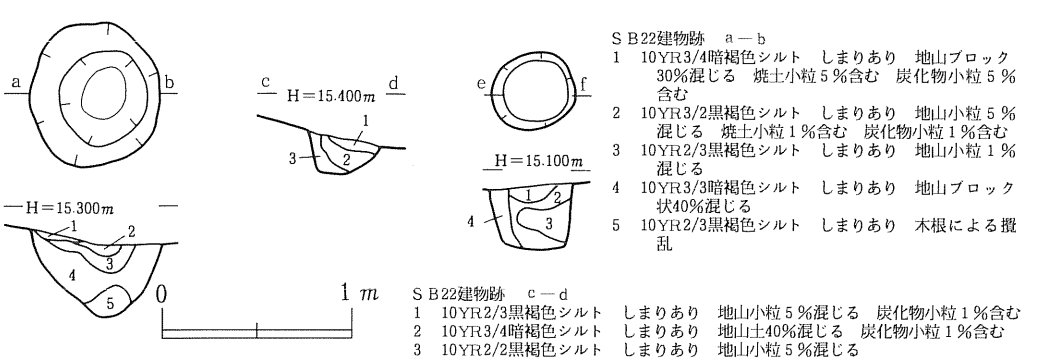
第15図　ＳＢ22建物跡

側一帯の南北約15ｍ、東西約８ｍの範囲に限られる。土師器や珠洲陶器の同一個体破片が４～８層にまたがって含まれること、地山土がブロック状に大量に含まれ、焼土粒、炭化物粒の粒子が比較的大きく、分粒が進んでいないことから、４～８層は長期間にわたって流水等によって自然流入して堆積した結果であるとは考えられず、短期間に人為的に埋め立てたものと考えられる。さらに、地山土が多く混じる５・８層はＳＢ22建物跡の溝や柱穴様ピットの内部にも堆積していること、ＳＢ22建物跡の北東半分は、床面が直接８層に覆われていることから、ＳＢ22建物跡廃棄直後に４～８層の埋め立てが行われたと考えられる。

４～８層の供給源は、本遺構とＳＫＩ15竪穴遺構の上方にあるＳＸ（Ｐ）11ピット群周辺の若干の平場（第13図参照）が考えられる。ここには平安時代のＳＩ12竪穴住居跡があり、地山を削って平場を作出した際にＳＩ12竪穴住居跡の一部を壊し、カマドや地床炉の炭化物、焼土とともに残存していた土師器等も小破片となって埋土に混入したのではなかろうか。

ＳＢ22建物跡は、上記４～８層に一部が覆われたＬ字形の溝と、溝の東側に地山土を削って作り出された平場及び柱穴様ピットと小土坑からなる。建物跡はＬ字形の溝に囲まれた平場内に建てられている。

Ｌ字形の溝は平場の南東側と南西側を区画する。溝が折れ曲がる西隅が斜面の最も高い位置にあたるので、掘り込みの深さが最も深くなる。斜面上部側にあたる南西側では、溝の長さは３ｍ48㎝、溝の深さは外側で36～６㎝、平場側で13～３㎝である。南西側は長さ３ｍ44㎝、深さは外側で37～４㎝、平場側で９～２㎝である。溝の底面標高は西隅が最も高く、南西側の末端で８㎝、南東側の末端で５㎝低い。溝の外側上端ラインの方位は、南西側がＮ－37°－Ｗ、南東側がＮ－61°－Ｅである。南隅における溝の屈曲角は98°である。南東側の溝の中央に直径約70㎝、深さ約40㎝、断面形が摺鉢形の小土坑が付属する。



ＳＢ22建物跡　ａ－ｂ
1　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり　地山ブロック30%混じる　焼土小粒５%含む　炭化物小粒５%含む
2　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒５%混じる　焼土小粒１%含む　炭化物小粒１%含む
3　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒１%混じる
4　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山ブロック状40%混じる
5　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　木根による攪乱

ＳＢ22建物跡　ｃ－ｄ
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒５%混じる　炭化物小粒１%含む
2　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり　地山土40%混じる　炭化物小粒１%含む
3　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒５%混じる

ＳＢ22建物跡　ｅ－ｆ
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山中粒10%混じる　炭化物中粒2%含む
2　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山ブロック40%混じる　炭化物小粒5%含む
3　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山中粒5%混じる
4　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒2%混じる

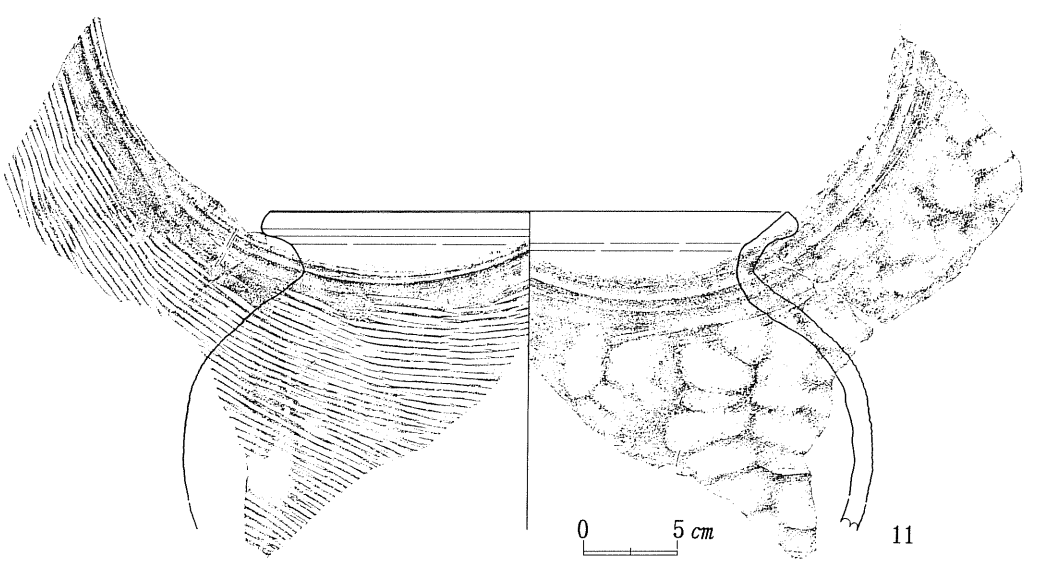
第16図　ＳＢ22建物跡のピットと溝

溝に囲まれた平場は、南西側の溝のほぼ中央から南東側の溝の先端を結ぶ範囲は地山を削り、それより北側の地山面が沢に向かって傾斜する範囲では地山漸移層を残して作り出している。南側半分はよく残っているが、北側は調査区東側の沢による侵食をうけて地山漸移層が流出しており、平場の北隅は失われている。本来は約３ｍ50㎝四方の平場であったと推測される。

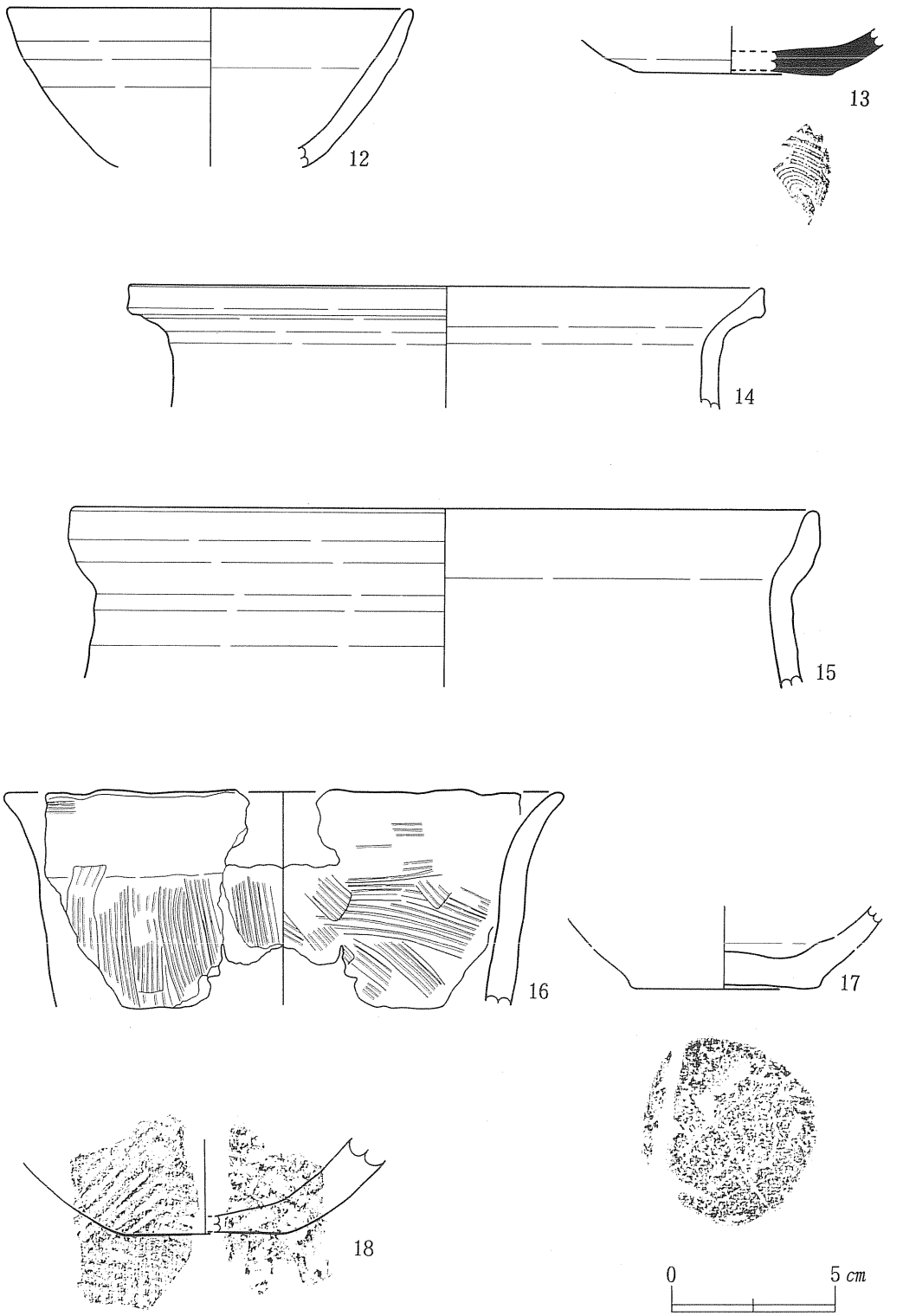
柱穴様ピットは溝内に４基、平場に11基、南東側の溝の外側に溝に沿って３基を検出した。このうち深さが30㎝以上あるＰ１・８・15が主柱穴で、建物の東・南・西も隅柱になる。柱の芯々距離はＰ１とＰ８間が３ｍ10㎝、Ｐ８とＰ15間が２ｍ88㎝である。柱間を結ぶラインは、溝とほぼ平行し、南西側がＮ－35°－Ｗ、南東側がＮ－57°－Ｅである。南隅における屈曲角は92°である。北隅柱の推定位置では、平場を作り出していたはずの地山漸移層が崩れて急斜面になっていて検出できなかった。これら以外の柱穴様ピットの配置に規則性はない。

カマド、炉跡等の火気施設は検出されなかった。

遺物は溝の中から土師器坏２個体、主柱穴のＰ８内から珠洲陶器１個体が出土した。溝中から出土した土師器はいずれも著しく磨滅した小破片である。珠洲陶器は覆土の４～６層に含まれていたものも合わせると10破片があり、すべて同一個体である。柱穴内から出土した破片と平場北側の斜面６層中出土の破片が接合した。第17図11は吉岡康暢氏の分類によれば、紐叩打成形による壺Ｔ種である。倒卵形の器形で、長めの頸部がコの字形に強く外半する。推定口径27.4㎝、推定胴径36.6㎝、推定口胴指数は75で、比較的広口である。胴部の叩打は、頸基部から１段下がった部位から右斜位の打圧痕が始まっている。打圧密度は３㎝当たり８目である。内面には素文の押圧具痕が残る。口頸部はロクロなで回し調整で、内面の屈曲部には口縁部成形の際の棒状工具によ



第17図　遺構内出土遺物(3)　ＳＢ22建物跡溝内



第18図　遺構内出土遺物(4)　ＳＢ22建物跡

る浅い押引き痕が残る。口縁部は口端が肥厚し、端面がやや丸みを帯びた方頭で、内端は内側から摘み気味に仕上げている。頸部には口縁端部を外傾させた際の稜線が残る。以上のような珠洲陶器編年のⅠ期、Ⅱ期の特徴を有することから、この珠洲陶器壺の帰属年代は西暦1,200年を中心とする約50年間の幅の中に収まるものと考えられる。

第18図13～15はＳＢ22建物跡を埋め立てた覆土から出土した。13は６層から出土した須恵器坏で底面に回転糸切り痕がある。本遺跡の須恵器はこの１点のみである。12は７層から出土した土師器坏、14は土師器甕である。口縁部が外反した後、先端が上方に引き出され断面形が三角形となる。12、14とも全体が２次火熱によって赤変し脆い。16も７層から出土した。口縁部が外反する小型の甕である。口縁部の外面は横方向のハケメ調整痕が部分的に残る。胴部は縦方向のハケメ調整を施す。口縁部から胴上部の内面は横方向、胴中央部は斜め方向のハケメ調整を施す。17は９層から出土した土師器小型甕の底部である。底面に刻線がある。15は広い範囲で４～７層から同一個体の破片が出土した。大型の土師器甕である。口縁部が外反した後、口唇部が上方に直立する。胴部はやや膨らむ。口縁部から胴上部は内外面ともロクロ調整、外面の胴中央部以下は縦方向のヘラケズリである。18は７層から出土した。内外面にタタキ目のある甕の底部である。底面が直径５㎝ほどの平底となっている。二次火熱によって赤変している。

(2)　竪穴遺構

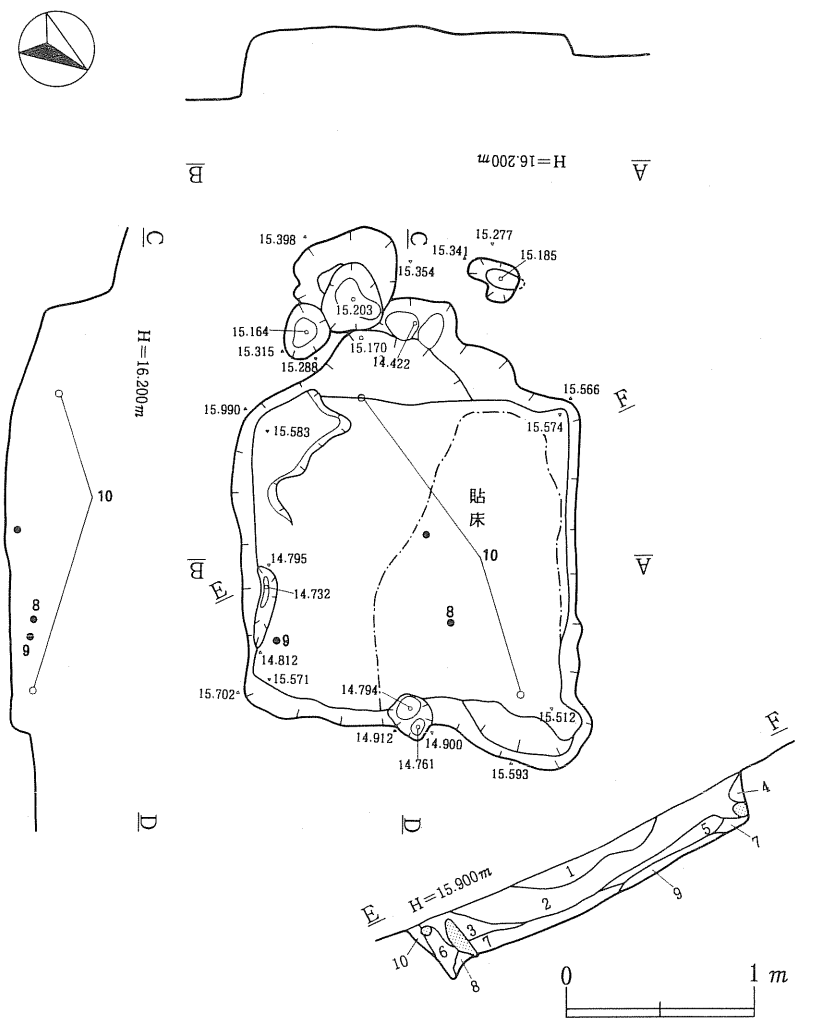
ＳＫⅠ15竪穴遺構（第19・14図、図版３－２、７）

調査区中央部の南西から北東に下る斜面下部のＬＴ49・50グリッドで検出した。Ⅰ層（表土）と盛土、Ⅱ層（黒褐色土）を除去した段階で、Ⅲ層（地山漸移層）上面で地山ブロックを含む黒褐色土の落ち込みによる方形のプランとして検出した。ＳＢ22建物跡の南側、斜面のやや上位に位置する。２棟の間は最短距離で1.5ｍ離れている。

南西壁の中央部は床面が緩やかに上る張り出しとなっている。張り出しは北東側で上端の幅約１ｍ６㎝、先端にあたる南西側の上端で60㎝、この間の長さが56㎝で全体の形は台形である。張り出しの先端では底面が住居跡床面から18㎝高くなり、そこから壁がやや開き気味に立ち上がる。壁の高さは34㎝である。南東壁は残りがよく、中央部では壁の高さは34㎝である。北西壁と南東壁は上部が削平され高さは10～15㎝程度しかない。北隅は壁が崩れて変形している。南西壁上端の両端を結んだ直線距離は１ｍ72㎝である。南東壁で１ｍ54㎝、北西壁では１ｍ78㎝、北東壁は１ｍ82㎝である。壁の下端の長さは、南西壁が１ｍ62㎝、南東壁で１ｍ46㎝、北西壁では１ｍ56㎝、北東壁は１ｍ62㎝である。壁の下端ラインどうしがつくる角は各隅とも直角に近い。全体の形態は正方形に近い方形である。

南西壁の方位はＮ－31°－Ｗである。北東壁の方位はＮ－29°－Ｗ、北西壁の方位はＮ－57°－Ｅ、南東壁の方位はＮ－57°－Ｅである。

床面の北側半分には、焼土粒と炭化物粒を少量含み地山土が多く混じった黄褐色粘土質シルト（9層）で張床をしてあり、この部分が５㎝ほど高くなっている。張床は、竪穴中央付近から張り出しと竪穴壁の接点付近までを斜めに結んだ範囲の北側にのみ認められ、張り出し部分にはかからないようになっている。張床もそれ以外の部分もほぼ平坦である。南隅付近が若干窪んでいる。壁溝、カマド、地床炉はない。



1　10YR2/3 黒褐色シルト　ややしまりなし　地山大ブロック 20%混じる　焼土小粒 1%含む　炭化物極小粒 1%含む
2　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト　しまりあり　地山小粒 5%混じる　焼土小粒 1%含む　炭化物極小粒 1%含む
3　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　しまりあり　粘性ややあり　地山中粒 5%混じる　焼土小粒 2%含む　炭化物小粒 2%含む
4　10YR3/2 黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒 5%混じる　焼土小粒 2%含む　炭化物小粒 2%含む
5　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり　粘性あり　地山中粒 10%混じる　焼土中粒 2%含む　炭化物中粒 2%含む
6　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　しまりあり　粘性ややあり　地山小粒 5%混じる
7　10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまりあり　地山土 30%混じる　炭化物極小粒 1%含む
8　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　しまりあり　地山ブロック40%含む
9　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり　地山土 30%混じる　焼土小粒 2%含む　炭化物小粒 2%含む

第19図　ＳＫＩ15竪穴遺構

柱穴様ピットは、張り出しの外側に３基、北東壁の中央に１基検出した。いずれも浅く、この竪穴住居跡に確実に付属する柱穴であると断定するに至らなかった。

埋土の主体は黒褐色シルト（1・2層）と暗褐色シルト（3層）で、炭化物と焼土の小粒を少量含む。床面を直接覆う最下層は、褐色～黄褐色粘土質シルト（5・7層）である。5層には焼土粒と炭化物粒を含む。これらの各層には地山土が混じっており、特に1層、7層には大ブロック状に多量に、5層には中程度に混じる。床面にカマドや地床炉等の火気施設はなく、埋土下層の5層、7層中に含まれる焼土粒や炭化物粒の供給源がこの竪穴遺構自体でないことは明らかで、大ブロック状の地山土とともに他所から持ち込まれたものと考えられる。最上層の1層にも大ブロック状の地山土が多量に混じることから、この竪穴遺構の埋土は廃棄後の自然流入ではなく、焼土、炭化物を含んだ地山土が多く混じる土によって完全に埋め戻されたものと推定される。この土はＳＢ22建物跡を覆う４～８層と基本的に同じで、上方のＳＩ12竪穴住居跡の一部を壊して平場を作出した際に得られた土と考えることもでき、ＳＩ12竪穴住居跡に含まれていた焼土、炭化物、土師器小破片が本遺構の埋土に混入したものである可能性もある。

遺物は、埋土上層（1層、2層）から出土した。土師器坏2個体、土師器甕1個体、支脚1個体分の破片である。床面からは出土しなかった。第14図8の坏は表裏面とも磨滅が著しいが、底面に回転糸切り痕がわずかに残る。9は表面に斜格子目タタキ痕がありＳＩ10竪穴住居跡出土の6と類似する。10は支脚で表裏面に粘土紐の接合痕が明瞭に残る。粗砂を少量混入する。二次火熱により表面は赤変し、表裏面とも若干の剝落があるが、磨滅はしていない。下端部径より天井部径がやや小さい形態と考えられる。器高、下端部の切り込みの有無は不明である。須恵器は出土しなかった。

(3)　カマド状遺構

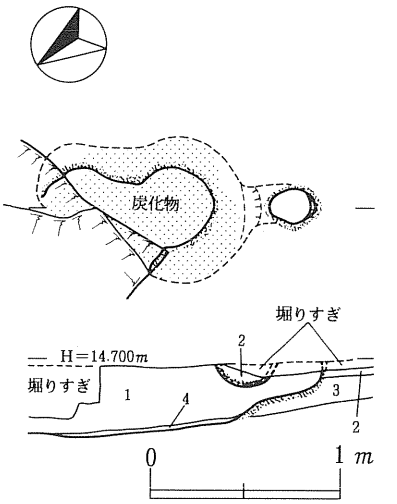
ＳＮ19カマド状遺構（第20図、図版４－４・５）

調査区北東部の斜面下部、ＬＴ52グリッドで検出した。調査区北東部の埋没沢の範囲に当たる。この沢は平安時代までに第14図9層上面近くまで埋没が進み、その後、鎌倉時代の初期にＳＢ22建物跡とＳＫＩ15竪穴遺構を埋め立てた際に、地山土がブロック状に大量に混じり、焼土粒、炭化物粒の粒子を多く含む４～８層が堆積する。本遺構はこの地山土がブロック状に大量に混じる層の上面で検出した。この層の上に自然堆積するⅡ層（黒褐色土層）は本遺構をも覆い、遺構内部にも類似する土が堆積していた。したがって本遺構はＳＢ22建物跡とＳＫＩ15竪穴遺構よりは新しい遺構であるが、それほど大きな時間差はないと考えられる。

北西側の一部は掘り過ぎて不明であるが、開口部の平面形は推定長88㎝、推定幅28～42㎝の「8」の字形、底面は推定長１ｍ６㎝、推定幅68～78㎝の「8」の字形と考えられる。中心部の深さは36㎝である。壁は底面から内湾気味に鋭角的に立ち上がり、横断面形はつぶれた台形を呈する。

長軸の南西端から地下式の煙道が延びる。煙道の方向はカマド本体の長軸方向と一致する。煙道の先端は直径約20㎝の円形で、開口部の南西端から28㎝離れて開口する。底面は平坦で、煙道側に向かって緩やかに高くなる。煙道の付け根部分はさらに約８㎝高く、緩い段差がある。煙道の底面は煙出し部分に向かってしだいに上がって行き、煙出しは真上に開口する。底面の傾斜角は約６度、煙道は約14度である。

内側の壁面は、厚さ２～５㎝にわたって明赤褐色に変色し堅く焼け締まっている。さらに外側は漸移的に暗赤褐色となり硬化している。火熱の影響によって硬化変色した部分の厚さは５～８㎝に及ぶ。煙道の底面、側面ともに火熱によって硬化し暗赤褐色に変色している。煙道の開口部では北東側（本体側）よりも南西側（先端側）がより強く赤変している。



1　10YR3/2黒褐色粘土質シルト　しまりあり
　炭化物小粒２％含む
2　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり
　地山土20％混じる　焼土小粒１％含む
　炭水物小粒２％含む
3　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト　しまりあり
　地山小粒 2％混じる　炭化物小粒 1％含む
4　10YR2/1 黒色炭化物層　稲ワラ状の草本植物の炭化物層

第20図　ＳＮ19カマド状遺構

底面のほぼ全面には、厚さ２～４㎝の層状に炭化物が堆積していた。木片状の炭化物は見られず、すべてワラ状の炭化物であった。植物珪酸体分析によればクマザサ属、イネ、ウシクサ族（ススキ属など）である。また、^{14}Ｃ年代測定値は960±80（A.D.990）であった（第５章参照）。

埋土はⅡ層を母材とする黒褐色粘土質シルトである。カマド本体内部、煙道内ともに同一の埋土である。

遺物は出土しなかった。

４　近世～現代

(1)　土坑

ＳＫ01土坑（第21・22図、図版６－１、９・10・11）

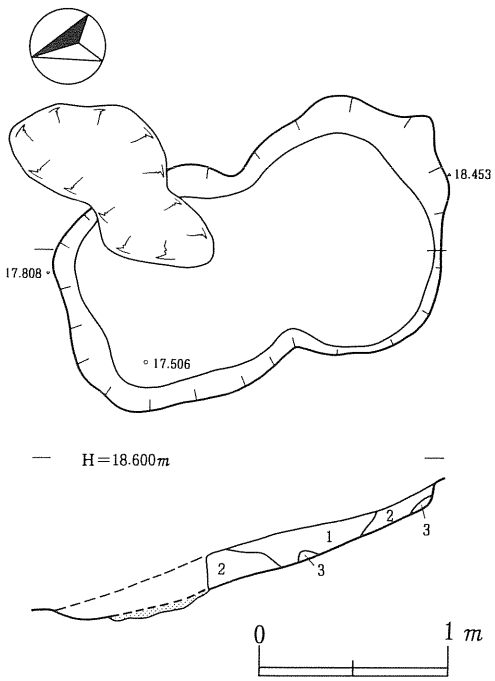
調査区南部の斜面上部で、ＬＳ・ＬＴ46グリッドで検出した。表土除去中に陶磁器が集中して大量に出土し、精査したところⅡ層（黒褐色土）中で土坑を検出した。

上端の平面形は「8」の字形で、長軸２ｍ14㎝、短軸96㎝～１ｍ30㎝である。下端は、長軸１ｍ82㎝、短軸76㎝～１ｍ12㎝である。底面はほぼ平坦であるが、斜面に沿って北側に傾斜し、南側と北側では60㎝程の高低差がある。検出面からの深さは南側で10㎝、北側で15㎝であるが、陶磁器の出土状況から土坑の掘り込み面はもっと上位でⅠ層（表土）中から掘り込まれていたと考え

られ、本来はさらに20㎝程度深い土坑であったと推測される。

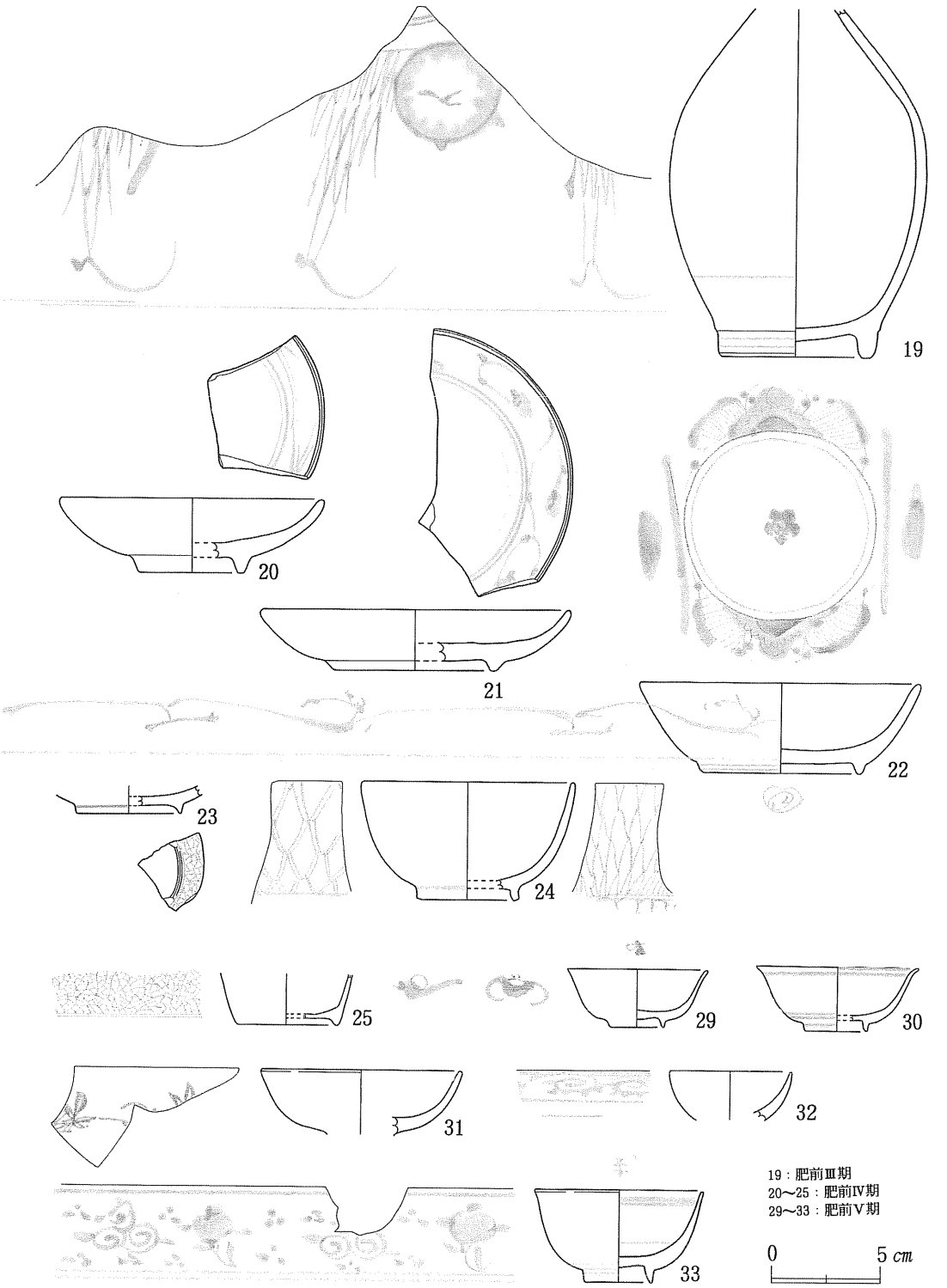
埋土は黒褐色シルトと暗褐色シルトからなり、いずれにも地山土が多量に混じる。陶磁器は土坑確認面から底面まで間隙なく包含されている。また土坑確認面より上位の表土中ではゴム靴やビニール合羽等が焼けて融着した陶器破片も出土した。

出土した陶磁器は器種、生産地、時期ともに多岐にわたる（第２表）。器種は皿、碗、杯、徳利、摺鉢、甕、焜炉が主であるが、猪口、燗徳利、仏飯器、土瓶、土瓶の蓋、湯呑み、レンゲ、戸車、ガイシ、鉢、塩甕の蓋、壺、灯明台、灰吹き、おろし皿、七輪のさな、土人形があり、その他にガラス製の電灯傘がある。出土した陶磁器が使用され始めた時期は、最も古い様相の第22図19（肥前Ⅲ期、徳利）から17世紀後葉頃と考えられる。一括廃棄遺物中には、肥前Ⅳ期（1690～1780年）、肥前Ⅴ期（1780～1860年）、それ以降では明治期、大正～戦前、戦後のものも混じる。第22図20～25・図版９の26・27のように、肥前Ⅳ期の磁器でくらわんかタイプの碗、皿が主である。第22図29～33・図版10の29～46・図版11の47～50は肥前Ⅴ期の製品を中心とする時期のもので、肥前もしくは肥前系の他窯製品の碗、皿と白岩系の在地産陶器の組み合わせである。図版９-28の唐津Ⅳ期の擂鉢も出されている。器種も多く、器種構成が比較的良好にわかる。明治期としたものは主に型紙刷絵印刷の碗、皿で、図版11の52～54がある。大正～戦前と思われるものの主体は銅板印刷の碗、皿である。戦後の製品と思われる銅板印刷より後出のシールプリント等もある。このような状況から、近世後期以降、しだいに増加しながら現代まで伝世した陶磁器類が、戦後のある時期に斜面に穴を掘って不要物を一括投棄し、可燃物を焼いた後に埋め戻したものであると考えられる。



1　10YR2/2 黒褐色シルト　ややしまりなし　地山ブロック10%混じる　植物根が多く入り孔隙多い　陶磁器を多量に含む
2　10YR3/3 暗褐色シルト　ややしまりあり　地山ブロック30%混じる　陶磁器を多量に含む
3　10YR5/6 黄褐色粘土　きわめてしまりあり　粘性あり（地山）

第21図　ＳＫ01土坑



第22図　遺構内出土遺物(5)　ＳＫ01土坑

第2表　ＳＫ01土坑出土陶磁器一覧表

時期（　）は肥前磁器の時期区分	産地	器種 磁器 皿	磁器 碗	磁器 杯	磁器 猪口	磁器 徳利	磁器 燗徳利	磁器 仏飯器	磁器 土瓶の蓋	磁器 湯呑	磁器 レンゲ	磁器 戸車	磁器 ガイシ	磁器 不明	陶器 碗	陶器 徳利	陶器 土瓶	陶器 鉢	陶器 擂鉢	陶器 甕	陶器 塩甕の蓋	陶器 壺	陶器 灯明台	陶器 灰吹き	陶器 おろし皿	陶器 焜炉	陶器 土師ざら	陶器 土人形	陶器 不明	陶器 堅器 湯呑	陶器 ガス電灯の傘	計	時期毎の計
17Ｃ中～17Ｃ末　（Ⅲ期）	肥前					1																										1	1
17Ｃ末～18Ｃ後　（Ⅳ期）	肥前	7	3		1																											11	12
	唐津																		1													1	
18Ｃ後～19Ｃ中　（Ⅴ期）	肥前		4	4	1	1		1																								11	47
	肥前系	14	1			1																										16	
	波佐見		1																													1	
	瀬戸		1												1																	2	
	京信楽系						2																									2	
	白岩系															3	1	3		1			1	1					1			11	
	不明		2																1		1											4	
19Ｃ中～20Ｃ前　明治	平清水？		1	1																												2	11
	大堀相馬？		1																													1	
	不明	1	6	1																												8	
20Ｃ前～20Ｃ中　大正～昭和	肥前系		2	6			1																									9	54
	瀬戸			1																												1	
	瀬戸系						1	1																								2	
	不明	25	10	1				1		1	1		1																2		42	
20Ｃ中～　戦後	不明	1	1	1						1				1															4	1	10	10
不明	肥前系					2																										2	48
	唐津系																			1												1	
	白岩系																	1	1		1											3	
	不明		3	4					1	1		3		5		4		1	8	3					1	6	1	1				42	
計		49	35	19	2	5	4	3	1	3	1	3	1	6	1	7	1	4	11	6	1	1	1	1	1	6	1	1	1	6	1	183	

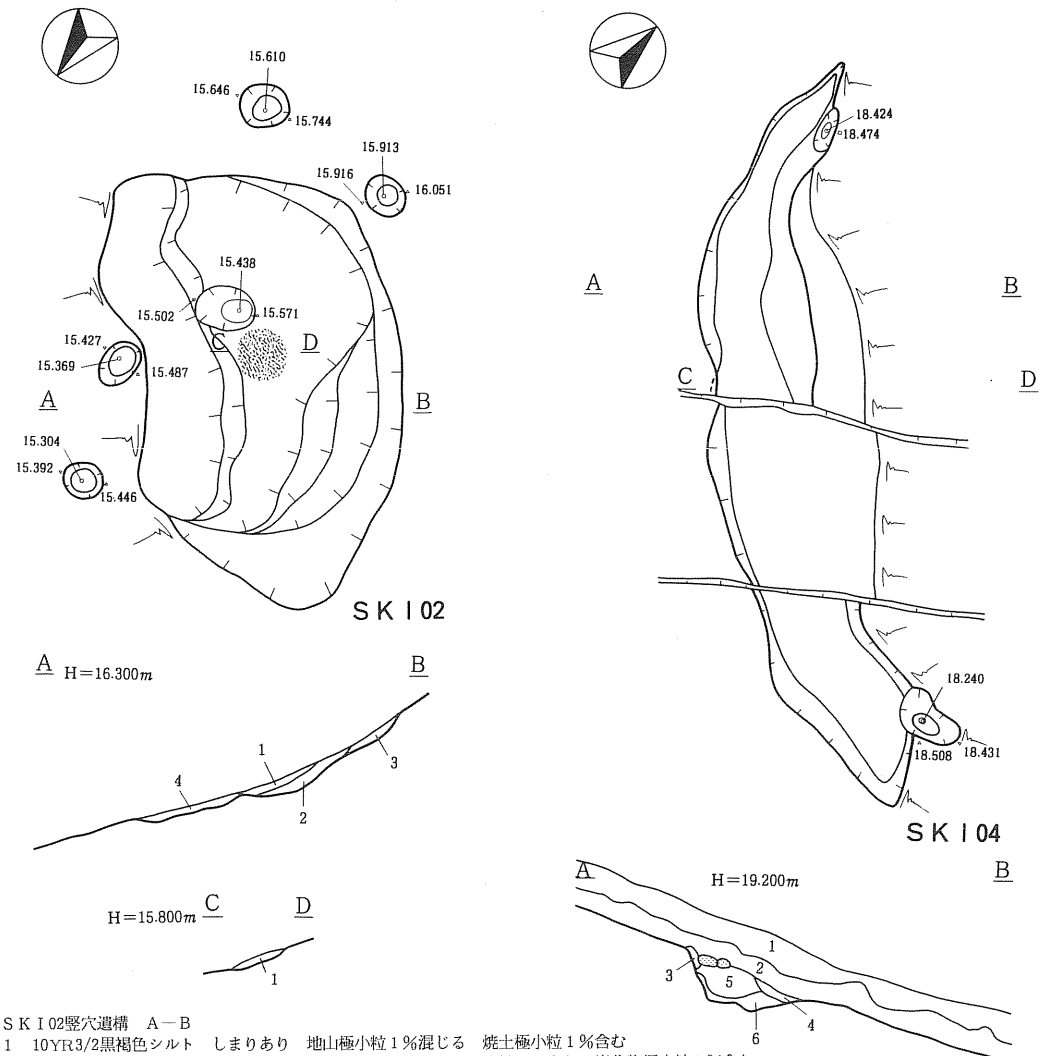
5　時期不明

時期不明の遺構は、竪穴遺構２棟、溝跡２条、土坑１基、焼土群１、ピット群１の計７遺構である。竪穴遺構２棟と溝跡１条及び土坑１基は調査区南側の斜面上部から斜面下部に並んだ配置で検出した。他の溝跡１条は調査区北東部の斜面中腹で検出した。

ＳＫＩ02竪穴遺構の炉の炭化物による^{14}Ｃ年代測定では奈良時代～平安時代前半の年代が出たが、測定値全体の信頼度が高いとは言えないので、この測定値も参考値にとどめ、時期決定の根拠としては用いない（第５章参照）(註)。焼土群とピット群は平安時代のＳＩ12竪穴住居跡と重複し、一部は平安時代の項で述べたように鎌倉時代以前の可能性がある。

(註)

^{14}Ｃ年代測定は４点の試料で行った。ＳＫ23土坑では平安時代の十和田ａ火山灰と共伴する炭化物の年代測定値が西暦530年±80年で従来の考古学的年代観とは300年以上のずれがあった。ＳＮ19カマド状遺構の炭化物では考古学的年代観より100年以上古い年代、ＳＩ21竪穴住居跡の炉跡炭化物では、従来の年代観より約500年新しい年代であった。このように本遺跡の^{14}Ｃ年代測定値は考古学的所見とは一致せず、測定値が十分に信頼できる年代であるとは言い切れない。この原因の一つには、^{14}Ｃ年代測定自体がもつ誤差が考えられる。この誤差はすでに補正の方法も示されている［奥村晃史「ユーザーが行う^{14}Ｃ年代の補正」『第四紀通信』Vol.2No.1 日本第四紀学会1995（平成７年）］。本報告書はとりあえず補正しない測定値を掲載するが、将来的にこれまで蓄積した^{14}Ｃ年代測定値を一率に補正することによってよ



ＳＫＩ02竪穴遺構　Ａ－Ｂ
1　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山極小粒１％混じる　焼土極小粒１％含む
2　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山土15%混じる　焼土小粒１％含む　炭化物極小粒１％含む
3　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山土25%混じる
4　10YR4/4褐色シルト　しまりなし　地山土25%混じる

ＳＫＩ02竪穴遺構　炉　Ｃ－Ｄ
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土20%混じる　炭化物中粒10%含む

ＳＫＩ04竪穴遺構　Ａ－Ｂ
1　10YR3/2黒褐色シルト　しまりなし　植物根が多く入り孔隙多い　基本層位Ｉ層（表土）
2　10YR3/2黒褐色シルト　ややしまりあり　基本層位Ⅱ層
3　10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト　しまりあり　粘性あり　黒褐色土20%混じる
4　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり
5　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山極小粒２％混じる
6　10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト　しまりあり　地山土30%混じる　黒褐色土10%混じる

ＳＫＩ04竪穴遺構　Ｃ－Ｄ
1　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり
2　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山極小粒１％混じる
3　10YR5/6黄褐色シルト　しまりあり　暗褐色土小粒10%含む
4　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山中粒10%混じる
5　10YR6/6明黄褐色粘土　きわめてしまりあり　地山

0　1 m

第23図　ＳＫＩ02・04竪穴遺構

り実年代に近い年代値を出すことができるであろう。また、検出してから写真撮影、実測が終了するまでの２～３日間に外気や雨にふれたり、乾燥を防いだり写真撮影のために散水したことによって、試料採取に至るまでの間に予想以上に現在の空気及び水による汚染を受けてしまったことも考えられる。

(1)　竪穴遺構

ＳＫＩ02竪穴遺構（第23図、図版６－２）

調査区南部の斜面下部、ＬＲ47・48グリッドで検出した。確認面はＩ層（表土）とⅡ層（黒褐色土）を除去したⅢ層（地山漸移層）上面である。

上端の平面形は長軸約２ｍ50㎝、短軸約１ｍ50㎝の不整楕円形である。長軸の方位はＮ-62°-Ｗである。斜面の地山を削り平坦部を作出するが、床面は水平ではなく斜面に沿って北西に傾斜している。掘り込みの深さは中央部で約10㎝である。斜面上部側の壁の立ち上がりはなだらかで、床と壁の境界は不明瞭である。斜面下部側の壁の立ち上がりは検出されず、地山面を削り出した床面から竪穴遺構より下部の斜面へ連続する。中央部の径約30㎝の範囲で厚さ４㎝程に炭化物が集中する部分があり、炉跡と考えられる。この炭化物の^{14}Ｃ年代測定値は西暦710～950年で、奈良時代～平安時代前半にあたる。

炉跡に隣接して１基、竪穴遺構の周囲に４基の柱穴様ピットを検出した。５基とも直径20㎝前後、深さ12～14㎝である。配置に規則性は認められない。

埋土は黒褐色シルトと暗褐色シルトからなる。竪穴遺構の廃棄後、地山土が多く混じる埋土３層、４層が壁の崩壊によって壁際や斜面の下部側に堆積した後、第Ⅱ層を母材とする埋土１層、埋土２層が自然流入したものと考えられる。床面中央部を覆う埋土２層中に含まれる炭化物は炉跡の炭化物が拡散して混入したものであろう。

遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ04竪穴遺構（第23図、図版６－３）

調査区南部の斜面上部、ＭＡ46・47、ＭＢ47グリッドで検出した。この地点では削平・流出により地山漸移層が失われⅣ層（地山）の直上をⅡ層（黒褐色土）が覆っている。確認面はＩ層（表土）とⅡ層を除去したⅣ層上面である。

上端の平面形は長軸約４ｍ、最大幅約90㎝の三日月形である。長軸の両端を結んだ線の方位はＮ-67°-Ｗである。斜面の地山を削り平坦部を作出しており、床面はほぼ水平である。掘り込みの深さは中央部の壁際で約25㎝である。斜面上部側の壁はほぼ垂直ないしやや開き気味に立ち上がる。斜面下部側の壁の立ち上がりは検出されず、地山面を削り出した床面から竪穴遺構より下部の斜面へ連続する。壁際は溝状にやや低くなるが、明瞭な壁溝とはなっていない。

南東端付近で深さ約19㎝の柱穴様ピットを１基検出した。炉跡はない。

埋土は黒褐色シルトと暗褐色シルトからなる。竪穴遺構の廃棄後、地山土が多く混じる埋土３

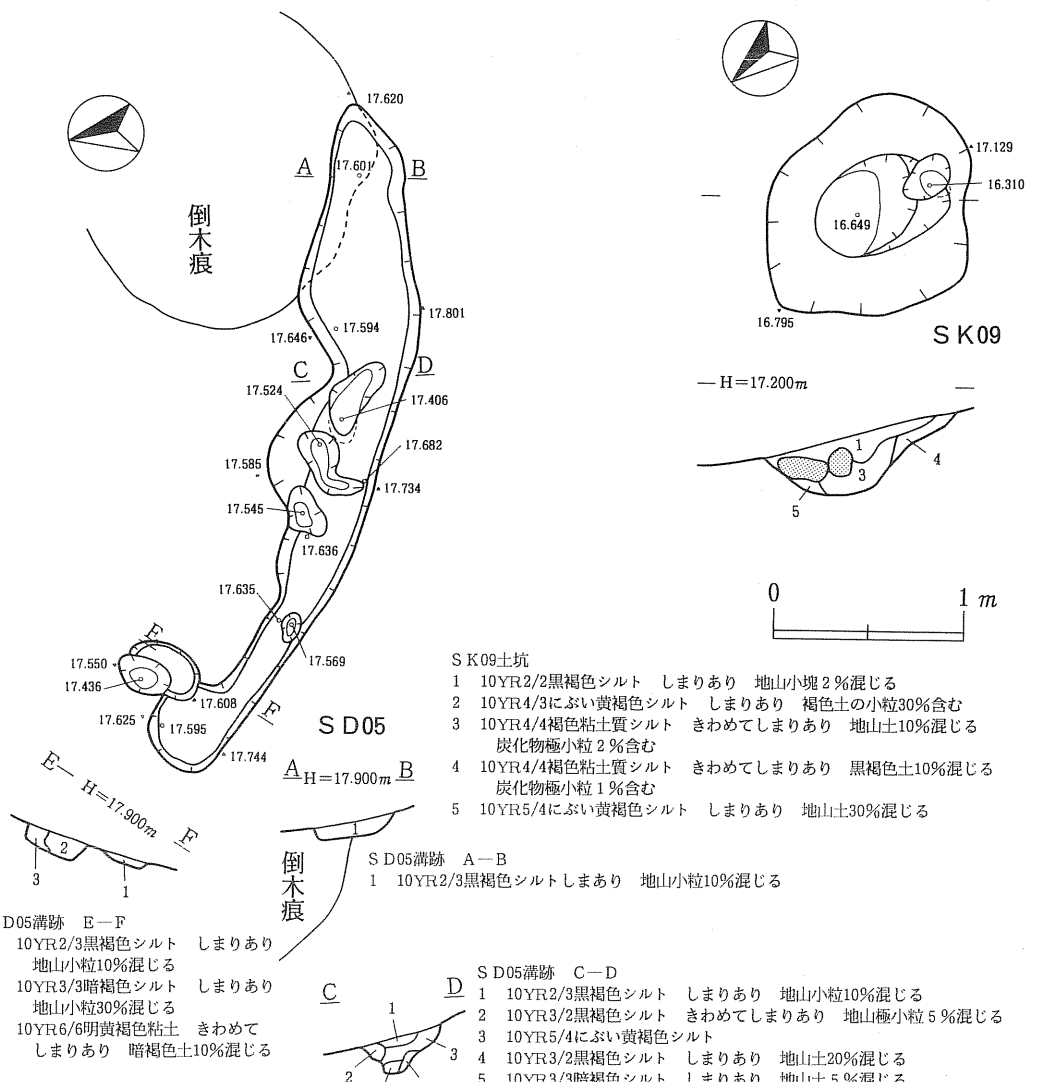
層、６層が壁の崩壊によって壁際に堆積した後、Ⅱ層を母材とする埋土１層、埋土２層、埋土５層等が自然流入したものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

(2)　溝跡

ＳＤ05溝跡（第24図、図版６－４）

調査区南部の斜面中腹、ＬＳ47、ＬＴ46・47グリッドで検出した。近世～現代の陶磁器が出土



第24図　ＳＤ05溝跡、ＳＫ09土坑

したＳＫ01土坑の北側に隣接する。確認面はⅠ層（表土）とⅡ層（黒褐色土）を除去したⅢ層（地山漸移層）上面である。

溝は斜面の等高線に沿う方向で弧状に湾曲し、長さは３ｍ80㎝である。上端の幅は東側が最も広く約60㎝、西側が最も狭く約20㎝であるが、西端部では約40㎝に広がる。深さは約４～８㎝である。溝の両端を結んだ線の方位はN-65°-W である。

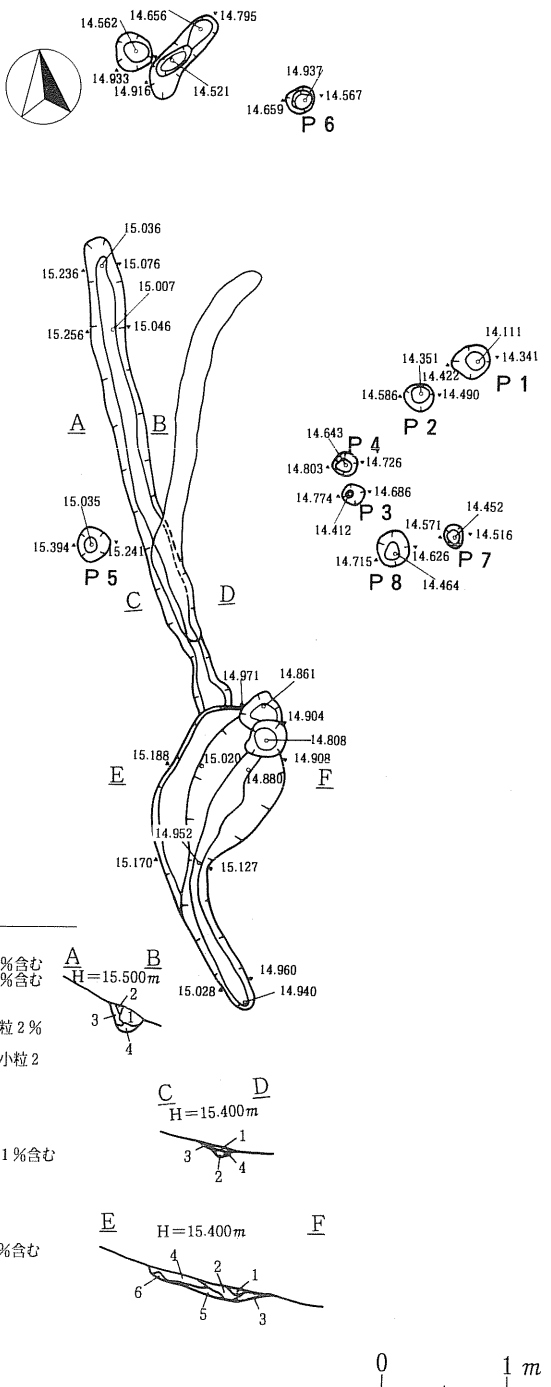
溝の底面はほぼ水平で、平坦である。壁はほぼ垂直ないしやや開き気味に立ち上がる。溝の中央部付近で３基、西端付近で１基、不整形の柱穴様ピットを検出した。

埋土の主体はⅡ層を母材とする黒褐色シルトである。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ18溝跡（第25図、図版６－５）

調査区北東部の斜面中腹、ＭＡ53・54グリッドで検出した。斜面下部には約３ｍ離



ＳＤ18溝跡周辺のピット
Ｐ１　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒２％混じる　炭化物小粒２％含む
Ｐ２　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒１％混じる　炭化物小粒２％含む
Ｐ３　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　炭化物極小粒１％含む
Ｐ４　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土10％混じる
Ｐ５　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山極小粒５％混じる　炭化物極小粒２％含む
Ｐ６　10YR3/3暗褐色粘土質シルト　しまりあり　地山小粒５％混じる　焼土極小粒２％含む　炭化物極小粒２％含む
Ｐ７　10YR2/3黒褐色粘土質シルト　ややしまりあり　地山中粒５％混じる
Ｐ８　10YR3/2黒褐色シルト　地山土20％混じる

ＳＤ18溝跡　Ａ－Ｂ
1　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山極小粒２％混じる　炭化物小粒　１％含む
2　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土20％　混じる
3　10YR4/4褐色粘土質シルト　粘性ややあり　地山土40％　混じる
4　10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性ややあり　地山土20％混じる

ＳＤ18溝跡　Ｃ－Ｄ
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒５％混じる　炭化物極小粒２％含む
2　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山土15％混じる
3　10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性ややあり　地山土30％混じる
4　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山土20％混じる

ＳＤ18溝跡　Ｅ－Ｆ
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山土20％混じる
2　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒５％混じる
3　10YR4/4褐色シルト　しまりあり　地山土30％混じる
4　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒１％混じる　焼土小粒２％含む　炭化物中粒２％含む
5　10YR3/2黒褐色粘土質シルト　しまりあり　粘性ややあり　地山大粒20％混じる
6　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山土15％混じる

第25図　ＳＤ18溝跡

れて鎌倉時代のＳＮ19カマド状遺構がある。確認面はⅠ層（表土）、Ⅱ層（黒褐色土）を除去したⅢ層（地山漸移層）上面である。

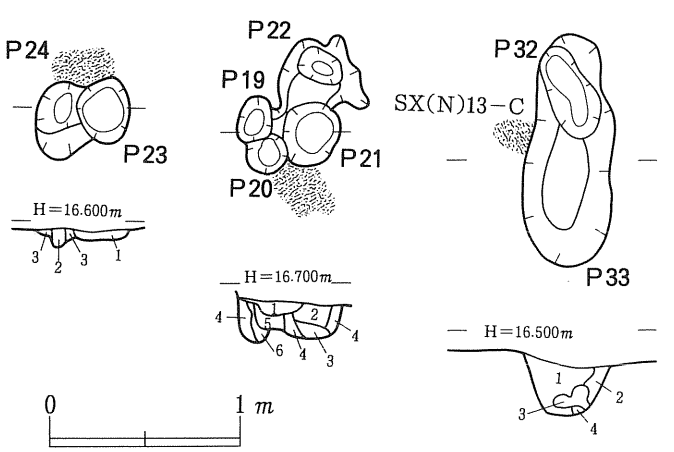
この遺構は南北に延びる直線部分と、その南側に接続する弧状部分とからなる。直線部分は、長さ３ｍ90㎝、上端の幅14～28㎝、方位はN-8°-W である。斜面上部側の上端から測った溝の深さは、北側で約25㎝、中央部で約16㎝、弧状部分に接続する南側では約７㎝としだいに低くなる。底面はほぼ平坦であるが水平ではない。北端が一番高く、中央部のレベルが最も低くなり、南側では逆にやや高くなる。壁は両側ともに開き気味に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。

弧状部分は等高線に沿って湾曲し、長さ３ｍ70㎝である。南側は上端の幅が22㎝であるが、北側は最大で88㎝と大きく広がり、この部分に直線部分が接続する。接続部では直線部分の底面より湾曲部分の底面のレベルが低いため、約11㎝の段差を生じている。斜面上部側の上端から測った溝の深さは、北側で約26㎝、中央部で約22㎝、南端付近では約９㎝としだいに浅くなる。底面はほぼ平坦であるが、レベルは中央の湾曲部がやや高く、両端がやや低い。

埋土は第Ⅱ層を母材とする黒褐色シルトで自然堆積である。直線部分と湾曲部分の接続部は、埋土の肉眼観察では区別がつかないが、一連の溝としては方向が不自然でもあり、重複関係があるのかどうかは不明である。

溝の周辺で13基の柱穴様ピットを検出した。配置に規則性は認められない。ピットの埋土も黒褐色シルト主体である。

溝跡、ピットともに遺物は出土しなかった。



ＳＸ(Ｐ)11ピット群　Ｐ32
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山中粒２％混じる　焼土中粒２％含む　炭化物大粒５％含む
2　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　地山土20％混じる　焼土中粒１％含む　炭化物小粒３％含む
3　10YR4/4にぶい黄褐色シルト　しまりあり　地山ブロックと黒褐色土（10％）の混土
4　10YR4/4にぶい黄褐色シルト　しまりあり　地山ブロックと黒褐色土(20％)の混土

ＳＸ(Ｐ)11ピット群　Ｐ24・Ｐ23
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり　炭化物極小粒１％含む
2　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　炭化物10％含む
3　10YR3/2黒褐色シルト　しまりあり　焼土中粒２％含む　炭化物小粒５％含む

ＳＸ（Ｐ）11ピット群　Ｐ19・Ｐ21・Ｐ22
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山小粒7％混じる　炭化物小粒1％含む　火山灰1％含む
2　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり　地山土10％混じる　焼土小粒1％含む　炭化物極小粒1％含む　火山灰1％含む
3　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり　地山土20％混じる
4　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　しまりあり　地山土40％混じる　地山と暗褐色土の混土
5　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山小粒30％混じる　焼土小粒2％含む　炭化物極小粒1％含む
6　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり　地山中粒15％混じる　炭化物大粒1％含む

第26図　SX(P)11ピット群のピット

(3)　土坑

ＳＫ09土坑（第24図）

調査区南部の斜面中腹、ＬＳ47グリッドで検出した。確認面はⅠ層（表土）、Ⅱ層（黒褐色土）を除去したⅢ層（地山漸移層）上面である。

上端の平面形は長軸１ｍ32㎝、短軸１ｍ８㎝の不整楕円形である。下端は、長軸46㎝、短軸32㎝の楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるく開いて立ち上がる。検出面からの深さは約30㎝である。

埋土は黒褐色シルトと褐色粘土質シルトからなり、自然堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。

(4)　ピット群

ＳＸ（Ｐ）11ピット群（第13・26図、図版５－１）

平安時代の項でものべたように、ＳＩ12竪穴住居跡周辺で検出した小ピット47基のうち壁際や壁溝内の９基を除いた38基を一括したものである。調査区中央部の斜面中腹のＬＴ49、ＭＡ48・49・50、ＭＢ49・50グリッドの範囲である。ピットの分布範囲は、ＳＩ12竪穴住居跡、ＳＸ（Ｎ）13焼土群の分布範囲と重なる。確認面はⅠ層（表土）・Ⅱ層（黒褐色土）及びＳＩ12竪穴住居跡埋土を除去した地山面である。

ピットの深さは30㎝以上－５基、20～29㎝－７基、10～19㎝－14基、１～９㎝－11基である。Ｐ11、14、32、37はＳＩ12竪穴住居跡の主柱穴となる可能性がある。

ＳＩ12竪穴住居跡の焼土をＳＸ（Ｐ）11ピット群のピット（Ｐ20・21・23・24・28・29）が切っており、これらのピットはＳＩ12竪穴住居跡より新しい。

遺物は出土しなかった。

(5)　焼土群

ＳＸ（Ｎ）13焼土群（第13・26図）

平安時代の項でものべたように、ＳＩ12竪穴住居跡周辺で検出した地山面の焼土11箇所のうち７箇所を除いた４箇所を一括したものである。調査区中央部の斜面中腹、ＭＡ49・50、ＭＢ49・50グリッドの範囲である。ピットの分布範囲は、ＳＩ12竪穴住居跡、ＳＸ（Ｎ）13焼土群の分布範囲と重なる。確認面はⅠ層（表土）・Ⅱ層（黒褐色土）及びＳＩ12竪穴住居跡埋土を除去した地山面である。

13-Ａ、13-ＢはＳＩ12竪穴住居跡のカマド跡の焼土となる可能性もある。13-Ｄは地山面から４～５㎝ほど周囲よりも高く焼土が形成されている。

13-ＣはＳＸ（Ｐ）11ピット群のピット（Ｐ33）と重複し、Ｐ33が新しい。また、13-ＤとＰ38が重複し、Ｐ38が新しい。

遺物は出土しなかった。

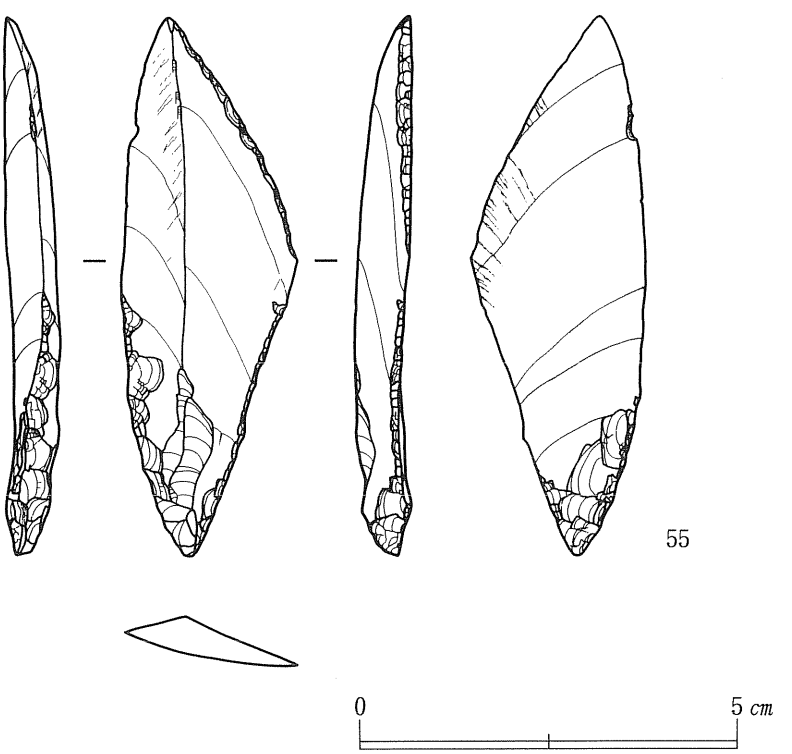
第３節　遺構外出土遺物

１　旧石器時代（第27図、図版12）

調査区中央部やや北側の埋没沢の沢頭付近、ＭＢ51グリッドでナイフ形石器が１点出土した。埋没沢の沢頭付近はＭＢ51グリッドでは断面Ｖ字形に地山土をえぐり、さらに西側に二又に別れて斜面の雨裂となる。この二又の合流点の深さ約40㎝の地点で、沢頭の埋土下部の褐色土中に倒立で突き刺さった如き状態で出土した。

第27図55は先端が鋭く尖り、中央部付近で幅が広く、全体に三角形に近い形態のナイフ形石器である。長さ7.2㎝、最大幅2.3㎝である。縦長の石刃を素材とし、打面側を基部とする。背面には素材と同じ方向から剥ぎ取られた先行剥離面が２面残り、先端部から基部近くまで直線的な稜線がはしる。石器長軸と素材剥片軸はほぼ一致する。石質は玉髄である。

細部加工は中央部の６㎜を除く右側縁と左側縁の基部に施されている。基部はまず腹面右側縁から３ないし４回の加撃によって腹面に残る打瘤を除き、その後に背面側を加工し、再び腹面の両側縁に細部加工を施している。細部加工角は左側縁基部側が75°、右側縁上部が65°、右側縁基部側が70°である。素材の腹面と背面右側の先行剥離面のなす角は先端側で15°、中央部の細部加



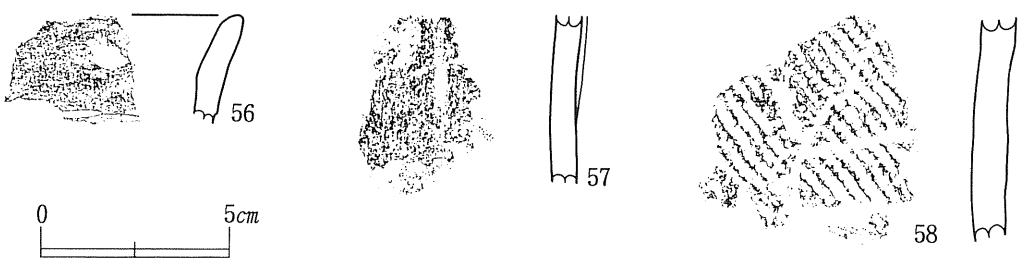
第27図　遺構外出土遺物(7)　旧石器

工のない部分で20°、基部側で25°、背面左側は、先端から基部側まで約35°である。右側縁先端側の細部加工は基部側で薄く、先端側でしだいに厚くなる。右側縁基部の加工は上部では薄く、基部側に向かってしだいに厚くなる。したがって素材形状の修正は基部及び右側縁先端側で大きい。

2　縄文時代（第28・29図、図版12）

ナイフ形石器が出土した埋没沢の沢頭付近の埋土下層から縄文土器の破片がまとまって出土した。第28図56は口縁部に下端を沈線で区切られた幅約2.5㎝の無文帯がある。口縁内面は約２㎝幅で肥厚する。57は粘土を盛り上げて隆起した無文帯が垂下する。無文帯の右側には縄文が施文されているのが看取される。58は胴部がやや膨らみ、口縁部が外反する器形の深鉢形土器の破片である。LR単節斜縄文が縦回転で施文されている。これら３点はいずれも縄文時代中期後葉の土器で、ＳＩ21住居跡の炉埋設土器に後続するものと考えられる。

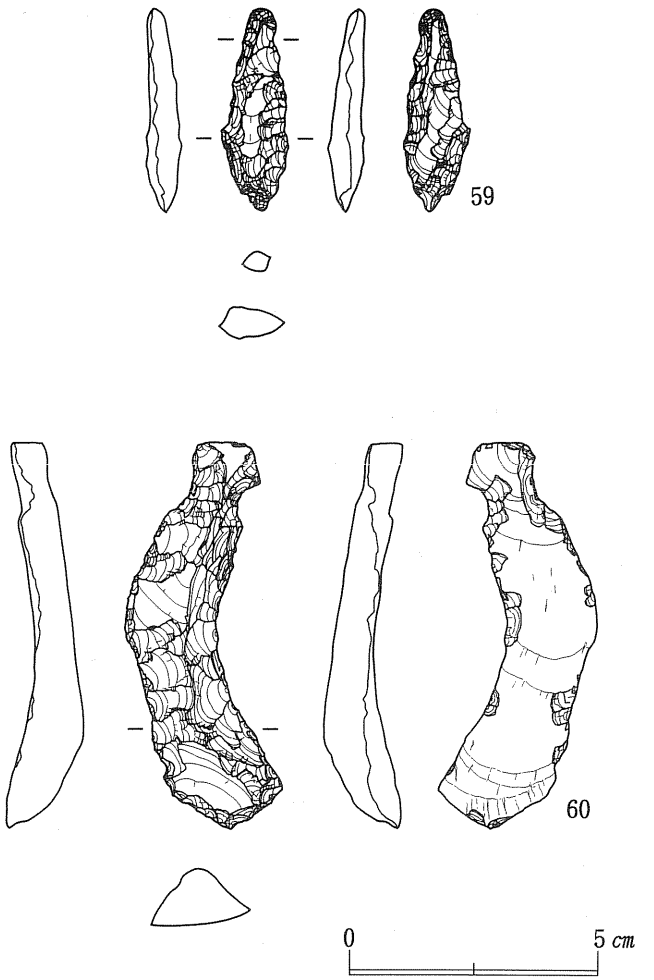
第29図59の石錐は、使用によって先端部が磨滅し剝離痕の稜線が丸く滑らかになっている。60の縦型石匙は、左側縁と先端部を刃部として使用している。先端部は刃角が大きく、掻器として使用したものであろう。左側縁は全体が刃部として使用されているが、特に中央部の2.5㎝は外に張る側縁の弧とは逆に浅い抉りが入ったような凹部となっており、使用した後に再び加工して刃部を再生していることがわかる。59、60ともに表土中から出土した。石質は頁岩である。



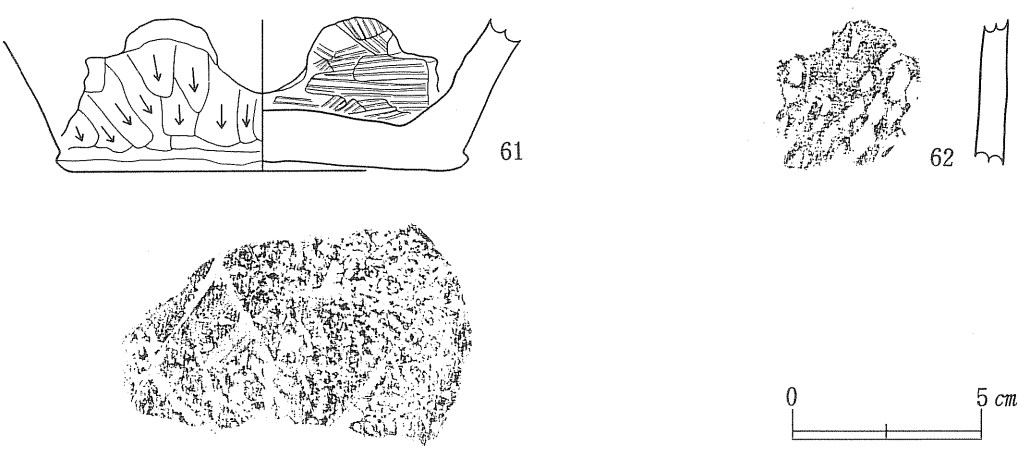
第28図　遺構外出土遺物(2)　縄文土器

3　平安時代（第30図、図版12）

第30図61は土師器甕の底部破片である。外面の調整はヘラケズリ、内面は胴下部が縦方向、底辺部は横方向、底部の内面は円を描くようにハケメ調整を施す。底面には木葉痕が付いている。残存部分では２枚の木の葉を先端を逆方向にして敷いている。おそらく中央に大きめの木の葉が１枚、その両脇に小さめの木の葉が先端を逆向きにして各１枚付着していたのであろう。外周のみが砂底である。木葉痕が砂粒痕を切っており、木葉痕の付いている部分でも大きめの砂粒痕による凹凸が見られることから、製作の際には全体に砂を敷き、底部となる粘土円盤に弾性のある



第29図　遺構外出土遺物(3)　縄文時代の石器



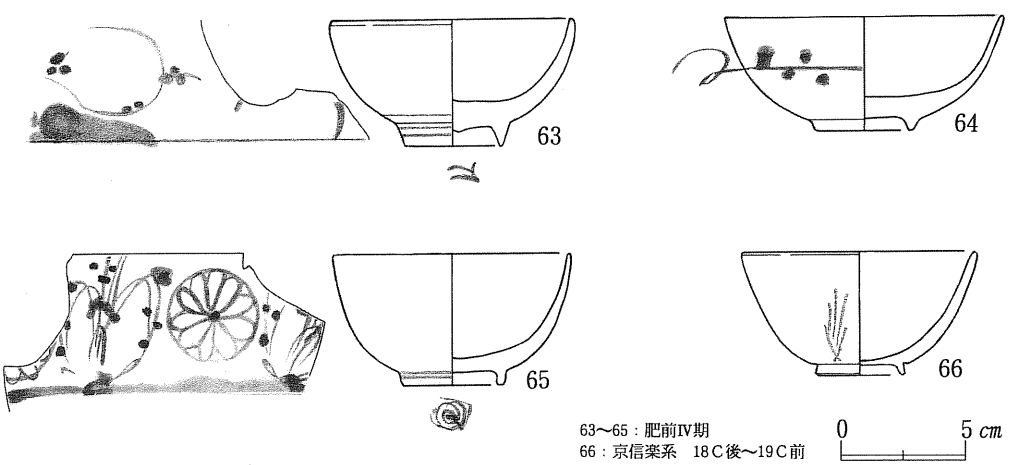
第30図　遺構外出土遺物(4)　土師器

木の葉を３枚貼り付け、それを砂敷の上に置いて、木の葉の範囲より一回り大きく底部を成形したと考えられる。62は格子目タタキ痕のある甕の破片である。第14図９のＳＫＩ15竪穴遺構埋土中から出土した破片と同一個体の可能性がある。

４　近世～現代（第31図、図版９・11・12・13）

Ｉ層（表土）及びⅡ層（黒褐色土）中から陶磁器が出土した（第３表）。ＳＫ01土坑出土の陶磁器と同時期のものが多く、ＳＫ01土坑に一括廃棄された際にこぼれたものやその後流出したものが主であると考えられる。

図版12の67は唐津Ⅲ期三島手の皿である。ＳＫ01土坑出土の徳利（第22図19）と同年代か。第31図63・64は肥前Ⅳ期の碗、図版12の68は墨弾き技法を用いた皿である。図版９の70は18世紀後半の唐津刷毛目徳利である。第31図65は18世紀後葉～19世紀前半頃の波佐見の碗、66は京信楽系の碗である。この時期の京信楽系碗はこの１点のみである。図版11の73・図版12の74は19世紀代の白岩系陶器である。この他、明治～戦後までの陶磁器が出土している。



第31図　遺構外出土遺物(5)　磁器

第３表　遺構外出土陶磁器一覧表

時期（）は肥前磁器の時期区分	産地	磁器 皿	磁器 碗	磁器 杯	磁器 徳利	陶器 皿	陶器 碗	陶器 徳利	陶器 鉢	陶器 擂鉢	陶器 片口鉢	陶器 甕	陶器 お歯黒壺	陶器 行平	陶器 ほうろく	陶器 焜炉	陶器 天神人形	陶器 土人形	陶器 不明	計	時期毎の計
17Ｃ末～18Ｃ後　（Ⅳ期）	肥前	5	3	1																9	14
	波佐見		1																	1	
	唐津					1		1		2										4	
18Ｃ後～19Ｃ中　（Ⅴ期）	肥前系			1	1															2	9
	京信楽系						1													1	
	白岩系					1					1	1	2	1						6	
不明	白岩系									1										1	27
	不明				1				1	4					1	10	3	3	3	26	
計		5	4	2	2	2	1	1	1	7	1	1	2	1	1	10	3	3	3	50	

第５章　自然科学的分析

第１節　テフラ屈折率測定

１　はじめに―屈折率測定試料と測定方法

測定の対象となった試料は、発掘調査担当者により５ＫＮ―ＳＫ23から採取された試料１である。屈折率の測定は、日本列島とその周辺のテフラ・カタログ（町田・新井1992）の作成に利用された位相差法（新井1972）による。

２　屈折率測定結果

屈折率測定結果を第４表に示す。試料の中には、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が少量含まれている。一方、白色の火山ガラスは多く含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は1.503―1.506、斜方輝石の屈折率（r）は1.706―1.708である。これらの値をもつテフラとしては、秋田県域に分布が確認されており、また今後検出される可能性のある示標テフラ（第５表）の中で、十和田ａ火山灰（To―a，町田ほか1981）に同定される可能性が最も大きいと考えられる。

参考文献

新井房夫(1972)「斜方輝石・角閃石によるテフラの同定―テフロクロノジーの基礎的研究」『第四紀研究』11　p.254―269

小岩直人・早田勉(1994)「東北地方中南部に分布する更新世末期のガラス質テフラ」『地学雑誌』103　p.68―76

町田洋・新井房夫・森脇広(1981)「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51　p.562―569

町田洋・新井房夫(1992)『火山灰アトラス』　東京大学出版会　p.276

第４表　古野遺跡５ＫＮ―ＳＫ23の屈折率測定結果

重鉱物	火山ガラス			屈折率
	量	色調	形態	
(opx, cpx, mt)	＋＋＋	白	pm	gl（n）：1.503-1.506 opx（r）：1.706-1.708

opx：斜方輝石、cpx：単斜輝石、mt：磁鉄鉱。＋＋＋＋：とくに多い、＋＋＋：多い、＋＋：中程度、＋：少ない、－：認められない。pm：軽石型。重厚物の（　）は量の少ないことを示す。

第5表　秋田県とその周辺地域の縄文時代以降の示標テフラ（町田・新井1992をもとに加筆）

テフラ（略称）	噴出年代	斑晶鉱物	火山ガラス		斜方輝石・角閃石	秋田での検出例
			形態	屈折率（n）	屈折率（γ，n_2）	
白頭山苫小牧テフラ（B－Tm）	0.8〜0.9	vitric；af，（cpx）	pm，bw	1.511—1.522 （1.515—1.520）	—	多　数
十和田a火山灰（To－a）	915AD	opx，cpx；ob	pm	1.496—1.504	γ：1.706—1.708 （1.707）	鹿角市大湯
十和田中掫テフラ（To－Cu）	5〜5.5	opx，cpx	pm＞bw	1.510—1.514 （1.511—1.513）	γ：1.704—1.708 （1.707）	（岩手県湯田町）
鬼界アカホヤ火山灰（K—Ah）	6.3	poor	bw	1.508—1.516	—	（山形県月山）
肘折尾花沢テフラ（Hj－O）	10	opx，ho；qt	pm	1.499—1.501	γ：1.712—1.714 n_2：1.668—1.671	山形県尾花沢市
秋田駒柳沢軽石（Ak－Y）	12〜13？	opx，cpx，（ol）	—	—	γ：1.718—1.723	（岩手県滝沢村）
秋田駒小岩井軽石（Ak－K）	13〜16？	opx，cpx，（ol）	—	—	γ：1.708—1.712	（岩手県滝沢村）
十和田八戸テフラ（To－HP）	12〜13	opx，cpx，ho	pm	1.502—1.509	γ：1.705—1.708 n_2：1.669—1.673	米代川流域
浅間—板鼻黄色軽石（As－YP）	13〜14	opx，cpx	pm	1.502—1.504	—	宮城県仙台市

噴出年代は、1,000年前。ol：カンラン石、opx：斜方輝石、ho：角閃石、af：アルカリ長石、qt：石英、bp：バブル型、pm：軽石型。

第2節　放射性炭素年代測定

古野遺跡の試料について年代測定を行った結果を第6表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数(B.P.)である。

年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付属した誤差は、β線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代である。また、試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してある。また、試料のβ線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が2σ以下のときは、Modernと表示し、δ^{14}C%を付記してある。

第6表　放射性炭素年代測定結果

試料No.	採取地点	種類	年代値	コードNo.
No. 1	S I 02	炭化物	1,120±120（A. D. 830）	Gak－18156
No. 2	S K23	炭化物	1,420± 80（A. D. 530）	Gak－18157
No. 3	S N19	炭化物	960± 80（A. D. 990）	Gak－18158
No. 4	S N21	炭化物	3,440± 90（1,490B. C.）	Gak－18159

（学習院大学理学部年代測定室）

第3節　炭化材の樹種同定

1　試料

試料は、No.1（5KN—SK23A)、No.2（5KN—SK23B)、No.3（5KN—SN21）の3点である。

2　方法

試料は、割折またはカミソリを用いて新鮮な基本的な3断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）をつくり、落射顕微鏡によって75～600倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生樹木の木材標本と対比して行った。

3　結果

第7表に結果を示し、同定の根拠等について記載した。各断面の顕微鏡写真を示す。

スギ　Cryptomeria japonica D.Don　スギ科（図版13）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

第7表　炭化材樹種同定結果

試料	樹種　（ 和名 ／ 学名 ）	
No. 1	スギ	Cryptomeria japonica D. Don
No. 2	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc
No. 3	不明散孔材	

横断面:早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。年輪の外半分には樹脂細胞が散在する。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で通常1分野に2個存在する。

接戦断面:放射組織は単列の同性放射組織型で、多くは10細胞高以下である。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州・四国・九州・屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、建築・家具・桶樽・土木・船・下駄・彫刻など広く用いられる。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科（図版13）

横断面:年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部で小道管は火炎状に配列する。

放射断面:道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はおおむね平伏細胞からなる。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道(西南部)・本州・四国・九州・に分布する。落葉高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐久性強く、水質に耐え、保存性はきわめて高い材で、現在では建築・家具・器具・土木・鉄道枕木・船・彫刻・ろくろ細工・薪炭・椎茸ほだ木など広汎に用いられる。

不明散孔材

横断面:小型の道管が散在する散孔材である。

以上の形質より散孔材に同定される。なお放射断面、接線断面共に試料そのものが小さく広範囲の観察が困難であった。

参考文献

島地謙・伊東隆夫(1982)『図説木材組織』 地球社

島地謙ほか(1985)『木材の構成』 文永堂出版

日本第四紀学会編(1993)『第四紀試料分析法』 東京大学出版会

第４節　植物珪酸体分析

１　試料と方法

試料は、５ＫＮ－ＳＮ19(カマド状遺構)から採取された焼土である。植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原1976)をもとに、次の手順で行った。

１）試料の絶乾(105℃・24時間)

２）試料約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μｍ、約0.02ｇ)

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

３）電気炉灰化法による脱有機物処理

４）超音波による分散(300W・42KHz・10分間)

５）沈底法による微粒子(20μｍ以下)除去、乾燥

６）封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ)をかけて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94(種実重は 1.03)、8.40、6.31、1.24 である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

２　分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第８表に示した。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など)、キビ族型、ウシクサ族型、クマザサ属型（おもにクマザサ属)、タケ亜科（未分類等)

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来)、未分類等

３　考察

５ＫＮ―ＳＮ19(カマド状遺構)から採取された焼土について植物珪酸体分析を行った。その結果、棒状珪酸体が約84,000個/ｇ、クマザサ属型が約24,000個/ｇ、ウシクサ族型が約19,000個/ｇと多量に検出された。また、イネも約8,000個/ｇと比較的多量に検出され、ウシクサ族(ススキ属など)やキビ族型も見られた。おもな分類群の推定生産量によると、クマザサ属型が圧倒的に卓越しており、イネがこれに次いで多くなっている。

以上の結果から、当時はクマザサ属（チシマザサ節やチマキザサ節など）を主体としてススキ属なども見られるイネ科植生であったものと考えられ、稲作も行われていたものと推定される。これらの植物がカマドの燃料として利用されていたことも考えられるが、比較試料(カマド周辺の土壌)との対比・検討が行われていないことから断定はできない。

第８表　古野遺跡の植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/ｇ）

分類群＼試料	SN19
イネ科	
イネ	83
ウシクサ族(ススキ属など)	14
キビ族型	21
ウシクサ族型	186
タケ亜科	
クマザサ属型	241
未分類等	103
その他のイネ科	
表皮毛起源	69
棒状珪酸体	841
未分類等	723
(海綿骨針)	83
植物珪酸体総数	2,280

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	0.35
ウシクサ族(ススキ属など)	0.17
クマザサ属型	1.81

※仮比重を1.0と仮定して算出。

クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、ススキ属は日当たりの悪い森林の林床では生育が困難である。このことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。また、常緑性であるクマザサ属は、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカの重要な食物となっている（高槻1992)。

参考文献

杉山真二(1987)「遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点」『植生史研究』 第２号 p.27―37

杉山真二(1987)「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号　p.70―83.

藤原宏志(1976)「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―」『考古学と自然科学』9　p.15―29.

藤原宏志(1979)「プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）―福岡・板付遺跡（夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ（0.sativa L.）生産総量の推定―」『考古学と自然科学』12　p.29―41

高槻成紀(1992)『北に生きるシカたち―シカ、ササそして雪をめぐる生態学―』 どうぶつ社

第6章　まとめ

1　遺構の帰属時期と変遷

発掘調査の結果、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡1棟、縄文時代(時期不明)の土坑1基、平安時代前半の竪穴住居跡2棟と土坑1基、鎌倉時代前半の建物跡1棟と竪穴遺構1棟、鎌倉時代のカマド状遺構1基、近世中期～現代の陶磁器を包含する現代の土坑1基、時期不明の竪穴遺構2基、溝跡2条、土坑1基、焼土群1、ピット群1の合計16遺構を検出した。

また、旧石器時代のナイフ形石器1点、縄文時代中期後葉の土器、石器（石匙、石錐、剥片)、平安時代前半の土師器（坏、甕、支脚)、須恵器（坏)、鎌倉時代前半の珠洲陶器の壺、近世～現代の陶磁器が、コンテナで合計13箱分出土した。

各遺構の帰属時期と変遷をまとめると次のようになる。

時　　期	年　代	遺　構　・　遺　物　等
旧石器時代		≪ナイフ形石器≫
縄文時代中期後葉		ＳＩ21竪穴住居跡・(ＳＫ14土坑)
平安時代前半	915年	ＳＩ10竪穴住居跡・ＳＩ12竪穴住居跡 ≪火山灰≫ ＳＫ23土坑
鎌倉時代	1,200年頃	ＳＢ22建物跡・ＳＫＩ15竪穴遺構・≪珠洲陶器≫ ≪ＳＢ22・ＳＫＩ15の埋め立て。焼土粒、炭化物粒を含み地山土が多量に混じる暗褐色土層≫ ＳＮ19カマド状遺構 (ＳＸ(Ｎ)13焼土群・ＳＸ(Ｐ)11ピット群)
江戸時代中頃 現代	1,650年以降 1,945年以降	≪近世・近代陶磁器≫ ＳＫ01土坑
帰属時期不明		ＳＫＩ02竪穴遺構、ＳＫＩ04竪穴遺構、ＳＤ05溝跡、ＳＤ18溝跡、ＳＫ09土坑

(　)は推定時期、≪　≫は遺物、土層など

2　ナイフ形石器について

本遺跡出土のナイフ形石器は、一応「柳葉形の石刃を素材とし刃潰し加工が基部周辺と先端部に施される杉久保型」[1] に近いといえる。「縦長剥片を素材として、刃潰し加工が一側辺と相対す

る基部に加えられ刃部が斜行する茂呂型」との違いは、刃潰し加工が右側縁中央部の6㎜だけ施されていないこと、石器長軸と素材の剥片軸がほぼ一致し、刃部が斜行しないことである。しかし、右側縁の細部加工は、先端側と基部側の間隔が僅か6㎜しかないこと、長さの割には幅の広い三角形に近い形態であること、といった典型的な杉久保型とは異なる特徴もある。素材形状の修正の度合いと二次加工の部位による杉久保型、茂呂型の区分は漸移的なものとなるであろうことが鴨子台遺跡の報告書で指摘されており(2)、本遺跡例によってもそれは支持されよう。

県内出土のナイフ形石器で形態の似るものには、御所野台地の下堤G遺跡出土のナイフ形石器[7]がある(3)。しかし基部の細部加工が表面右側縁のみであることが異なる。また、鴨子台遺跡では基部の両側縁と裏面、一方の側縁先端部側に長い細部加工を施すという点で本遺跡例と類似する石器が1点[554＋556]ある。これと類似する特徴をもつ石器は岩手県和賀仙人遺跡(4)、山形県横道遺跡(5)等でも出土している。しかし、細部加工の部位とともに形態までも同一のものはない。

本遺跡ではナイフ形石器1点のみの出土で、石器群としての対比や素材の剥片剥離技術については比較検討できない。編年的位置付け等は本遺跡例と同様のナイフ形石器を含む石器群の類例によってより詳細に考察されるべきで、現時点では資料の提示にとどまらざるを得ない。

3　縄文時代中期後葉前半の集落について

第2章第2節でふれたように、御所野台地では中期後葉の竪穴住居跡が238棟検出されている。これらの竪穴住居跡の炉埋設土器と比較すると、本遺跡の炉埋設土器は、湯ノ沢D遺跡8号住居跡4期炉埋設土器(6)、台A遺跡4号（A）住居跡床面出土土器(7)等に後続し、台A遺跡3号住居跡新旧炉埋設土器及び床面出土土器、坂ノ上E遺跡28号住居跡炉埋設土器(8)等とほぼ同じ段階の土器と考えられる(9)（第32図）。この段階は大木9式並行期から大木10式並行期の過渡期に当たる。胴中央部ないし下部に巡らした沈線で区分した上部には縄文の充填された入り組み横S字形区画文等を描き、下部は全面縄文施文する定型的な文様構成の土器が成立する直前段階である。区画文や沈線文の描かれた精製土器が炉埋設土器に使用された例で見る限り、この段階の集落例は2例あり、台A遺跡で2棟、坂ノ上E遺跡で2棟の竪穴住居跡が検出されている。

七曲台等の例も含めて、精製土器を炉埋設土器とする竪穴住居跡の棟数の変遷を見ると（第9表）、湯ノ沢D遺跡2棟→湯ノ沢D遺跡2棟、坂ノ上F遺跡2棟(10)、坂ノ上E遺跡1棟、地蔵田A遺跡2棟(11)、石坂台Ⅰ遺跡1棟(12)、石坂台Ⅸ遺跡1棟(13)、駒坂袋Ⅰ遺跡1棟(14)→湯ノ沢D遺跡1棟、台A遺跡2棟、石坂台Ⅰ遺跡1棟→坂ノ上E遺跡2棟、台A遺跡2棟、松木台Ⅲ遺跡1棟(13)、古野遺跡1棟となる。石坂台Ⅸ遺跡、石坂台Ⅰ遺跡、駒坂袋Ⅰ遺跡、松木台Ⅲ遺跡では粗製土器を炉に使用した竪穴住居跡が同時にもう1棟存在した可能性が高く、同時期に存在した竪穴住居はこの数より増える場合もあるが、1つの集落が1～3棟程度の竪穴住居で構成されることが共通

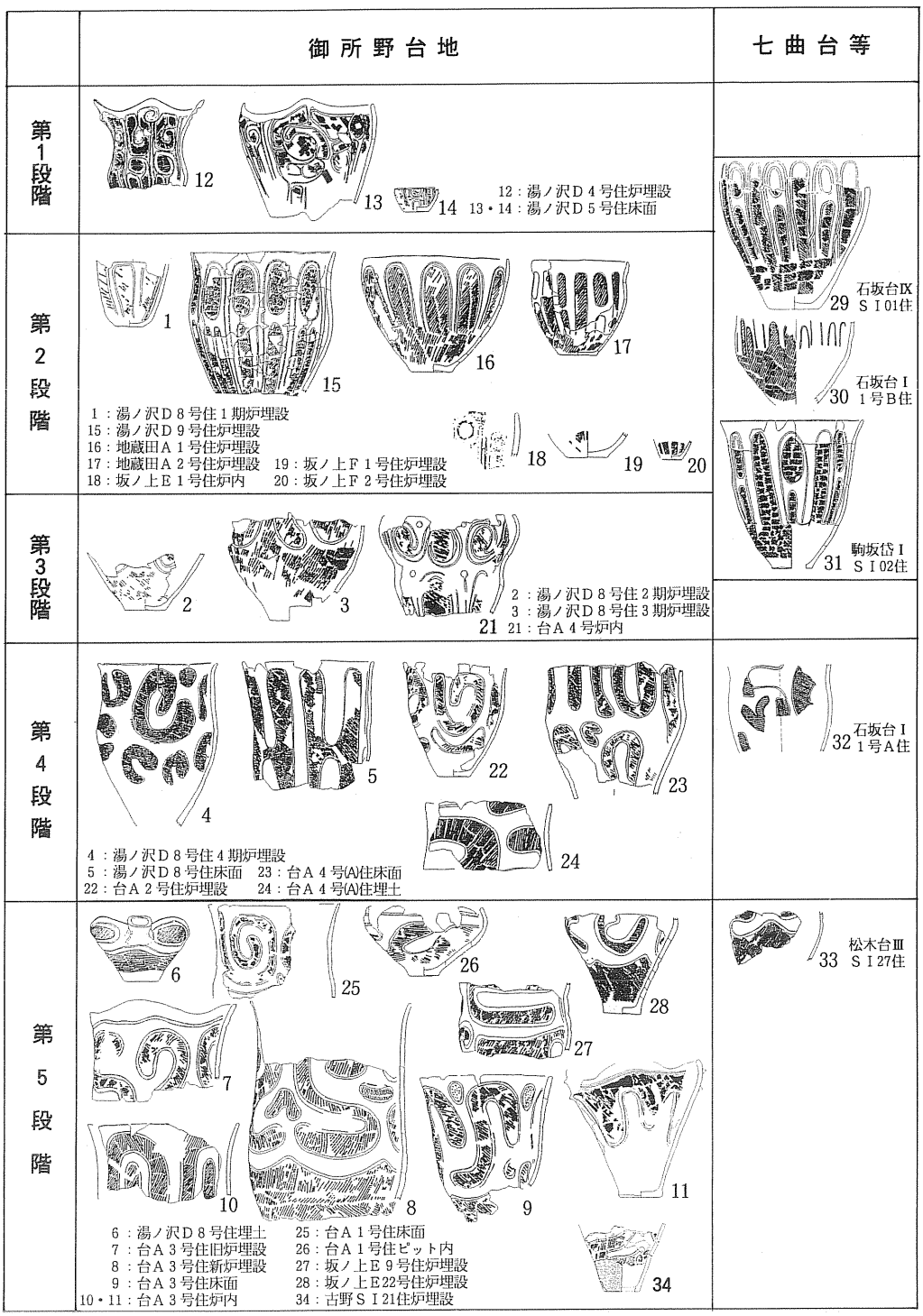
する。中期後葉前半はこのような集落が御所野台地で1～4箇所、七曲台で1～2箇所点在して推移したと考えられる（第33図）。

さて、御所野台地は、西側から入る3筋の大きな沢によって大きく分割されるが、それらの沢の沢頭で、台地のほぼ中央部に湯ノ沢D遺跡が立地する。台A遺跡の位置は御所野台地北東辺にあり、湯ノ沢D遺跡を中心に見た場合、坂ノ上E遺跡、坂ノ上F遺跡、地蔵田A遺跡とともに遺跡の分布が台地の中央部から周辺部に拡散して行くかのような様相を呈する。この動きの中で見るとき、台A遺跡とは猿田川を挟んだ対岸にある古野遺跡は、御所野台地の北東部における湯ノ沢D遺跡→台A遺跡の動きを受けた次の段階における台A遺跡→古野遺跡という拡散の結果として営まれたと解釈し得るのではなかろうか。そして、少なくとも中期後葉前半の御所野台地周辺では、1集落を構成する竪穴住居数は1～3棟を維持したまま、台地周縁部の新たな地点に居住を開始することで集落数が増加する時期であるということができるのではないか。この動きが何に起因するのかは、従来から竪穴住居跡数が飛躍的に増加する印象がもたれている中期後葉後半における動向を解明した後に総合的に判断されるべきで、今後の課題である。

4　平安時代の集落について

本遺跡で検出された2棟の竪穴住居跡は、選地・出土遺物・構造・構築方位の類似からほぼ同時期に存在したと考えられる。出土遺物の時期は、住居跡出土遺物は土師器のみで、須恵器は斜面下方で出土した坏の破片1点のみであること、坏の底面が回転糸切りで、底辺部が無調整であること、第14図7のように口縁部が大きく外反する小型の坏も含まれていることから、9世紀後葉より前には溯らないとみられる。また、ＳＩ12竪穴住居跡は、西暦915年の降灰とされる十和田ａ火山灰の入るＳＫ23土坑に切られることから、下限は10世紀前葉である。したがって、およそ西暦900年を中心とする時期とすることができよう。

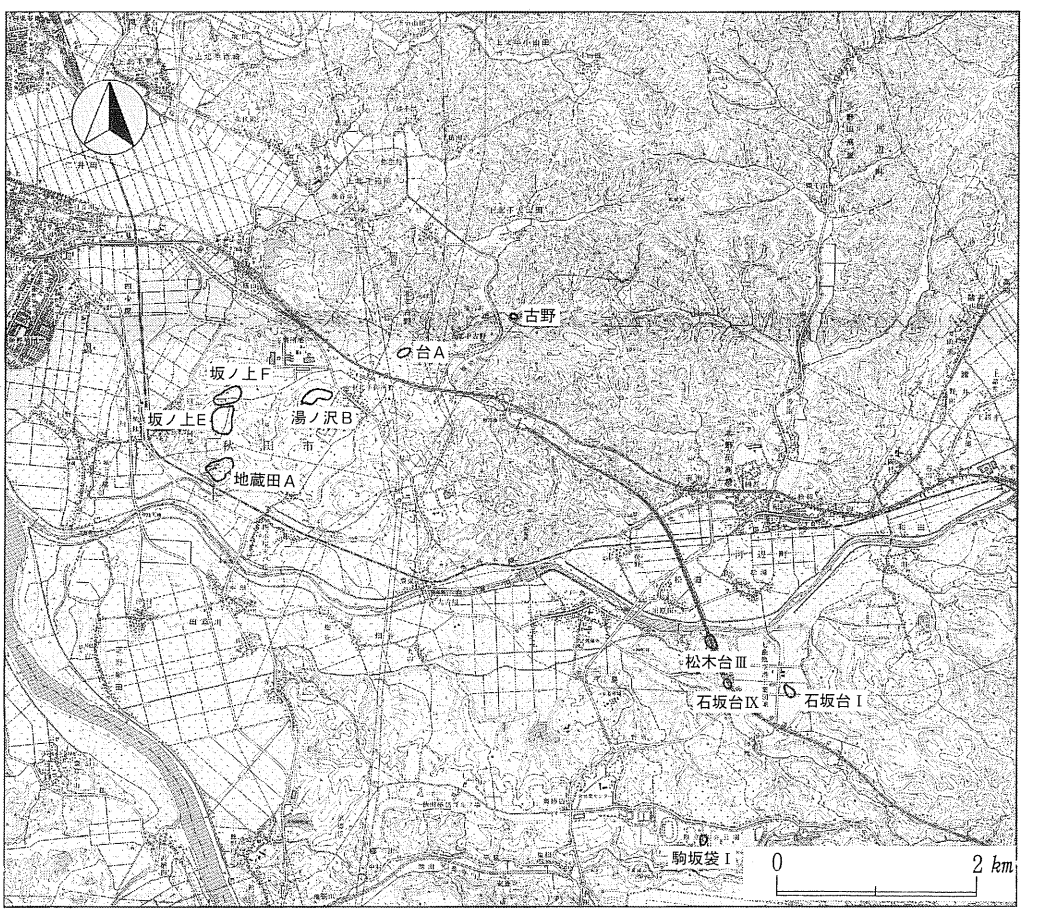
第2章でもふれたように、御所野台地周辺では、31棟の竪穴住居跡が検出され、大規模もしくは長期にわたって継続した中心集落としての下堤Ｃ遺跡[15]と、自然地形によって区別される各地点に、5棟以下の竪穴住居がひとつのまとまりとして営まれる小集落[16]の並存が9～10世紀ころの姿であったと推測し得る。古野遺跡も下堤Ｃ遺跡を取り巻く小集落の一つと位置付けられようか。しかし、土師器の編年が確立されていないこともあり、集落変遷の詳細な動向は未解明である。



第32図　御所野台地周辺の縄文中期後葉前半の土器（本文註(9)文献をもとに作成）

第9表　精製土器による各段階の住居跡数

地区	御所野台地						七曲台			
遺跡／段階	湯ノ沢D	坂ノ上E	坂ノ上F	地蔵田A	台A	古野	石坂台Ⅰ	石坂台Ⅸ	松木台Ⅲ	駒坂袋Ⅰ
第1段階	2									
第2段階	2	1	2	2			1	1		
第3段階	1									
第4段階	1				2		1			
第5段階		2			2	1			1	1



第33図　御所野台地とその周辺の縄文中期後葉前半の集落分布図

5　鎌倉時代の遺構について

ＳＢ22建物跡は斜面を削って平場を作り出し、斜面上部側に溝を巡らすという特徴がある。建物跡に溝が伴う例は、下田遺跡[17]（9世紀後葉～10世紀初頭頃）、中田面遺跡[18]（13世紀中葉頃）、

鈴木家住宅[19]（17世紀中葉頃）等の例がある。また、秋田市下タ野遺跡[20]では13世紀頃の集落が発掘調査されているが、溝で囲まれる建物跡はない。溝は必ずしも時期的な特徴を示すものではなく、立地や機能にかかわる施設であるといえる。

また、ＳＫＩ15竪穴遺構は、形態が方形で出入口と考えられる張り出しがあり、屋内に炉やカマドをもたないが、明瞭な配置の柱穴がないという点で、これまで中世城館遺跡等で検出されている竪穴建物跡と称されている遺構とは異なる[21]。この２棟が同時に存在したと考えられるので、本遺跡の遺構群は、構造の異なる施設各１棟の組み合わせから成る１軒の「家」と見ることができるのではないか。構造の差異は機能の違いに由来するものであろうから、ＳＢ22建物跡とＳＫＩ15竪穴遺構は、１軒の「家」に付随し課せられる又は期待される機能を相互に補完し合う施設であったと考えられる。下タ野遺跡の多数の建物跡の分析では、建物には母屋と倉庫風の建物があることが指摘されている。ここにおいても、機能を相互に補完し合う複数種類の施設の集合体としての「家」が予想される。河口に近い沖積平野の微高地に立地し、建物が多数あって「家」の集まる集落であった下タ野遺跡に対し、山間部の狭い斜面に立地し、建物と竪穴から成る最小単位の「家」が単独で営まれていた古野遺跡は、対極的な在り方である。中世の居住形態は未解明な部分の多い分野であるが、古野遺跡の在り方が一つの範型となり得る可能性がある。

下タ野遺跡では建物とともに多数の井戸が検出されたが、古野遺跡では井戸はなかった。居住の必要条件である水は北東側の沢から得たのであろう。カマドや炉のような火気施設は検出されなかったが、これは下タ野遺跡でも同様である。

これに関連して、ＳＢ22建物跡とＳＫＩ15竪穴遺構から成る「家」が人為的に廃棄された後、それほど間隔を置かずに構築されたＳＮ19カマド状遺構がある。このカマド状遺構は、県内では神岡町岳下遺跡[22]、大館市餌釣遺跡[23]、鹿角市妻ノ神遺跡[24]等で検出されている。青森県では境関館遺跡[25]で129基検出され、三浦圭介氏によって詳しく分析されている。三浦氏はこの種の遺構を「中世型カマド」とし、「古代型カマド」を基調として平安時代終末期から鎌倉時代初期に発生し、近世まで存続したもので、住居構造の大きな変化に伴って必然的に生じた厨房施設である、とする。この見解が現時点におけるこの種の遺構についての研究の到達点と思われる。本遺跡では、珠洲陶器の年代観から、西暦1,200年頃かそれ以降のそう遅くない時期と推定した。三浦氏の見解に従えばこの種の遺構が発生した頃からやや下る時期に当たる。ＳＢ22建物跡とＳＫＩ15竪穴遺構から成る「家」には伴わず、その埋め立て後に初めて構築されており、カマド状遺構の発生と生活への取捨選択過程の一端が伺われる。

6　近世以降の陶磁器について

17世紀中頃以降、戦後に一括廃棄されるまでのおよそ250年間に集積された陶磁器で、詳細に検

討すれば、この間の陶磁器の消費や流通の動向が解明され得る[26]一括資料である。18世紀代は肥前のくらわんかタイプの碗・皿が主である。太平洋側の例では瀬戸美濃系が比較的入ってくるが、古野遺跡では入っていない。18世紀後葉から19世紀中頃になると、肥前もしくは肥前系の磁器と白岩および寺内等の在地陶器の構成となり、器種も増える。ただし、大堀相馬、切込、堤など陸奥側の製品は混じらないことに特徴がある。このような組成は津軽(野脇遺跡)[27]、湯田（白木野Ⅱ遺跡)[28] と共通する。この時期に在地窯が増加し在地生産が大きく発展することは従来から指摘されている[29]。日本海側では海運を利用した肥前系磁器の流入と、大型で重量のある陶器は近距離にある在地窯から陸送という流通が想定され、古野遺跡の出土遺物もそれを裏付ける組成であると言えよう。近代以降の陶磁器は、在地の生産地が多様化するにもかかわらず、窯跡の考古学的研究はほとんど行われておらず、生産地の特定が困難である。本遺跡出土資料も生産地と年代の判明したものはほんの一部である。今回は資料を提示したのみにとどまってしまった。この資料を活用した今後の研究の進展に期待したい。

古野遺跡は、御所野台地と和田丘陵に挟まれた狭い谷筋の、山裾にある小さな丘の斜面にある。発掘調査によって、今からおよそ4,500年前の縄文時代中期、およそ1,100年前の平安時代前半、およそ800年前の鎌倉時代前半に人々の居住地として利用されていたことがわかった。また、旧石器時代の石器、縄文時代から現代までの土器、石器、陶磁器も出土した。

縄文時代中期後葉には、御所野台地周辺の各地に小規模な集落が増加することが発掘調査の結果から解明されつつあるが、古野遺跡の竪穴住居跡もこの動向を反映したものと考え得る。平安時代の竪穴住居跡２棟からなる小集落、鎌倉時代の掘立柱建物跡と竪穴遺構が一体となった１軒の家ともいえる遺構群は、下堤Ｃ遺跡や下タ野遺跡のような大集落とは対照的なありかたで、古代、中世の居住形態の多様性を示す事例といえる。また、出土した陶磁器の一括資料からは18世紀、19世紀における陶磁器の機種と産地の構成を復元することができ、陶磁器流通の実態と変遷をわずかながら知ることができた。

以上、古野遺跡の発掘調査によって、各時代にわたる多くの貴重な資料を得ることができた。

（註）

(1) 岡村道雄 『日本旧石器時代史』 考古学選書33　雄山閣出版　1990(平成２年)

(2) 秋田県教育委員会 『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―鴨子台遺跡・八幡台遺跡―』 秋田県文化財調査報告書第230集　1992(平成４年)

(3) 秋田市教育委員会 『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』(下堤Ｇ遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡)　1983(昭和58年)

(4) 和賀町教育委員会　『和賀仙人遺跡発掘調査報告書』　和賀町文化財報告書第11集　1984(昭和59年)

(5) 加藤稔・佐藤禎宏　「山形県横道遺跡略報」『石器時代』6　1963(昭和38年)

(6) 秋田市教育委員会　『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』(下堤Ｅ遺跡、下堤Ｆ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡、狸崎Ａ遺跡、湯ノ沢Ｄ遺跡、深田沢遺跡)　1985(昭和60年)

(7) 秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』(地蔵田Ｂ遺跡、台Ａ遺跡、湯ノ沢Ｉ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡)　1986(昭和61年)

(8) 秋田市教育委員会　『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』(坂ノ上Ｅ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、湯ノ沢Ｃ遺跡、湯ノ沢Ｅ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｈ遺跡、野形遺跡)1984 (昭和59年)

(9) この項における土器の変遷は、谷地薫「御所野台地遺跡群の縄文中期後葉土器ノート(1)」『秋田考古学』第44号　秋田考古学協会　1994(平成６年)に拠っている。

(10) (6) に同じ。

(11) 秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　(地蔵田Ａ遺跡)　1994(平成６年)

(12) 秋田県教育委員会　『七曲台遺跡群』　秋田県文化財調査報告書第125集　1985(昭和60年)

(13) 秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ―石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅵ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡・石坂台Ⅷ遺跡・石坂台Ⅸ遺跡・松木台Ⅲ遺跡―』　秋田県文化財調査報告書　第150集　1986(昭和61年)

(14) 秋田県教育委員会　『秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第92集　1982(昭和57年)

(15) 秋田市教育委員会　『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』(下堤Ｃ遺跡)　1987(昭和62年)

(16) 下堤Ａ遺跡４棟、下堤Ｂ遺跡３棟、下堤Ｄ遺跡３棟、野形遺跡３棟、坂ノ上Ｆ遺跡２棟、深田沢遺跡６棟、地蔵田Ａ遺跡５棟、湯ノ沢Ｂ遺跡１棟、秋大農場南遺跡１棟、大杉沢遺跡１棟の10遺跡から合計29軒の竪穴住居跡が検出されている。文献は、第２章第２節の参考文献５、９～12、16～19による。

(17) 秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ―下田遺跡・下田谷地遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第189集　1990(平成２年)

(18) 秋田県教育委員会　『中田面・重兵衛台Ⅰ・Ⅱ・根洗場遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第74集　1980(昭和55年)

(19) 重要文化財鈴木家住宅修理委員会　『重要文化財鈴木家住宅修理工事報告書』　1982(昭和57年)

(20) 秋田市都市開発部・秋田市教育委員会　『下タ野遺跡発掘調査報告書』　1979(昭和54年)

(21) 浪岡町教育委員会　『昭和58年度浪岡城発掘調査報告書「浪岡城跡Ⅶ」』　1985(昭和60年)

(22) 1984(昭和59)年発掘調査。調査を担当した小林克氏によって1995(平成７年)３月刊行予定の『秋田県埋

蔵文化財センター研究紀要』第10号に報告が掲載される予定。

(23) 秋田県教育委員会　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—餌釣遺跡—』　秋田県文化財調査報告書第210集　1991(平成3年)

(24) 秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ』　秋田県文化財調査報告書第107集　1984(昭和59年)

(25) 青森県教育委員会　『境関館遺跡発掘調査報告書—中小河川平川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』　青森県埋蔵文化財調査報告書第102集　1987(昭和62年)

(26) 羽柴直人　「東北地方北部における近世陶磁器の様相—1690～1780年代の消費状況の集成—」『紀要XⅣ(平成5年度)』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994(平成6年)

(27) 青森県教育委員会　『野脇遺跡—1級河川岩木川水系支川後長根川改修工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—』　青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第149集　1993(平成5年)

(28) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　『白木野Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書—東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査—』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第200集　1994(平成6年)

(29) 佐久間光平・本田泰貴　「東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題」『東北大学埋蔵文化財調査年報3』　東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990(平成2年)

図版1

1　検出した遺構群（北東から）

2　遺跡遠景（北から）

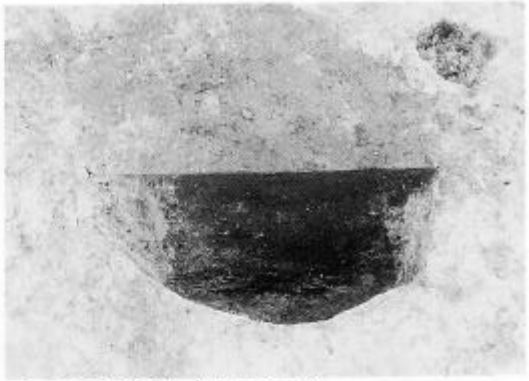
3　調査区全景（北から）

4　調査前の状況（南西から）

5　調査後の状況（南西から）

図版2

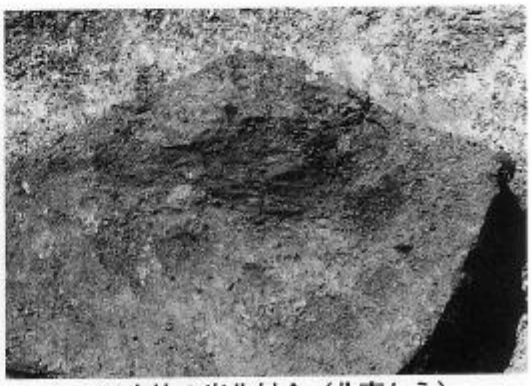
1　ＳＩ 21竪穴住居跡の複式炉（北東から）



2　ＳＫ14土坑（北東から）

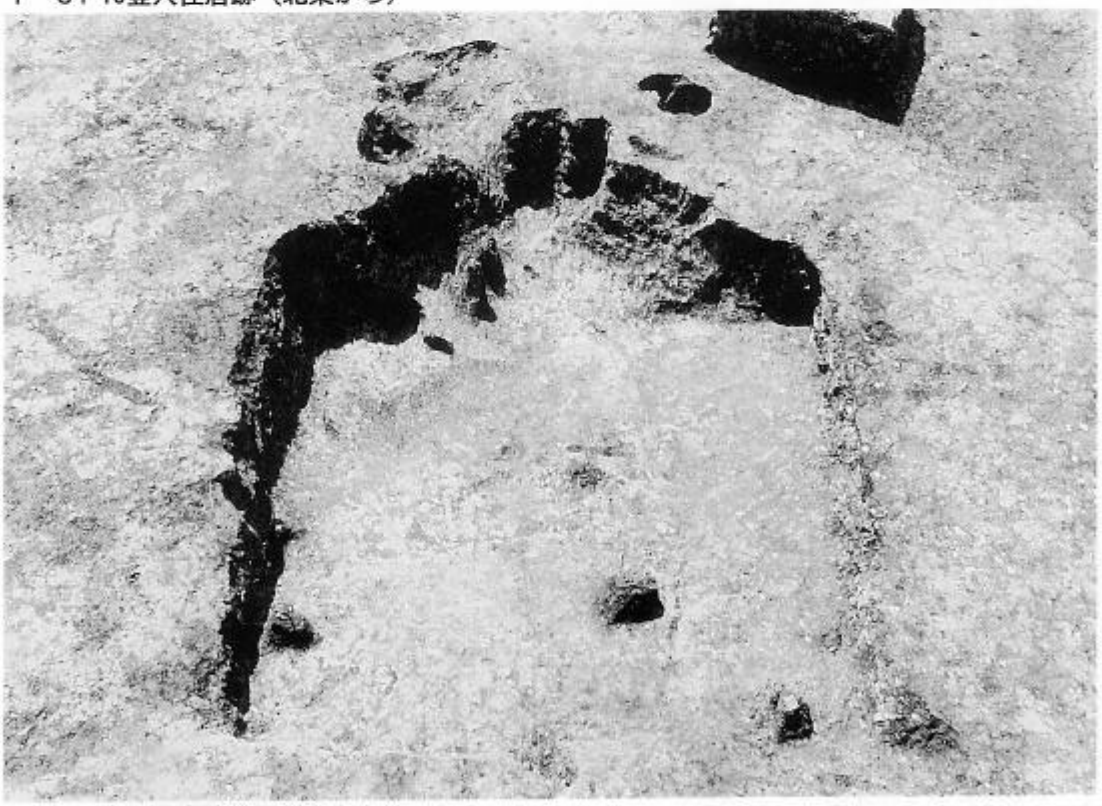
3　ＳＩ 12竪穴住居跡、ＳＫ23土坑（北東から）

4　ＳＫ23土坑の炭化材（北東から）



5　ＳＫ23土坑の炭化材Ａ（北東から）

1　SI 10竪穴住居跡（北東から）



2　SKI 15竪穴遺構（北東から）

図版4

1　ＳＢ22建物跡（北東から）

2　ＳＢ22建物跡（北西から）

3　ＳＢ22建物跡の北側の土層（北西から）

4　ＳＮ19カマド状遺構（北東から）

5　ＳＮ19カマド状遺構（北西から）

1　ＳＸ(P)11ピット群（北から）

2　ＳＸ(P)11ピット群、ＳＩ 12竪穴住居跡（北東から）

図版6

1　ＳＫ01土坑断面土層（西から）

2　ＳＫＩ 02竪穴遺構（北東から）

3　ＳＫＩ 04竪穴遺構（北東から）

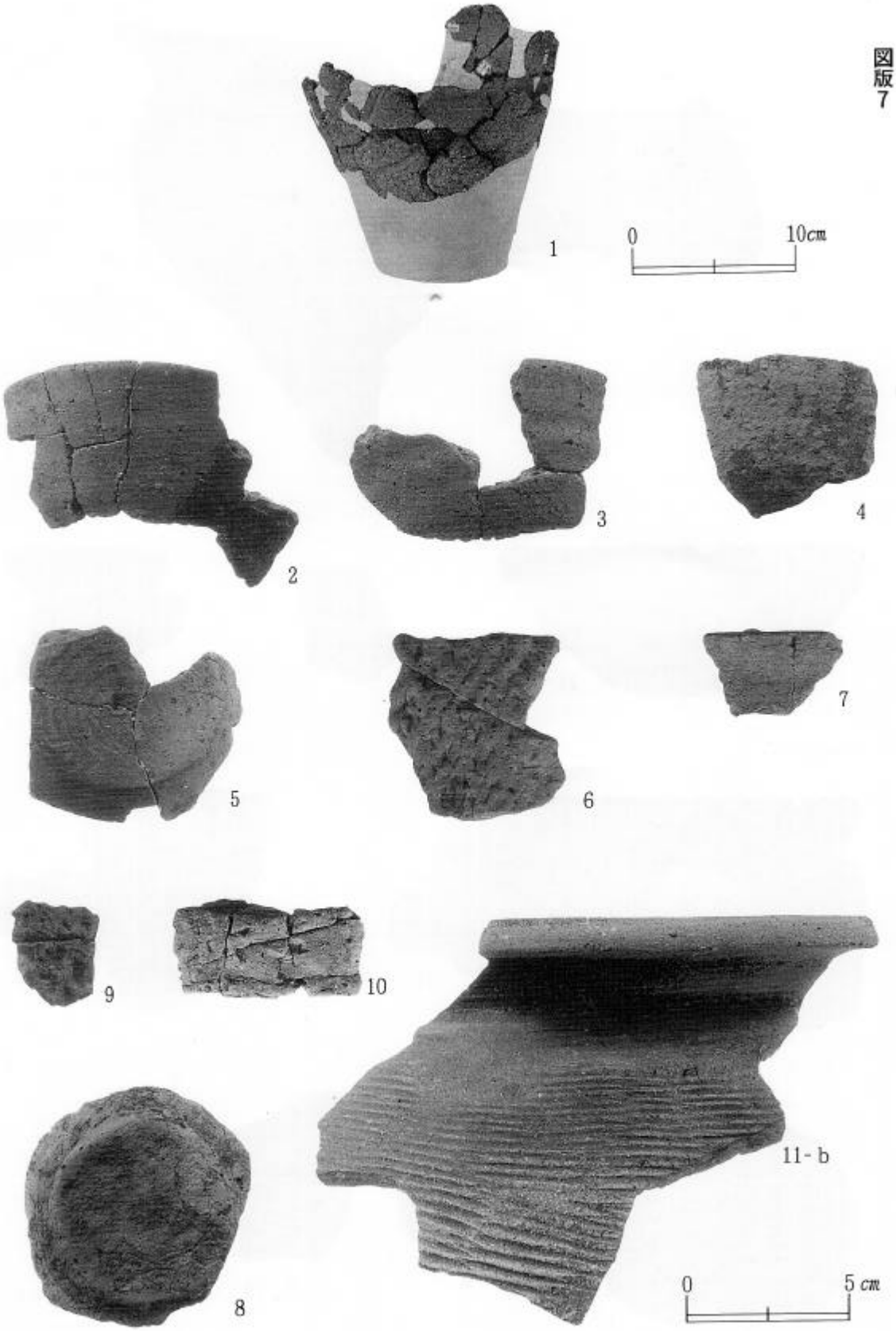
4　ＳＤ05溝跡（北東から）

5　ＳＤ18溝跡（北東から）

6　ナイフ形石器出土状況（南から）

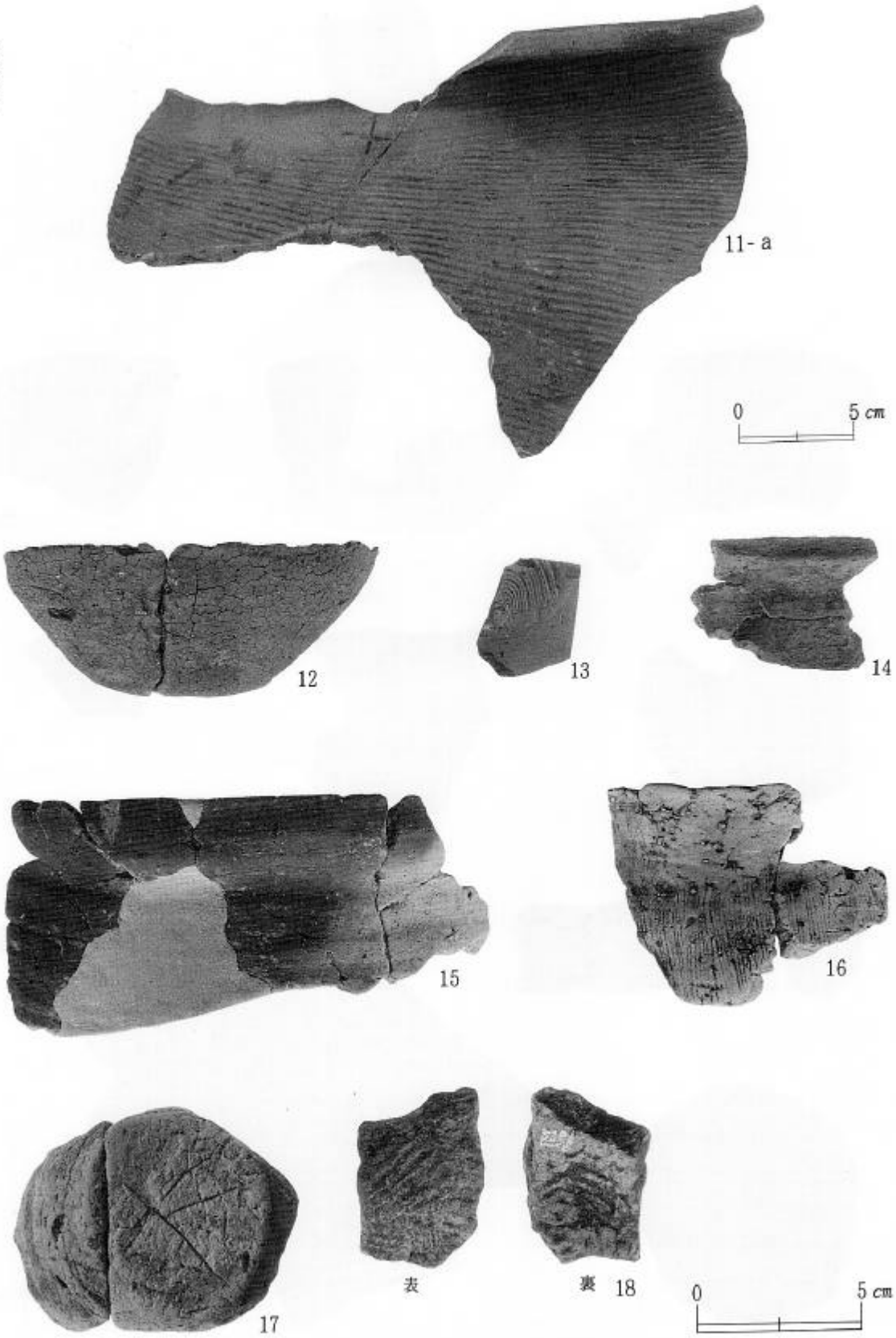
7　調査区の北西にある石碑（北から）

7　石碑の裏面（南から）

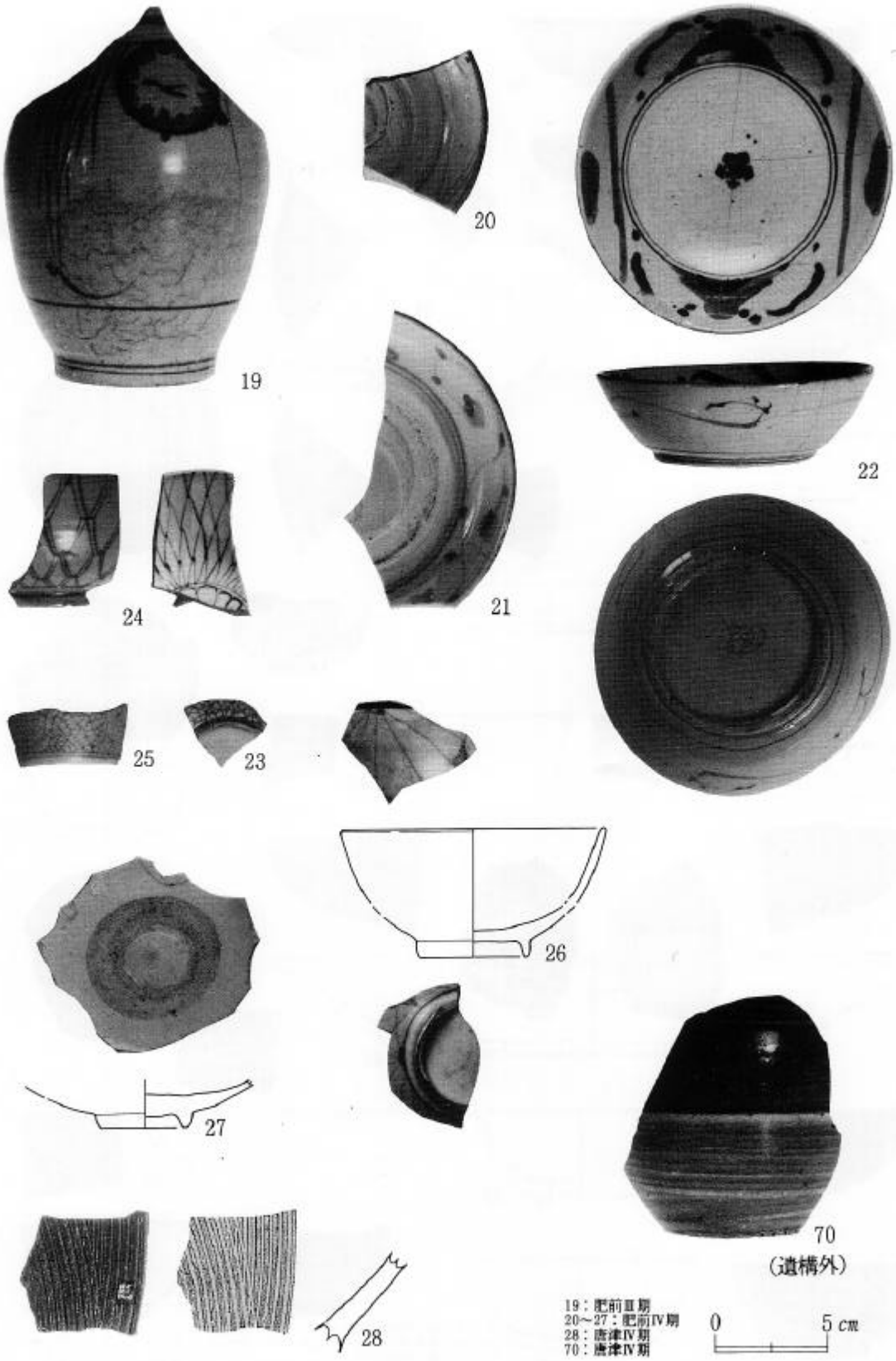


遺構内出土遺物（1）　縄文土器、土師器、珠州陶器

図版8

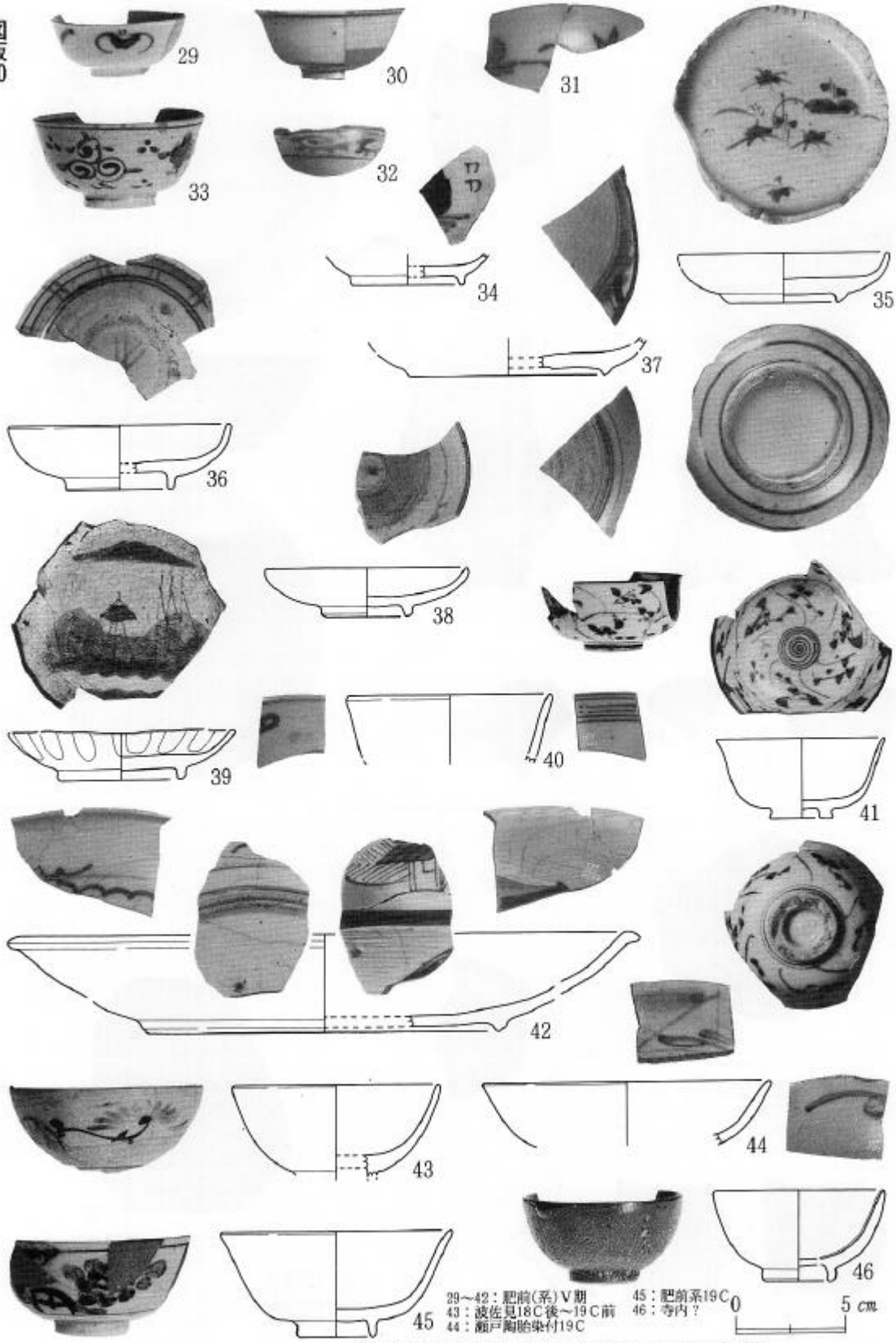


遺構内出土遺物（2） 土師器、珠州陶器

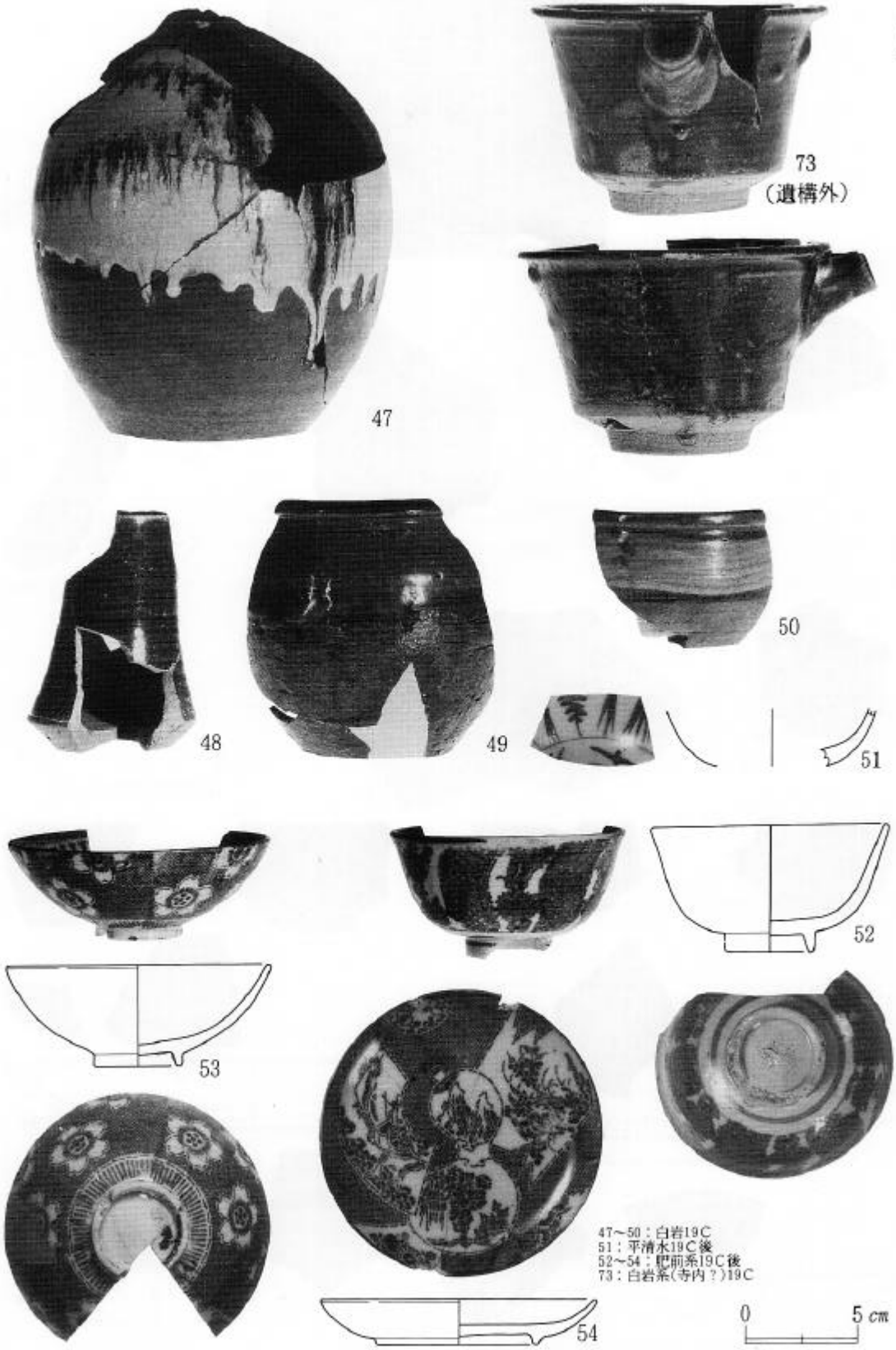


遺構内出土遺物（3） 陶磁器（S K01土坑）

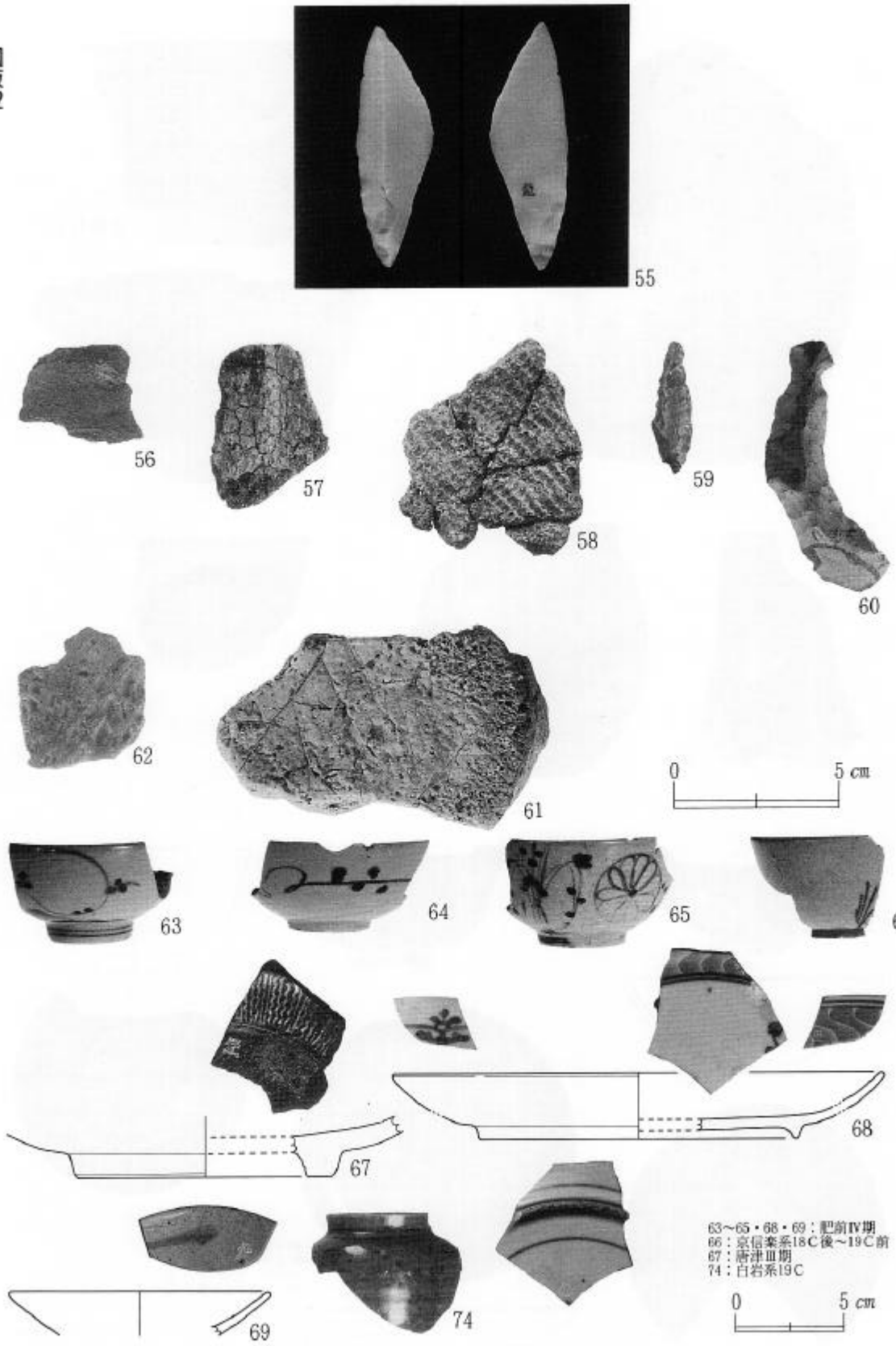
図版10



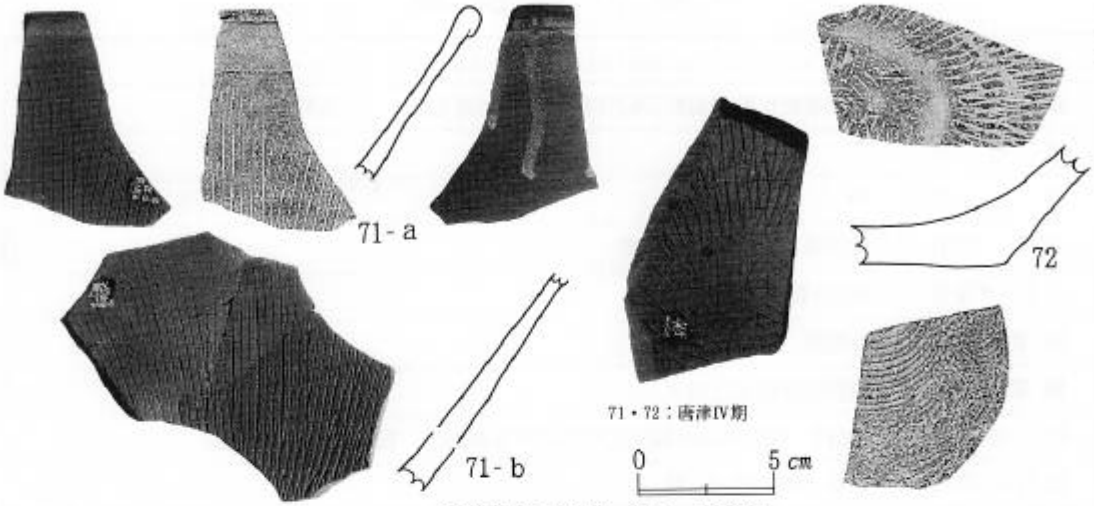
遺構内出土遺物（4） 陶磁器（S K01土坑）



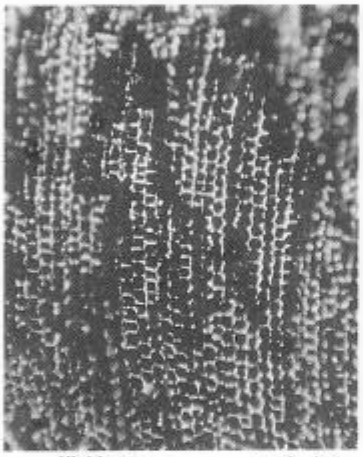
遺構内出土遺物（5）　陶磁器（S K01土坑）



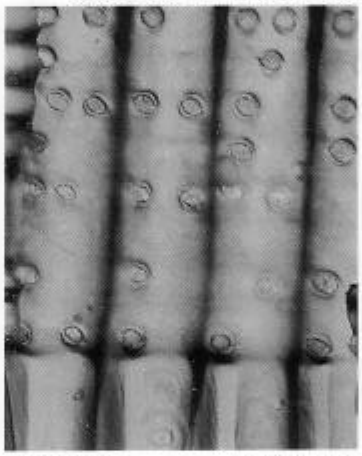
遺構外出土遺物（1）　石器、縄文土器、土師器、陶磁器



遺構外出土遺物（2） 陶磁器



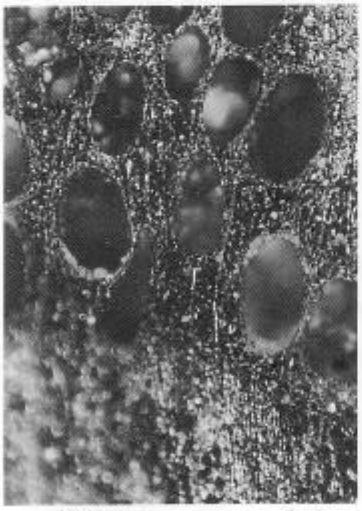
横断面 ―――― :0.4mm



放射断面 ―――― :0.05mm

接線断面 ―――― :0.2mm

1． No.1 スギ



横断面 ―――― :0.4mm

放射断面 ―――― :0.2mm

接線断面 ―――― :0.2mm

2． No.2 クリ

ＳＫ23土坑出土炭化材の顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	とうほくおうだんじどうしゃどうあきたせんはっくつちょうさほうこくしょ　このいせき
書名	東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIX　—古野遺跡—
副書名	
巻次	19
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第253集
編著者名	谷地薫
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　℡ 0187—69—3331
発行年月日	西暦 1995 年 3 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
古野（この）	秋田県（あきたけん）秋田市（あきたし） 上北手古野（かみきたでこの） 字（あざ）向老方（むかいおいかた）16外（ほか）	2201		39度 40分 02秒	140度 11分 30秒	19940511～ 19940617	830	東北横断自動車道遠野秋田線建設事業に係る事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古野	集落跡	縄文時代 中期後葉	竪穴住居跡　1棟 土坑　1基	ナイフ形石器 石錐・石匙・縄文土器 土師器（坏・甕・支脚） 須恵器（坏） 珠洲陶器（壺） 近世陶磁器（肥前・唐津・京信楽系・瀬戸・肥前系・白岩・白岩系）	ナイフ形石器1点が単独出土。 縄文中期後葉の複式炉1基。 平安時代の土坑埋土から十和田a火山灰を検出。 珠洲陶器は建物跡を囲む溝の中から出土。 近世後期～戦後の陶磁器が土坑から一括出土。18世紀・19世期の陶磁器の産地と器種組成が判明。
		平安時代	竪穴住居跡　2棟 土坑　1基		
		鎌倉時代	建物跡　1棟 竪穴遺構　1基 カマド状遺構　1基		
		現代	土坑　1基		
		不明	竪穴遺構　2基 溝跡　2条 土坑　1基 焼土群　1箇所 ピット群　1箇所		

あとがき

古野遺跡は、検出遺構数や出土遺物が少ない小規模な遺跡で、発掘面積も小さい。いわば地味な遺跡である。本書では各時代の様相を詳細に解明し得たかどうか心もとないが、少なくとも遺跡の立地する斜面に残された人々の足跡をたどり、ここを舞台に生活した人々の変遷を明らかにし得たのではないかと密かに思う。

発掘調査の当初は平安時代の集落跡であろうと予想していた。発掘が進むにつれて平安時代の火山灰を検出し、平安時代集落跡の好資料が得られたと喜んでいたところ、その後で旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の複式炉、中世の珠洲陶器やカマド状遺構など重要な遺構・遺物の発見が相次いだ。調査担当者が予想を越える成果に戸惑っていたにも拘わらず、発掘作業は、下記の熟練の皆さんによる着実でしかも臨機応変な働きと誠実な仕事ぶりのおかげで、和気藹々の雰囲気の中で順調に終えることができた。

整理作業に入ってから、現代の陶磁器に混じって17世紀末にまで溯る近世陶磁器が含まれていることが分かり、本田泰貴氏、羽柴直人氏の懇切なご教示を得て陶磁器の選別、実測等に着手したのは1月も末のことであった。結果として遺物実測図の約4分の3を占めるに至った陶磁器の実測図とトレース及び写真焼付等は、下記の皆さんと、偶然ながら近世白岩焼に縁の深い太田淳子さんにも手伝っていただいた。発掘調査及び本書の刊行は、これら多くの人たちの力を借りることなくしては遂行し得なかった。ここに記して感謝の意を表する次第である。

発掘作業従事者

佐々木金治郎　鈴木市太郎　鈴木末蔵　鈴木長治　三浦金司　三浦竹治
水野金光　石井いさ子　石井京子　石井よし子　大山なみ子　尾川泉
鹿子澤ミサ　佐々木暁子　鈴木ウメノ　鈴木キヨ　鈴木博子　三浦アエ子
宮田トキ子

整理作業従事者

佐々木　薫　藤原堅晃

秋田県文化財調査報告書第253集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIX
—古野遺跡—

印刷・発行　平成7年3月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話（0187）69-3331
発　　行　秋田県教育委員会
〒010 秋田市山王四丁目1番2号
電話（0188）60-3193
印　　刷　株式会社　三戸印刷所